
鷹の眼と厄手

上木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鷹の眼と厄手

【Nコード】

N 6 3 6 4 P

【作者名】

上木

【あらすじ】

各地に散見される非現実的な伝承や神話。それらを頭ごなしに否定するには、あまりに数が多すぎる。その言葉を聞いた瞬間、毎日に小さな発見をする事を楽しみに生きていた少女フェイレンの人生は一変した。自分が何気なく暮らしていた都市を舞台とした巨大な陰謀と実験。そこに現れた鷹の眼の女は、フェイレンに手を差し伸べ、フェイレンはその手を掴む決意を固めた。引き返せず、引き返すつもりもない。少女は鷹の眼の女の後を追ひ、大きな渦の中へと身を投じた。

第1話：憑者

毎日がつまらない。そう呟く学生が多かった。

変化がない。学校へ行つて家へ帰るだけ。両親の期待を胸に中央の大きな学校へ行くことのみを標榜とする。いつそ両親の期待を裏切つてやりたいが、こんな南の田舎都市から抜け出して中央で都会の空気の中を闊歩したい。そんな些細な欲望が、小さな反抗心を削ぎ落としていく。そういう毎日が、同じ教室で勉強する知人とも言えぬ知人達はずまらないらしい。

学校からの帰路だった。夕暮れが街並みを橙色に染め、背負った鞆が少しだけ熱を持ち、細い路地の暗闇が最も明瞭となる時間だった。

石畳に落ちた自分の影が大きく伸びている。それを眺めながら、フェイレンは道端に転がった小石を軽く蹴った。コツリという音を立てて、石が視界から消える。

（そんなにつまらないかな）

変化がないということはない。昨日とまったく同じ授業があるわけではなく、ちゃんと顔を上げていれば、見慣れてきた街の景色だって少し違うものに見えたりするのだ。

何より、フェイレンはこの都市よりも田舎の生まれであった。今いるこの都市は、南では一番大きな都市と言われている。フェイレンにとっては、この都市だけでも目新しいものが多すぎたのだ。ここに来てもう一年が経つが、飽きを覚えたことはない。市場で感じる喧騒も、城門付近の活気も、巡邏隊の行進も、全てが目新しい。

学校の友人達は、いつもフェイレンを馬鹿にする。「ウルガ・フェイレンです」そう名乗った時の友人達の反応はおかしかった。姓があることに驚いたのだろう。姓は高貴な身分の者しか持てないものなのだ。

（貴族なんて言っても、田舎の小貴族の一人娘なんだけど）

逆に、貴族の子達からは貧乏貴族の子、と言って嫌われる。

学校の友人達にはあまり受け入れられなかった。理由はフェイレンにもすぐにわかるものだ。中央に抱いた憧憬と、自らの境遇に対する劣等感である。自分はもつと出来るはずなんだ、どうしてこんな姓もない家に生まれたんだ。そういう思いと、それを中央へ行くことによって打開できると考える希望的観測。しかし両親の過度な期待に対する反発が、彼らの心を歪ませる。

（悪循環だよ、ほんとに）

意地でも成り上がってやる。そういう気持ちだが、フェイレンには理解できなかった。生まれがそうさせるのかもしれないとは考えたが、結論は出てこない。こうして学校に通っているのは、煌びやかな衣装を着て他人の上に立つためではない。単に両親が最低限の学を付けさせようと考えてのことだった。田舎の小貴族だからこそ、半ば裕福な市民よりも苦悩が多い。そのことは両親を見ていてよくわかる。

心地よい騒々しさが、フェイレンの耳を打った。市場が近いのだ。この都市——ネイザンは、中央通りに面して長く伸びた市場がある。かなりのものはそこで手に入り、夜遅くまで開いている店も少なくなかった。学校の友人達はこれも不満らしい。「中央は眠らない都市なんだぜ」という言葉がフェイレンの頭を過る。

（眠らないと疲れちゃうよ）

市場に入る前に、帽子を深く被り直した。何度かこの市場を歩いている時に人とぶつかって帽子を落としたことがある。その帽子は今まで一度たりとも救出できなかったことがない。人の河に流されてそのままどこかへ消えていってしまうのだ。

市場へと踏み込む。むっとした熱気は、実家の周りに生い茂っている熱帯林とはまた違う形で肌にまとわりついてくるものだ。一年も暮らしていると慣れたもので、人混みをすり抜けて歩く技に長けてきたという気が自分でもしていた。失くした帽子の数は七つだが、それはネイザンに来て半年と経たないうちの記録で、それ以降は一

度も失くしていない。

果実の香りがする。まだ十歳にも満たなかった頃は、使用人と兄と三人でよく採りにいったものだった。そういう事が許される程度の貴族であった。

フェイレンはあまり背が高くない。いや、年齢の割に低かった。人垣に覆われて、ろくに先の景色は見えていない。それでもこの市場を歩けるようになったのは慣れの賜物である。

夕陽に照らされた市場は、フェイレンの好きな景色だった。火を灯し始める店も出始めている。

罵声が聞える。それも気にしなかった。取っ組み合いの喧嘩などもよく見る光景なのだ。巡邏隊が駆けつけるまでは、周りの人間も囃し立てたりして楽しんでいる。

（何か買って帰ろうかな）

実家からネイザンを往復すると、二日は掛かる。だからフェイレンは下宿していた。夕飯などはそこで何も言わずとも出てくるが、夜に少しだけ食べるおやつなどはここでいつも買っていた。

人の流れに沿い、時折前を歩く大きな男の背中にぶつかりそうになりながら、食べ物置いてある辺りに視線を走らせた。

（あれにしよう）

砂糖を水に溶かし、そこに様々なものを加えて味付けしたちよつとしたお菓子がある。口の中で転がしているとそれが溶けてきて甘くておいしいのだ。学校の友達には子供っぽいと言われるが、フェイレンはそれが好きだった。いつも鞆の中に潜ませているが、ちょうど今日でなくなってしまったのを思い出した。

「お小遣いは大丈夫かい？」

店の主人はいつもフェイレンにこう言う。きっと実年齢よりも下に見られているのだ。フェイレンはいつもこの言葉に笑顔で答えていた。何と言っているのかわからないのだ。

「お嬢ちゃん、もうネイザンに来てだいぶ経つのにまだ左手は治らないんだね」

「たぶん、ずっと治らないんです。そういう病気ですから」

商品を包みながら、店の主人が言う。フェイレンの左手に付けている拘束具を見てのことだ。これもいつも言われることだった。どうにもこの主人は物覚えがよくないのか、他に言うこともないから社交辞令的にそれを口にするのかは知らないが、毎回同じことを言う。

「また来ます」

それだけ言って、店を離れた。いや、人に流されたというほうが正しいだろうか。本当にこの市場は、いつも人が動き続けている。寝静まるのは夜遅くになってからだ。

人の流れに沿いながら、不自由な左手を上手く使いつつ買ったものを鞆に放り込む。

左手は、生まれつきのものだった。左手というが、正確には左腕の肘あたりまで。渦を巻くように痣がフェイレンの腕を覆っている。痛みはなく、動きが不自由なわけでもない。拘束具であえて動かなくしているのは、使わない癖をつけるためだった。ウルガ一族にはこういう手を持つ者が時折生まれる。

自分の左手を見て、最初は気味が悪いと思っていた。大好きだった兄を一度だけ傷つけたのも、この左手だ。忌々しい気分になることもある。しかし、使わなければ何も害はない。そういうものだった。

兄は元気にしているだろうか。剣が達者で頭も良かった。今は中央の王立学術院で仕事をしているという話で、忙しいらしく滅多に会うことはできない。あまり細かいことは気にしない性質のフェイレンだが、兄のことだけは絶えず気になっていた。

鷹の眼。王立学術院の書士は、そういうふうに呼ばれることがある。

王立学術院の紋章が鷹であること、そしてその書士は例外なく天稟に恵まれた鋭才であり、並々ならぬ観察眼を持っている。学術書士の眼はどんな事象も見逃さない、だから鷹の眼なんだ。そう、教

師が言っていた。兄が行ったという理由でフェイレンも実際に調べてみたりしたが、化物のような頭を持った人間だらけであるという（鷹の眼かあ。兄さん、そんなに鋭い眼はしてなかったけど）

見当違いもいい所だろう。自分で思ってたフェイレンは苦笑してしまった。

ふっと、良い香りがした。石鹸のような優しく穏かな、不思議と気持ち安らぐ。そういう香りである。

人混みで、とにかく色々な物が置いてある市場。そんなところでこんな香りがするとは。フェイレンは見えないなりに周りを見渡した。

顔に何かが当たる。黒い。髪。前を歩いている女性の香りだった。

（考え込んでたせいで全然気付かなかったな）

背の高い女性だった。フェイレンの頭の頂点が、前を歩く女性の肩あたりだろうか。頭一つ分は大きいことになる。黒い髪が目の前でゆらゆらと揺れていた。

（良い匂いだなあ）

思わず、前を歩く女性を観察していた。背中髪は髪に隠れて見えないう。わかるのは背が高いということ。あとは、黒い服を着ているということ。

コートに近い形状の服だろうか。肩当に金色の刺繍が入っており、そこから縄のようなものが降りてきて折り返し、再び肩に戻っている。

腰のあたりにも同じように金系の刺繍が入っており、くるりと身体を一周しているのだろう。

（どこかで見た服だけど）

前に回りたかった。何故だか、この女性を正面から見たいという欲求が湧いてくる。

歩きながら、よろめかない程度に跳ねてみた。もちろん、何も見えない。鞆に入れた飴がガサリと音を立ただけだった。

いきなり、女性が振り返った。すぐに怪訝そうな顔をして前を向

く。どうやら視界に入らなかったらしい。

飴玉の音で振り返ったのだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。フェイレンの頭の中は、もう違うことで染まっていた。

（王立学術院の、鷹の紋章）

振り返った時に僅かに見えた、前を歩く女性の胸元。

そこに確かに、金色の刺繍の見事な鷹が、今にも飛び出しそうな様子で翼を広げていた。

*

女性は目的地があるのかないのか、そのまま歩き続ける。コツコツというブーツが石畳を打つ音が、妙に鮮明に耳に入ってきた。市場の喧騒に包まれているはずなのに、フェイレンの五感は目の前の女性にのみ集中していた。まるで、生死の境に立たされて、この女性が唯一の救いの道であるような感覚に襲われる。ここでこの人を逃したら、もう助けは来ない。そんな気持ちになった。

中央通に面した市場——いや、繁華街と言うべきか。中央通の真中には大きな噴水があり、昼間はそこで涼んでいる人達をよく見かける。夕方になり涼んでいる人はあまりいないが、橙色がネイザンを包み込んでいて、噴水から噴き出している飛沫も薄い橙色に染まっていた。噴水の輝きが昼間とは違う風情を醸している。

女性は、噴水を背にするベンチに腰掛け、俯いた。昼間なら常に先客がいてなかなか座る事の出来ないベンチである。ネイザンに来たばかりの頃は、ちょうどこの時間帯に噴水までやってきて、あのベンチに腰を下ろしていた。ちよつとした優越感である。いつもは座れない所に座れたという些細な幸せを噛み締めたりした。

女性に並ぶようにして、フェイレンもベンチに腰掛けた。少し覗き込んでみるが、俯き、両足の上に肘を立てるようにしてぐったりとしている女性の顔は、長い黒髪に隠れて窺うことができない。

鞆の中から飴玉を取り出し、口に入れた。甘い。やはり、この味は好きだった。あまり腹を満たすこともないから、下宿で出る夕飯を食べられないということもない。下宿の食堂に顔に行くと夕飯が出されるわけだが、出されたものは必ず食べきらなくては寮母に怒られるのだ。その日の夕飯の内容は張り出されているから、食べられないものが出る時は食堂に顔を出さずに自室で買ってきたものを食べてる子もたくさんいる。そもそも行かなければ、怒られることはない。

（動かないのかな）

腰を落ち着けてから、女性は微動だにせず俯いたままである。覗き込んでいるフェイレンにも気付いていない様子だった。

「……暑い」

俯いたまま、女性が言葉を漏らした。地の底から響く呪詛のような雰囲気を孕んでいた。

南方の生まれで、今も薄いシャツにスカートという身軽な格好で、日除けに帽子を被っている。自分の生まれと服装を省みると、この出身かは知らないが、この王立学院書士の制服はいかにも暑苦しい。夏が終わり涼しくなり始めてはいるが、それでもこの格好は辛いだろう。いつでも着ていなければならぬものなのだろうか。

（兄さんもこの格好……）

明瞭には思い浮かばなかった。兄は秀才というより、うすらとぼけた雰囲気を持った人だったからである。そうしている方が睨まれないとわかっていての行動であったとフェイレンは思っているが、世間の評価はお気楽な小貴族の一子であつただろう。

がさりと、鞆の中の飴玉がまた音を立てる。

「ん？」

それで初めて、女性が顔を上げた。

「ああ、市場からずつとついてきてたのは君か」

王立学術院書士——鷹の眼。まさしく、この女性の眼は鷹だった。炯眼である。眼つきが悪いというより、鋭い。人を射抜くような眼をしている。

「この制服に興味を持った子かな」

前屈みの姿勢のまま、女性が話しかけてくる。どうやら、王立学術院書士の制服を見て、「いつか自分もそれになりたい」と思っている子供だと思われるらしい。

王立学術院書士は有能な学者である証である。上院議員、下院議員といった政治的な足場とはまた別な形で、この国では優遇される立場にある。

「だ、大丈夫ですか？ 飴、食べます？」

ありがと。そう言つて、差し出した飴玉を受け取ってくれた。眼つきこそ鋭いが、それ以上に何かに参っているのが顔に出ていた。

「温暖な良い所だとは聞いていたけど、これは暑すぎるな。私には合わない」

独り言なのか、フェイレンに向けられた言葉なのか。判然としなかった。

「で、君は学生さんか」

「はい。書士さんを見たのは初めてだったので、つい後をつけちゃいました、すみません」

「いや」

よくある事だ、とばかりに女性が笑つてみせる。

まだ若い。兄と同じくらいの年齢だろうか。王立学術院書士として見れば、極めて若年の人間だろうと思えた。この国で最も厳しい入院制度を持ち、唯一王立の学術に関する国家機関。十代や二十代での入院は稀であるという話だった。兄がどれほどの努力をしていたのかは、フェイレンが一番知っている。この女性もまた、兄と同じような努力を積み重ねた人なのだろう。

「何か聞きたいことでもあるのか？ 私はもう、今日はすることが

なくてね。話にはいくらでも付き合えるが」

多分、何かの研究や調査でこのネイザンを訪れているのだろう。

「何の調査で、ネイザンに来たんですか？」

「そういう質問か。どこへ行っても学生さんから言われるのは、どうすれば書士になれますか、という事ばかりなんだが」

勉強だ、と答えるんだけどな。女性はそう付け足した。実際そういうものだろうな、とフェイレンも思う。何か特別な方法があるのなら、とづくに広まっていってもおかしくはない。

「何の調査か。そうだな、私のいる部署が専門としているのは少し変わっていてね」

「変わってる？」

「気候、地質、生物、植物。こうやって書士が足を向ける内容となるとそういうものが一般的な認識だろうが、私の場合は——そうだな、ツキモノとでも言っておこうか」

ツキモノ。話には聞いた事があつたし、兄が学術院へと行った時にその内容を調べた事もあつた。非常に幅広く隔たりのない研究が行われている機関だと思つたのを覚えている。国家利益に直接関連する内容のものもかなり多い。学術院で研究、開発されたものが軍事、民事問わずに利用されることも多々あるのだ。

しかし、ツキモノだけは別と考えてもいいだろう。そういう部署があるという事は王立学術院に関する文献で確認する事ができるが、それは隔たりのない研究をしていると認識する要因となっているだけのモノであつた。

ツキモノ——正式には憑者と記し、読みはヒョウジャである。ツキモノという呼称は、大人が悪戯をする子供を諷める時などに使われるような言葉だつた。夜更かしするとツキモノがお前を攫いに来るぞ。その程度のものである。この女性があえてツキモノと言つたのは、多分フェイレンが子供だと思われたからだだろう。

「王国全土から頭の良い人間を集めて研究に従事させようという機関だ。そういう酔狂な部署があつても不思議じゃない、と私は思う

が」

「そういう研究も本当にあるんですね」

「世間ではそういう非現実的なものはありえないとして排除されるが、頭からありえないと否定するには、各地に散見される伝承、古代から存在する神話、そんなものが多すぎる」

肺腑を衝かれた。そんな気分だった。

否定するにはあまりに多すぎる。

言われてみればその通りだが、今までそういうふう考えたことが、フェイレンには一度も無かった。

「もう一つ、お尋ねしたいことがあります。こちらが本題かもしれませんが」

「何でも」

「ウルガ・アナスイという人を御存知でしょうか？」

俯き気味だった女性が、首だけを捻って完全にこちらへと顔を向けた。本当に鋭利な眼をしている。見られているだけなのに、異様な緊張を覚えた。

（まるで見え方が違うみたい）

この女性はきつと、自分が理解している次元では世界を見ていないのではないか。そんな妙な考えまで浮かんでくる。それ程に、女性の眼は特徴的だった。

「アナスイの、妹か」

「はい、フェイレンといいます。兄は元気にしてますか？」

「ああ、元気さ。私と同じ研究をしているからな、仕事を共にする事もある」

声をかけてみて良かった。三日後には終業式がある。それで、夏の長期休暇に入るのだ。帰れば家族に会える。きつと兄からの手紙も届いている。ある意味、一番家が恋しかった時期と言ってもいい。そんな時に、兄の知人が現れた。

「話は聞いたことがある、フェイレン。君の兄と私は同年だからな、多少の親しみも感じている」

兄と同年。ということとは、この女性も二十三歳ということか。フ
エイレンより十上である。

「兄もツキモノについての研究を」

「それは聞いていないのか？ 彼は探索及び調査、院での研究。ど
ちらも出来る男だな、あのすつとぼけた態度とは裏腹に」

「やっぱりそう思いますか」

兄はいつも、自分が何も出来ない人間であるという姿勢を貫いて
きた。

「兄がこちらに来ることは」

「ほばないだろう。もし私の調査が急を要するなら彼や他の同僚に
駆けつけてもらう可能性はあるが」

二年前に帰省した時以来、兄とは顔を合わせていなかった。時々
送られてくる手紙を読むだけである。兄が何故そんなに研究を熱心
にしているのかは今までずっと知らなかったが、この女性と同じ部
署にいるのならば納得がいった気がする。自分の左手を、フエイレ
ンは女性の前に翳した。拘束具で縛り付けられ、まともに指も動か
せないようになってしまったものである。

「事情は聞いている。君が憑者であること、一族にはそういう者が
時折出ること。アナスイは、それを解明したいらしいな」

やはり、知っているようだった。兄の研究内容も相当なところま
で知っている可能性がある。しかし、今のフエイレンが聞いたとこ
ろで分からない事の方が多いだろう。

「その左手は、余人には悟られない事だ。アナスイからも御両親か
らも強くそう言われているだろうが。現に今は、ちょっとした奇病
という事になっているのだろうか？」

「はい、先天的な病気であると、皆が思っています」

「それでいい。憑者の歴史は迫害の歴史だ。神として奉られる事も
あったようだがな。どちらにせよ、人間としては扱われない。化物
だ」

王立学術院書士——鷹の眼からすれば、この左手はどういうもの

に映るのだろう。それを専門とする人間からすれば、憑者とは一体
どういうものなのだろう。

興味が湧いてくる。

「そろそろ頃合かな」

女性がすつと立ち上がった。やはり長身である。体つきはコート
のような制服の上からではよくわからなかった。

「もう、日が落ちた。私は宿に帰るとするよ。夕方からなら、多分
私はそこにいる。何か興味があるなら来るといい。憑者の少女とな
れば、私の研究にも関わってくるからな」

小さな紙を手渡される。宿の名前が書かれていた。暇ならば訪ね
て来いとも言ってくれている。

「ありがとうございます、また」

「ちゃんと寝るんだぞ、君は年齢の割に身体が小さい」

私が小さいのもあるけど貴女が大きいのもありますよ。そう言
うとしたが、その前に女性は視界から消えてしまった。人の流れに
入り込んでしまったのだろう。

宿の名が書かれた紙。裏面を見ると、名前が記されていた。どう
やら名刺の裏に書いてくれたらしい。

『王立学術院書士 カレン』

他には研究部署なども記されているが、フェイレンの眼を引き止
めたのはあの女性の名前だった。

(カレンさん)

姓がない。つまり、何の変哲もない市井の民の出身である事を意
味していた。姓は高貴な身分である者のみが持つ事を許される一種
の特権である。

一般の身分の者が王立学術院に入院するのは極めて難しいとされ
ている。理由としては、そもそも勉学のみ集中する事が難しいか
らだ。市井の民に通常そこまでの余裕はない。市井の民ならば下院
議員、貴族の子弟ならば上院議員。それを目指して、学校の友人達
も勉強をしている。王立学術院書士を目指している者は極少数だっ

た。

（きつとすごい人なんだ）

そして兄は、ああいう人達と並び立つ事ができる存在であるのだ。
そう考えると誇らしげに思えた。

第1話：憑者（後書き）

初めまして、上木と名乗らせていただいている物書きです。

この作品を手にとっていただいて、本当にありがとうございます。

『小説家になろう』への作品投稿は今回が初となります。

拙い文章かもしれませんが、自分が出来る範囲で全力を尽くしておりますので、少しでも読んでいただけるとすごく嬉しいです。

毎週火曜日を定期更新日とし、全7話の構成を予定しております。

プロットが完成しているので可能性は限りなく低いですが、もしかしたら話数が増える事はあるかもしれません。

しかし、火曜日の更新は絶対に行いますので、よろしく願いします。

尚、旧レイアウトに近い色合いを採用しているのは、私がその頃からのユーザーであるためこちらに慣れているという小さな理由からです。もし読みにくいという方がおられましたら、お気軽にご連絡ください。そういう意見が多いようでしたら、レイアウトを変更させていただきます。

今回は定期更新やレイアウトについてのお知らせとご挨拶をするためにこうして後書きを設けましたが、次話からはしばらく書くつもりはありません。最終話が終わった後にもう一度だけ書かせていただくことになると思います。

最終話でお会いできると嬉しいです。それではまた。

第2話：鷹の餌

歴史の授業は嫌いではなかった。いや、むしろ面白いと感じていると言っているだろう。

教師の授業に熱が入ったのか、今は教科書にはない話をしている。今から二十年前にあった、海辺最大の都市であるクレナゴにおける内乱である。

教鞭を振るう教師は、当時既に生まれてたらしい。よくよく考えれば、フェイレンが生まれる七年前の話であり、建国史上最大の内乱でもある。フェイレンの両親にも、まだ記憶に新しいだろう。

興味深いと感じた出来事は、とりあえず図書館に行つて文献を漁る癖がフェイレンにはあった。

「ここで戦った軍人さんには、俺の弟もいたんだ。戦死したが、栄誉の戦死であつた」

内乱を起こした人間達は、実に周到に叛乱を計画し、実行したものであつたとフェイレンも思っている。軍を動かす上での資金調達、利に聡い商人の抱き込み、叛乱軍の宿命である寡兵という事実をどう覆すか。全てにおいて計算されていたのだ、と文献を読めば読む程に感じた。

「こんなの関係ねえだろ」

近くに座っている学生が小声で呟いた。それに賛同する声もいくつか聞える。

（面白いのになあ）

彼らは上院議員、下院議員といった役職に就きたいし、両親からもそういう期待を否応なく背負わされた者達なのだ。フェイレンのようにただ面白いからという理由で教師の言葉を聞いているわけにもいかないのだろう。

確かに、こういうのは余計な話かもしれない。しかし勉学とは何も、知識を詰め込むためのものではないはずだ。クレナゴの叛乱一

つを取ってもそうだ。多くの人物が出てくる。彼らは何をどう考え、どう行動したのか。またその時、戦略や作戦はどう作用し、誰の描いた絵図が功を奏したのか。とにかく多面的な考察が可能なのである。そこから物の捉え方、考え方といった事を学ぶ事が出来るのではないか。むしろ勉強とはそういうもので、様々な事象を通して幅広い考え方を体得するものではないか。

鐘の音。フェイレンは眼で捉えていた教師から窓の外へと視線を移した。

授業の終わりを意味するもので、鐘は学校の頂点に備え付けられている。周りの学生達が一齐に背伸びをしたり、欠伸をしたりしていた。友達の席に集まって、昼食をとり始めたりもしている。

フェイレンの机に向かってくる者は一人もいない。それにはもう慣れていた。学校に来る前に寮母が持たせてくれた包みを開き、フェイレンも口に押し込み始める。

「ウルガ」

珍しく学校で呼ばれた気がした。それも姓である。

「はい？」

教師だった。さっきまで、歴史について熱く語っていた男である。もう五十歳にはなるだろうか。

「昨日、鷹の眼と一緒にいたと聞いたが」

鷹の眼。王立学院書士の通称。

（ああ、カレンさんか）

漆黒に金糸の刺繍が入った制服である。街中でも目立っただろう。その横に座っていれば、フェイレンに気付く人間がいてもおかしくはない。

「いましたけど」

「お前、妙な事してないだろうな」

「妙？」

教室の、他の学生達からも視線が集まっていた。

この教師に疎まれている事は、フェイレン自身はとくに気付い

ていた。何故そうなったのかわからないため改善のしようもなく今まで気にしていなかったが、こうして注目を集められると少し困る。

「書士さんとは、ただお話をしていただけですよ。私の質問に快く答えてくださいました」

「お前が？」

お前如きと。そういう顔を教師はしていた。ただ黙って授業を受けていて、試験ではいつも満点を取っているはずなのに。どうしてこうまで嫌われているのだろう。束の間考えて、フェイレンは思考を中断した。考えても詮無き事である。

ただ、想像だけはしてみた。鷹の眼と話をしていた。それはこの学校の気質からすれば懂れる事であり、そしてその話をしていたのがよりにもよってフェイレンなのだ。貧乏貴族の娘である。

「もういい」

「はい」

何かもういいのかわからなかったが、何も言わなかった。言ったところで何も変わらない。余計に睨まれるだけである。

鞆の中に入れた財布。その中に、カレンから受け取った名刺を入れていた。それを出せばさぞ教室の皆は羨ましがらうが、そんな形で注目を浴びたくもない。包みに入った食事を食べる事に戻った。いつの間にか、他の学生達も個々の会話に戻っている。

（今日、会いに行こうかな）

兄と同じ職業。鷹の眼。本当は興味があつた。自分も書士になりたい。そう考えた事もないわけではない。しかし、兄が相当な努力をして入院した様子を直に見ていたフェイレンにとって、それは途方もない事にも思えた。

上院議員、下院議員。そういう言葉がフェイレンの耳を打つ。休み時間にいつも聞く言葉だ。皆がそれを目指している。政治家にあまり興味がないフェイレンは一度も考えた事がない職業だった。

窓の外に眼をやる。曇天である。分厚い雲が空を覆い、街は灰色

だった。石畳の色と同化し、元々そういう色であつたかのように思わせる。それでもきつと、中央通に面した繁華街はいつもと同じ喧騒に包まれているはずだ。雨の日でも、あそこの活気は変わらない。ただ、教室はいつもより重苦しいものに感じられた。皆が抱える不安、焦り。そういうものが、曇天の日は顕著に出てくる気がする。「そういや、また墓荒らしいぜ」

周りの会話に聞き耳を立てる癖がすっかりついてしまった。学生達の間は噂を駆け巡るのが早い。面白い内容も、時々あつたのだ。墓荒し。こここのところネイザンで起きている事件の一つである。今の言葉が真実であるとするならば、今回で三度目の墓荒しという事になる。

（お墓を荒らして何が出てくるのかな）

不思議な事をする人もいるものだ。墓を荒らして、金品を奪おうというのか。しかし一度目も二度目も、戦没者墓地が荒らされている。通常、戦死者の遺体は親族の下へと送られるのだ。戦没者墓地は、引き取り手のいない軍人の墓である。当然、金品を奪おうにもまず埋葬の時に入れる者がいない。それなら貴族など、高貴な身分の者の墓を狙った方がずっと良いはずだった。

単なる悪戯だろうか。それとも反戦の意味を履き違えた者の犯行だろうか。それこそ考えれば切りがない程にフェイレンの頭に様々な事情が飛来する。その一つ一つを吟味するのは、フェイレンの癖のようなものだった。一人で思索に耽る事が単純に好きなのだろうと自分では判断している。

「ウルガ」

また同じ声で呼ばれた。先ほどの教師だ。また戻ってきたのか。「お前に手紙だ。朝、鷹の眼がお前に当てにと持ってきた」

封筒。封をしている印が、王立学院書士が使うものだった。だからさつき、あのような事を聞かれたのか。

鷹の眼。という言葉が学生の誰かが口にした。また注目を浴びる。気にしない事にした。

封を切り、中の手紙を取り出す。

『鞆で何処の学校の子かが分かったから届けさせて貰った。今日の夕刻、暇があれば私の宿に来て欲しい。来ていいと偉そうな事を言ったが、こちらから来て貰いたいと頼み直させてもらいたい』

そっという内容の事が書いてあった。おかしい注目を浴びる事になったらすまない、と詫びの言葉も添えてある。

（それは教師の渡し方の問題じゃないかなあ）

読み終わるまで、学生達の視線が自分から一度も外れなかったのを、顔を上げずとも分かった。なるべく平静を装い、手紙を鞆の中に仕舞う。

何が書いてあったのかを聞いてくる者は一人もない。大体の間は、兄が王立学術院書士であるのを知っているのだ。自分に対する風当たりが、それに対する嫉妬心から来ている事もあると理解はしていた。上院議員、下院議員。それよりもなる事が難しい王立学術院書士である人間が身内にいるのだ。学歴や職業で優劣をつける傾向が強いこの学校ならば、そういうものは羨む対象でしかないのだろう。それは教師も同じである。書士の俸禄もまた相当なものなのだ。研究費用も国家に保障されている。

それにしても、カレンから用事とは一体何だろう。会いに行きたいと思っていたフェイレンにとっては渡りに船であったのは間違いないが、不思議な事でもあった。カレンの役に立てるとはとてもではないが思えないのだ。ネイザンの案内くらいならば出来るかもしれないが、よく知りもしない都市を無闇に歩き回る程カレンの頭が回らないわけがない。彼女のような人間ならば、最初に都市の把握を行うように考えられた。王立学術院書士は、書士という名ではあるが、文武両道の人間ばかりである。兄からの手紙には『化物だから』とよく書いてあった。

「なあ、ウルガ」

「なに？」

同じ教室で学んでいる男だった。年齢は同じだった気がするがよ

く覚えていない。話しかけられる事がそもそも稀でありフェイレ
ンから話かける気もないため、顔をよく見る機会も、相手を知る機会
も少ないのだ。

「お前、鷹の眼とそんなに繋がりあんの？」

「兄さんがそれなのと、昨日知り合った人も」

一瞬、男の眼の中に何かが過るのを見逃さなかった。多分、嫉み
の類である。なんでこんな奴が。この学校はとにかくそういう人間
が多い。

「俺も繋がりもつときてえんだけど」

「うん」

「だから、繋がり」

「うん」

繋がりが欲しいなら探せばいいではないか。街に繰り出せば、カ
レンと会う事が出来るかもしれないし、他の鷹の眼がいる可能性も
ないとは限らない。

「だから！ 便宜を図ってくれねえかって言ってるんだよ！」

器に入った水。目の前まで迫ってきたのはわかっていたが、避け
られなかった。被っていた帽子をすり抜けて、頭が濡れる感覚が伝
わってくる。

「お前はほんとに愚図だな、全部言わなきゃわかんねえのかよ！」

「そういうことはないけど、私は紹介できるような立場にいないん
だよ」

本当はわかっているのだ。便宜を図って欲しいと言外に伝えてき
ている事くらい。しかし、そういう思考を理解できるかはまた別で
ある。きっと、そういう人間と知り合いになっておけば自分に得が
あるかもしれない。そういう考え方から生まれくる言葉なのだ。
フェイレンはあまりそういう事が好きではなかった。いや、嫌い
と言っていい。誰もが自分の得になるかならないかで考えている。自
分が出世できるかどうかしか考えていない。田舎の貧乏貴族だが、
それでフェイレンは満足していた。兄もまたそうだった。自分が持

っているものを全て否定して、虚勢を張って。そんな行為に何の意味があるというのだ。

「てめえみたいな貴族の娘にはわかんねえかもしんねえけど、こっちは必死なんだよ！」

「この教室で、貴族は何も私だけじゃないよ。それに、必死で頼れる他人の力を君は探すの？」

ばしゃつと音がする。また水を頭から被っていた。

「ここにいる全員、お前とは違って苦労してんだ！ 必死に勉強してんだ！ お前みたいになら教室に座ってるだけで試験を楽に通れる奴なんていねえよ！」

「私も勉強はしてるよ？ あんまり板書はしないけど」

確かに試験の結果は教科を問わずいつも満点だった。しかしそれは、やるべきだと教師が示した範囲を全て暗記しているからである。決して威張れる事ではない。

（乾かしながら帰らなきゃ）

帽子を取る。すっかり変色していた。水が滲み込んだせいだ。

*

「優秀な人間は苦労する」

宿の前で待っていてくれたらしく、邂逅一番にカレンはそう言った。夕刻である。濡れた帽子はとくに乾いており、また被り直していた。

質素な宿だった。王立学院書士ならば、もっと豪華な宿を取るものだと思ったが、実際そういうわけでもないらしい。もしくはカレンがこういう所を好むのだろうか。寂れ、少し黴が生えている看

板に消えかかった文字で宿の名が描かれている。他には装飾らしい装飾もなく、立地は細い路地の薄暗闇の中であつた。

「失礼だったが、少し学校の人間に君の様子を教えてもらつた」

「あまり馴染めてないです、恥ずかしい話ですけど」

「いや、学校の質が知れるな。私が制服のまま訪ねただけで、鷹の眼が来たと大騒ぎだ。校長なぞ頭が低すぎて腰が折れそうな勢いだつた」

あの校長なら、確かにそうかもしれない。強い者には何も言わず、弱い者を踏みつける。そういう気質を持った人間だと、フェイレンは最初に見た時に感じた。

「鷹の眼という国家でも随一の機関に所属する者の妹という嫉み、成績は良く学校側からすれば良い宣伝文句の材料となるかもしれないという計算。しかし君自身にはそこまで向上心がないという事から来る不安感。人間の醜さを改めて目の当たりにさせられたよ、対応してくれた教師にはね」

嘲笑するような響きを、カレンの言葉は醸し出していた。ああいう人種があまり好きではないのかもしれない。

「歩きながら話そう」

カレンが手を差し出してくる。しばらく、それが何を意味するのか分からなかった。気付くとすぐにその手を握り返していた。手を繋いで歩き出す。兄の事を知っているだけに、親しく接してくれているのだろうか。

少し恥ずかしかった。だが、それ以上に嬉しいという気持ちが上回る。ネイザンに来て、一度もこういう風に接してくれた人はいなかった。

細く薄暗い、少し湿った路地を抜け出して、繁華街に出た。曇天だから、市場の露店はいつもより早く簾を焚き始めている。

「実は困った事があつてな。この制服がここまで南方で堪えるとは正直思っていなかった。アナスイの助言を素直に受け入れておくべきだったかな」

「兄が何か？」

「南方は暑いぞ、と。何を当たり前の事を言ってるんだと私は笑っていたが、どうやら私は侮っていたようだ」

南方から出た事がないフェイレンには、この気候は当たり前のものである。いつも目の前にあった。しかし、カレンにとっては違いかもしれない。

この国は広いのだ。国土に雪に覆われた土地から密林に近い様相を呈している土地まである。

「君の被っている帽子。可愛らしいと思ってな、それを買った店を教えて欲しい。私も気候に合ったものを身につける必要があるからだ」

「そういえば、昨日も暑いとばやいてましてね。言ってくれば、昨日にでも紹介できたのに」

「いや、昨日は少し事情があつてな」

カレンが曖昧に笑う。炯眼が少しだけ緩んだ気がした。

（可愛いなあ。嬉しいけど、カレンさんが可愛い？）

漆黒に金糸の刺繍の入った制服を着こなし、人を射るような眼をしていて、長身である。誰が見ても可愛いという印象を受けることはないだろう。話し方も男性的である。そんなカレンにも、可愛いといったそういうものを好むところがあるのだろうか。そうならば、少しかだけ親しみ易さを覚える。優しい人なのだという事は昨日と今日で分かったが、やはり第一印象は残っているものである。

「南方の人々は元気が良いんだな、昨日は面食らったよ」

「そういうものですか？ カレンさんはどこの出身なんです？」

「西域だ。誰にも三都の出身だと思われるようだ、私は田舎者だよ」

三都とは、学校で同じ教室にいる皆が目指している場所と同義である。この国で最も大きな三つの都市だ。政治的な機関やこの国の重要な機構は全てそこに集中している。

カレンから漂う雰囲気は、確かにそういう印象を想起させる。振

る舞いも口調も男性的だが、挙措からは何処か上品さが滲み出している。それは隠し様のない当人の持つ空気なのだろう。

「西域かあ、行ってみたいなあ」

「悪い所ではない。ただ、エレニア山脈を越えるのが些か手間だな」

「それさえもやってみたい、という気がします」

「好奇心が強いならそうかもしれない。私はもう嫌で仕方がないが、ファマ河を遡上しているあたりで既に嫌気がさしていつも文句を垂れているよ」

「あんまり想像できませんね」

「どうやら私は完璧超人か何かだと思われる事が多いらしい。鷹の眼で、何しろこの面だ。本当は姓もない西域出身の田舎者だというのに」

背の高いカレンを少し見上げながら喋っているという格好だった。傍から見れば見れば姉妹のように見えるだろうか。そんな事を考えてしまう。

（といっても、私は年より幼く見られてるし）

年齢は十三歳だが、大抵は下に見られている。普通よりも小柄だからだろう。カレンにも昨日の別れ際に「ちゃんと眠れ」という旨の事を冗談めかして言われたのを思い出した。

人の流れが少し強くなった。何か催し事でもやっているのだろうか。離れそうになった手を、カレンが強く握り直してくれる。

「本当に賑やかな都市だ。それも三都のように整理された賑やかさではないな」

「今日は一段と賑やかですね、どうしたんだろ」

「お、巡邏隊だ」

巡邏隊——ネイザンの近くに駐屯している軍が出している治安維持のための部隊である。

声を上げると同時にカレンに抱え上げられた。道の端に寄る。

「子供みたいに扱って済まない」

「確かに私は小さいですけど……」

市場の人混みを巡邏隊が掻き分けていく。何かあったのだろうか。カレンの視線も、巡邏隊の行進を捉えて離さなかった。

必死の形相をしている者がほとんどだった。その中に数名、情性に引きずられるような生気のない顔の隊員が含まれていたような気がした。巡邏隊にも色々な種類の人間がいるのだろう。皆が仕事熱心なわけではない。

「市場を突っ切るなんて珍しいですよ。邪魔になるから、普段はそんな事を絶対にしないのに」

「ただ事ではなさそうだったな」

市場がいつもとは違う喧騒に包まれる。何事だ、という言葉と理由も定かではない勝手な憶測が飛び交い始めた。それに耳を傾けていると、カレンが石畳の上に降ろしてくれた。

「野次馬というのはあまり好きじゃないくてな、私は。目的通り、案内してくれるか？」

「はい、了解です」

手を繋ぎ直して、再び歩き出す。

（野次馬……）

カレンは野次馬があまり好きではないと言った。フェイレン自身も事件というものあまり興味はないから見に行こうとは思わない。しかし、カレンの表情は見逃さなかったつもりだった。見に行きたいと思わないというより、見に行く必要がないという表情だった。何が起きているのかは大体把握している。炯眼が、そう語っているように感じられたのだ。思い過ごしかもしれないから、あえてそれを問う事はしない。しかし今の表情を忘れないようにしようと心に決めた。

「あ、ここですよ、カレンさん」

「ほう」

カレンが取っていた宿とは打って変わって、店の表から所狭しを洋服が並べられた店舗である。装飾も華美だ。

進もうとしないカレンの手を引いて、フェイレンが先を歩いた。あまりこういう場所に來た事がない、とカレンの顔に書いてあったのだ。人と喋ることが少なかつたせい、人の表情を読む癖がすっかりついてしまっている。

「ずっとこの制服を着ていたからな。違う服など久しぶりだ。動きやすければそれでいいんだが」

「調査の障害にならなければいいんですね」

「そういう事だ」

店に踏み込んで、手を離れた。すぐにカレンが店主に絡まれている。どんな服が欲しいのだ、値段はどの程度がいい。様々な質問を投げられている。慣れていないらしいが、自分がとやく言うことでもないだろうと、フェイレンはフェイレンで店を物色し始めた。服にあまりこだわりはないが、帽子というものが昔から好きだった。ずっと被っていたと言っている。

ずらりと帽子が並べられた棚の前に立つ。上の方には手が届きそうもなかった。

（新しいの、買おうかな）

今の帽子は気に入っているが、そろそろ古くなってきた。それに、今日水をかけられてしまってもいる。

初めてネイザンに来て、市場に帽子が流された。その時は下宿に帰って一晩泣き明かしたものだ。あの帽子は、両親が買ってくれたものだ。だからだ。それから何度も帽子を失い、初めての長期休暇で実家に帰った時、両親に泣きながら謝ったのもよく覚えていいる。両親は「そんな事で謝らなくても大丈夫」と言ってくれたが、辛い思い出だった。あれからもうすぐ一年が経とうとしている。

そういえば、あれからずっと泣いていない。泣く程悲しい事がきつと無かつたのだろうか。それとも、毎日が同じでつまらないと言う学校の人間達に辟易しながらも、実は自分も毎日に慣れてしまつてどこか感動を失ってしまっているのだろうか。どちらにせよ、良い事とも悪い事とも言えない。

（ちょっと高いなあ）

一つ、気になる帽子があった。フェイレンは、深く被ることも浅く被ることも出来る形状の帽子を好んでいた。理由はわからないが、昔からそういう形のを好んでいたと両親は言っていた。キャスケットという名前の帽子だ、と母親が言っていた気がする。ハンチング帽を大きくしたような形をしているのだ。フェイレンとしては、暖かい時期でも熱が籠るという感覚があまりなく、日除けにもなるし、おまけに髪がぺたんとなってしまう事も少ない、理想的な帽子であつた。

「欲しいのか？」

「私のお小遣いではちょっと手が出ないですけどね」

カレンは、腕に白いシルクのシャツを持っていた。ズボンや靴はコートの下に着ていたもので代用するらしい。よく見ると髪留めも手にしていた。カレンの背後では残念だという表情をした店主が立っている。カレンは背丈もあるし、きつと栄える服がたくさんあったのだろう。この店主は売る事よりも、訪れた客に似合う服を持つて帰って欲しいという人だった。無ければ作ってくれるという。

「これが」

フェイレンには手の届かない位置に置いてある帽子だった。軽々と手にとって、そのまま店主のへと手渡している。「本当にそれで大丈夫ですか？」という店主の心配そうな声が聞えた。

「案内してくれたお礼だよ」

包装された帽子をぽんと手渡される。

「あ、ありがとうございます」

「私はちよつと着替えてくる。今すぐこの制服を脱ぎたくてな」
店主に案内されるカレンと両手で抱えた帽子を交互に見た。

（プレゼント……）

思わず頬が緩んだ。後でちゃんとお礼を言おう。人に何かを貰ったというのは、よくよく考えれば両親と兄以外からは初めてだった。下宿に帰ったら包装を解いて、明日から学校にも被っていこう。

今度は絶対に水をかけられたりしないように気をつけなければ。

*

カレンが取っている宿に戻ってきた。じめじめした細い路地にある宿だから中はどんなものだろうと思ったが、思っていたより綺麗で少し驚かされたのが本音である。

支払いなどを済ませるカウンターを兼ねた台がキッチンとこちらを分けており、客がいる側には卓が二つ置かれており、椅子はそれぞれの卓に二つずつだった。宿に入ってすぐ右手に階段があるところを見ると、どうやら宿泊施設は二階にあり、一階は小さな食堂として機能しているようだった。客が入ってくる気配はない。

「この主は私の知り合いでな。主人が中央にいた頃に知り合った」中央とは三都の別称である。一般的には三都の事は中央と呼ぶのだ。三都という言葉を使う場合は、三つの都市を純粹に指す場合が多い。

カウンターの向こう側から、宿の主人が丁寧に頭を下げる。南方の人間にはあまりない仕草だった。中央にいた頃の名残というよりは、南方の人間ではないのだとあえて示すためにやったようにフェイレンには見て取れた。

「今回の私の調査に宿を提供してくれている。何も知らない人間が経営する宿より、何かと都合が良い。扱う内容が内容だからな」

「確かにそうかもしれませんね」

カレンが宿の主人に向かって頷いてみせる。

「アナスイ君の妹さんという事で。頭が良い子なようだ。後はそれを表情に出す事がなければ、きつと立派な調査員になれる」

主人が言いながら、大皿を二つ卓の上に出す。女二人で食べきれるとはとても思えない量の料理がそこに並べられていた。

「兄の事を御存知なんですね」

「聡明な方でした。そしてその素養は、貴女にもあるようですね」

「まだ十三の女の子だ、主人」

「カレンさん、貴女が中央に出てきたのはこの方と同じ年齢だったと記憶しておりますが」

それだけ言つて、主人はカウンターの奥へと戻つていった。まだ何か作っているらしい。これ以上出されても食べられない、と言いつうになつたが止めた。カレンがもしかしたら大食家なのかもしれない。

「少し見ただけで、あれか」

「はい？」

「主人が頭を下げただろう。それを見た君は『南方の人間ではないと示すためにあえてあの人はそういう頭の下げ方をしたんだ』と氣付いた事だよ」

確かにそう思った。だが、何処からそれを読み取つたのだろう。

「君はきつと、どうやってそれを読み取られたのだろうと考えるだろうが、こちらにとつては十三歳の女の子が主人の仕草の意味を読み取る事のほうが驚きなのだ」

兄と同じ素養が備わっているとは、そういう意味なのか。

「私がさつき君に会つた時、優秀な人間は苦勞する、と言つたのもそういう意味だ」

自分が優秀であると考えた事が、フェイレンにはなかった。これは謙遜でも何でも無い、正直な思いである。兄に比べれば自分など大したことはない、という思いが必ず頭を過るのだ。兄はいつも、何も出来ない無能な人間、という装いをしていたが、実際は誰よりも英邁であつた事はフェイレンがよく知っている。何をしても、兄に勝つ事は出来なかつた。そして王立学院書士となっている。鷹の眼となるのは、この国での最高峰の頭脳を持っている証なのであ

る。

「巡邏隊が中央通を駆け抜けた時、私があれに興味がないのではなく、野次馬が嫌いなわけでもなく、何が起きたか把握しているから見る必要がないと判断した事にも、君は気付いているだろう」

確かにそう思った。しかし自分の事よりも、宿の主人やカレンが自分の考えている事を全て読んでいるのにフェイレンは感嘆した。
(なんで分かったんだろう)

考えている事が筒抜けしている。やましい思いがあつたわけではなく、恥じるところも一切ない。だから構わないが、これは空恐ろしい事なのではないか。

「素晴らしい事じゃないか、学校の試験などモノともせず、かといつて勉強一筋の馬鹿とも違う。人と接し、その行動の裏を読む能力も身につけている」

「人の顔色を常に窺っているだけ…… かしれませんが」

「それは少し違うな。君は学校では友人というものがおらず孤立しているという話だが、そういうものを一切感じさせない。顔色を窺つてばかりの人間というのは特徴があるからな、すぐに分かる」

他人をよく見る癖。行動の意味を推し量る癖。きつとそれは、拘束具によつて封じられた左手に起因する。

本当の事を決して知られてはならない。何人たりとも真相を悟らせてはならない。優しかった両親だが、唯一厳しく言いつけられたのがそれだったのだ。ただ一つの両親の言いつけ。いや、嘆願とも取れるような内容だった。それを守らんとして、そういう行動、思考をする癖がついてしまった。悪いとは思っていないが、こんな事ばかり考えて、と自分を戒める時がある。

「カレンさん、どうせ食べきれないのでですから、これで」

「そんな。何だかんだ、数日かけて食べ切っているだろう」

「作り立ての料理を、適量食していただきたい。料理人としてはそう思います」

また、大皿が一枚出てきた。一度にたくさん作つて、それを何日

にも分けて食べる。何となく、カレンの中央における生活が垣間見えたと気がした。

「それにしてもその格好。やはり南方に鷹の眼の制服は合いませんか」

シルクのボタン留めのシャツをズボンに突っ込みベルトで固定、そしてそのズボンの裾はブーツの中へと仕舞われていた。髪は無造作に結われている。制服と比べるとかなり涼しげな格好をカレンはしていた。飾り気がないと言えないが、それがカレンに合っているという気もする。

「不都合もあるが、しばらくは大丈夫だと私は踏んでいる」

「そうですね、私もそう願います」

宿の主人とカレンがどういう関係なのかはわからない。しかし、十分な信頼関係が築かれているのだというのは察せられた。

主人が隣の卓から椅子を引いてきて腰掛けた。夕飯を共にとるのだろう。

「憑者の事で、何か気になることはないか。君なら知りたい事も多いだろう」

出された料理を口に運びながら、カレンが言った。何でも聞いてくれという態度である。昨日のような街中ではない。隠し立てしている研究内容ではないが、ああいう場所よりはこういう人目につかない所のほうが話し易い事も多いのだろう。

「憑者とは、そもそも何なんでしょう？」

「それが、わからない。憑者にとつて最も大きな謎だろう。私の研究内容はそこに重点を置いていっているとでもいいな。どこで生まれ、どのように伝わり、進化或いは退化したのか」

兄のように憑者を通常の人間に治したいと思って研究している人間もいれば、カレンのように憑者そのものについて研究している者もいるという事らしい。

「西域、君なら分かるだろう」

「カレンさんの出身もそこだと。エレニア山脈を越えた先にある砂

漠の大地」

「私の出身は砂漠とまでは言えない荒野だったが、それだ。これは文献に残っているのだが、この大陸にいる人間にはかつて、西域は聖域と呼ばれていた」

「聖なる領域」

「そう。西の領域という意味で西域と呼ばれているが、この語源が聖なる領域であるという説が非常に強い。私もそうだと思っている」
この国の地図をフェイレンは頭に浮かべた。今いるネイザンは、地図で言うところの南寄りの都市である。

「西域に至るにはエレニアの峻険な山脈を越えるしかない。山脈が割れるようにしてファマ河が通っているが、結局は同じだ。踏破するしかない。昔の人間からすれば、それはもう未開の地に相応しかっただろう。私の出身地である荒野でさえ、だ」

「確かにそうです」

「大昔から人の流通はあった。しかし微々たる数だ。今でさえ西域の奥地へ行った者のほとんどは帰って来ない。稀に帰ってきた者はまったく違う文明があったという話をするが、それは全て砂漠が飲み込んでしまう故に真相が判然としない。ただ憑者は、その西域から流れてきた、私達とは違う種族との混血ではないか、と考える説がある」

「もしそうなら、ウルガー一族も」

「何代かに一人。そういう出現率を考えると、血が薄まってきているからなのかもしれない。昔の西域の奥地からの生還者は、揃いも揃って夢物語を語っていたようだ。そこに住む人々は手を触れずに物を動かし空を飛ぶことができた。都市には酒が噴き出す噴水、肉が生る樹木。街並みは所狭しと宝玉で彩られ、城壁は黄金で出来ている、とな。酒池肉林を更に欲望に忠実に語ったような内容だ。正直、都市の話はあまり興味がない。ただ、手を触れずに物を動かす事や、空を飛ぶという事。これは憑者の症状と酷似している。そういう憑者の記録は残っている」

フエイレンの左手。カレンにもその症状は伝えていない。しかし、手を触れずに物を動かす、空を飛ぶ、という力と共通項があると言えば、ある。

「しかし、違う事例もまた存在する。調べられる範囲で調べても、過去に一族で憑者であった形跡が一切ない者がいる。そして、フエイレン、君のように先天的なものではない。後天的に憑者となる人間がいる」

「後天性の憑者……？」

「そうだ。多くの場合が妄執に取り付かれ、取り返しのつかなくなつた者だつた。物狂いの類だと考えていい。そういう人間が憑者となる事もある。聖なる領域と呼ばれた場所から来た者達とは、まったく別な形の進化、しかし結果は同じだ、人間を超越している」

先天性と後天性。憑者にもそういう概念が存在する。自分の左手しか知らなかつた故に、今まではずっと先天性のものばかりだと思つていた。

「天使と悪魔みたい」

「先天性の憑者は理性を強く持つている。自らの力が異常である事をしっかりと理解している。しかし後天性の者の多くは違う。陰惨な事件を引き起こした例も多い。先天を天使、後天を悪魔と考えた人間がかつていたのかもしれない。それが神話において残っていると考ええる事は可能だ。近い形状、同種と捉える事も出来る異質な力を持ちながら、思想には天地の差がある」

饒舌に語るカレンの眼は、どこまでも平静だつた。専門としている研究を語っているのだから少しくらいは輝きを帯びるかと思つたが、そういうわけでもないらしい。

「私の研究はそういう憑者の歴史のようなものだが、おそらく私が一生をかけても知るのは難しいとだろうな」

カレンが、少しだけ身を乗り出してきた。

「神は何処だ？」

肌が粟立つ。

カレンの眼が、初めて微かな光を帯びた。

先天性の憑者を天使とし、後天性の憑者を悪魔と太古の人々が見立てたとするのならば。その憑者を創造した神たる存在は何なのか、何処にいるのか。

カレンの言う、憑者は何処で生まれ、どのように伝わり、進化或いは退化したのか。研究内容の全てが、神の所在に集約されている。「尤も、私の希望的観測も多々含まれてはいるが。人間の突然変異種であると考えている者もいる。しかしそれでは、砂漠に閉ざされ往来する事の叶わない地はどうなる。聖なる領域とまで太古の人々に言わしめた理由は単なる迷信深さから来るものなのか。疑問は尽きない。先天性の憑者のみならば別の説明も出来る。しかし、後天性の憑者が存在する事実が憑者研究の障害となっている。聖域の向こうに、かつて神に魅入られた民族がいた。先天性の憑者は彼らの血が入った者であると考えれば。後天性の憑者は、かつて存在した民族と同じく、神に魅入られた人間なのだとすれば？」

「私には大きすぎる話です、非常に興味深いですが」

正直な、心の底から出た言葉だった。これが王立学術院書士か、と思う。憑者研究のために生涯を懸けている人間の言葉なのだ。

神を探す女。そう言えば、ただの気が違った研究者のように聞える。しかしカレンはどこまでも正気で、真摯だった。超難関と言われる王立学術院の試験に合格した者でもある。つまり、カレンは一般に存在している学問のほとんどに精通していると言えるのだ。基礎がしっかり組み上がっている。その上での発言は、気が違った人間の妄言とは重みが違う。

「鷹の眼でも、神は何処だ、なんて言っているのは私一人だな。同じ憑者研究をしている者達は理解してくれているが、それ意外からは私も頭がおかしい人間だと思われる」

「王立学術院の中でも、憑者研究は特殊な研究所であると言えますからね」

主人が最後に付け足すように言った。やはり、そういう所でも憑

者などというものは何処か非現実的な事象として扱われているという事か。

「後天性の憑者、というのに純粹に恐怖を感じます」

「間違いない。彼らは妄執に取り付かれているし、人間と言えないような形をしている者も中にはいる。悪魔なんだよ」

それ以上言ってもいいのか、という表情を主人がする。フェイレンはそれを見逃さなかった。主人もすぐに悟られた事に気付いたのだろう。困ったように笑って見せた。

「私は、ネイザンという都市を救うために中央から出てきたわけではない」

主人に向けられた言葉——ではなかった。カレンの炯眼は、フェイレンを捉えている。

「はい」

昼間の巡邏隊も関わる話なのだろう。

「しかし、一期一会という言葉もある。私は旅先での出会いは大切にしている。だからフェイレン、君には忠告しておく。もしもの事があつたら、迷わず左手の封を解け。切り抜けた後、故郷へ逃げろ」
いかにも性急は話ではあつた。市場を歩いている人間を適当に捕まえて今の言葉を聞かせても、それが例え鷹の眼の言葉であつたとしても「何を言っている」という反応をするだろう。

しかしフェイレンは事情が違つた。憑者を専門とする研究を進める鷹の眼。その者がネイザンを訪れており、フェイレン自身がまた憑者でもあるのだ。

「君の左手——兄のアナスイは、名を付けていた。知っているか？」
「いえ」

「厄手、だそうだ。他ならぬ、自身に厄を齎す手。そういう意味が籠められている」

一瞬、内臓を鷲掴みにされた気分になった。

厄。かつて兄を傷つけた左手。他人に厄を齎す手なのではないか。そういう思いが過つたのだ。

「私は今回、他人の依頼でネイザンまで来ている。尚、鷹の眼は私だけで、他は別働の調査員がいるだけだ」

「頼みで？　そういうこともあるんですね」

「王立学院院長の頼みだった。断るわけにもいかなくなてな。頼まれた内容は、これから起きる事象の観察」

「はい」

観察の内容は質問するべきではない、とフェイレンの本能が訴えていた。

「フェイレンの厄手は、君一人で完結するものだトアナスイから聞いている。尤も、具体的にどういう症状なのかは聞かされていないが」

「私の手は……」

「言わなくていい。しかし憑者の力は、必ずしも個人で完結するものではない。私がネイザンまで調査、いや、観察か。そのために来た憑者は、フェイレンとは種類が違う」

「はい」

「私が観察するよう言われている憑者は、後天性だ」

後天性。カレンの言葉を借りるならば、悪魔と称するのか。そういう憑者を追って、カレンはこのネイザンまで来ている。

昼間の巡邏隊が駆け抜ける情景が頭に去来する。通常なら絶対に行わない、市場の強引な通り抜け。危急を要するような事件が、この都市では既に起きている。

（凄惨な事件を起こした例が多い後天性の憑者が対象なのに、派遣されている鷹の眼はカレンさん一人？　あとは数名の調査員のみ）
都市に対する何らかの注意喚起が中央から行われたという話は聞いていない。そしてカレンは、観察だ、と言った。

鷹の眼の仕事が実際にどれほどのものなのかをフェイレンは知らないが、その後天性の憑者に何らかの対処をするつもりならば、見るからに丸腰のカレン一人では辛いのではないか。都市に対する呼び掛けどころか、駆け抜けていった巡邏隊の隊員の表情を思い出す

と、彼らもまた知らされていないのかもしれない。

王立学術院院長からの頼みでカレンは觀察に来ている。ならばその院長というのがカレンとはまったく関係の無い所で何らかの防御策を取っているのか。

いや、それでは巡邏隊の様子が説明できない。王立学術院は武力闘争の手段を持たないはずだ。そういう役目は全て軍が負うよう、この国は作られている。つまり、公の武力闘争を行う事が可能なのは軍だけなのである。

「カレンさん、鷹の眼には、戦闘を専門とする何かがある？」

「武道を研究している所は無論あるが」

「ならば、実際に戦闘を行う事を前提とした何かは？」

「ない」

「ネイザンに来ている鷹の眼はカレンさんのみで、後は調査員がいるだけだという話は事実ですか？」

「そうだ」

憑者の力は必ずしも個人で完結するものではない、というカレンの言葉。フェイレンとは違うという言葉。その二つから推測できるのは、個人完結する力を持った憑者ではないという事、大多数を巻き込む力という意味でならばフェイレンにも該当する項目はあると言えるが、カレンの口ぶりからだともっと別な力であると考えて方が妥当であると思えてならない。

「君は本当に興味深い子だ。一つ助言をしよう。私が觀察を依頼されている憑者は、感染、拡大する。憑者が増えるという意味ではない」

感染、拡大。そういう力を対するのなら、更にカレンと数名の調査員のみで対処するのは辛い状況に陥るのではないか。

（対処が、出来ない？）

破壊音。いきなりだった。

カレンと主人が腰を上げ、身構える。

「なにが——」

「卓の下に潜つてろ！」

カレンに半ば強引に卓の下へと放り投げられた。血。フェイレンの眼前に飛び散った。誰の血なのか。何が起きたのか。何一つとして把握できなかった。

「偽装は全て破られた、か」

宿の主人。こちらを見ていた。おかしい。眼球から何かが飛び出している。鏃であると気付くまでに時間を要した。

（動かない、の？）

血を見て、返って冷静になったのか。いや、血を見る事によって、何が起きたかわからないから、襲撃を受けたと頭の中で結びつける材料を得たのだ。

さっきまでの話を思い返すと、襲撃を受ける理由は一つしかない。後天性の憑者。という形であれ、鷹の眼であるカレンは邪魔になるのか。

闘争の気配が伝わってきているが、よく見えなかった。

背中にあった安心感が、突如として消失した。卓が吹き飛ばされたのか。

咄嗟に振り返っていた。人。泥にまみれた人。いや、違う。何だ、これは。剣の切っ先がこちらに向けられている。

（どうすれば……！）

どうしようもない。答えは出ていた。

視界が暗くなった。暖かく、柔らかい。顔を上げると、カレンがいた。カレンに抱かれている。

フェイレンから見える限りで、二人が切っ先をこちらに向けて突こうとしている。防ぎようがない。

死が頭を過った。しかし、走馬灯は流れて来ない。案外こんなものなのか。

瞬間、妙な音がした。がすっという、不思議な音だ。向けられていた剣が、身体に突き立つ気配がない。

「フェイレン、封を解け！」

拘束具。カレンの言葉を耳が受け取った刹那、明瞭に意味を認識する前に外していた。

近くに転がっていた鞆に手を突っ込む。同時に、剣を失った二人のうちの片方にカレンが蹴りを放つのを認めた。

万年筆。それを床に走らせる。こういう形で力を使ったことはない。木製の床を、万年筆の金属が削り取る。

（お願い、払って！）

地響き。いや、床が揺れているのだ。

立体感のない、影のような何か。実体を持っているのか持っていないのかはフェイレンも知らない。形容し難いソレは、フェイレンの意思の通り、カレンが格闘戦を挑んだ者とは違う方へと飛来する。宿の壁を突き破り、石で出来た街並みを打ち砕いて停止した。そこから微動だにせず、瞬きをする間にソレは消えていた。

「行くぞ！」

引きずられるように、カレンに首根っこを掴まれて階段を駆け上がった。

階段に差し掛かる直前、視界の端に入った不思議な光景。フェイレンとカレンに突き立つはずだった二本の剣が、何故か宿の屋根に突き刺さっていたのだ。確かに見逃さなかった。

一室に飛び込む。カレンが小さな刃がたくさん挿されたベルトのようなものを腰に巻く。

カレンにまた抱き上げられた。昼間の市場の時とは訳が違う。有無を言わずに、という感じだった。

束の間、浮遊感に包まれる。窓から飛び出し、隣の建物に移ったのだ。息を荒げながら、カレンが疾駆する。抱かれながら、その横顔をフェイレンは眺めていた。

何度、妙に心地良い浮遊感に包まれただろう。数える気も失せた頃に、カレンが足を止めた。

「撒いたな」

地面に降ろされる。

腰が抜けていた。突然の事だったからか、後になって衝撃が胸の中で膨らむ。しかし、不快感はなかった。

むしろ清々しい何かが、フェイレンの心を支配している。

「カレンさん、分かりました」

「分かった？」

「対処できないんじゃない、対処する気がないんですね、鷹の眼は。後天性の憑者——悪魔の動きを」

カレンが無表情に見つめてくる。それが肯定とも否定とも、フェイレンには取れなかった。人の表情を読めないなど、どれだけ久しい事か。

「ネイザンは巨大な実験場です。感染、拡大する憑者。それによって引き起こされる混乱。憑者自体の観察。民の反応。そして事態の収拾。鷹の眼は、餌を捉えたんですよ」

例えるならば、人体実験のようなものだ。その規模が大きくなったものだと考えていい。国家という大きな身体に穴を穿ち、反応や回復までの記録を取る。それによって進歩するモノは、確かにある。

「君は若い——いや、幼いとさえ言えるのに興味深い子だ。鷹の眼となるならば、私よりも遥かに優秀な眼となるだろうな。どうする、止めるか？ 私を止めたところでどうにもなりはしないが」

止めるのか。自分はこの女に止めると訴えかけるべきなのか。考えても、そんな理由がまるで見つからなかった。

友達などいない。親しくした人などネイザンには一人としていない。守りたいと思う人が、いない。

貧乏貴族、貴族の子。いつも両極端な罵声を投げられ、兄が鷹の眼であるというだけで嫉妬などという不毛なものから生まれる悪意を常にぶつけられた。

この左手。痣が渦を巻く厄手。拘束具をしていれば、奇病だ、奇形だと罵られた。拘束具を外せば、痣の事を言われた。うつるなどと言って、廁に閉じ込められた事もある。

憎んではいなかった。そういうものだ、と思っていただけだ。人と違う者は嫌われる。体の良い、不満のはけ口。それがたまた自分であった。それだけだ。

「珍しいから、違うから。それだけの理由で罵られたり蔑まれたり。困ったものですね、ほんとに」

「そういうものだ」

カレンもまた、そういう経験があるのだろうか。

屋根に突き刺さっていた二本の剣。半ばまで刺さっていた。向かってくる一対の剣を、一瞬であの状態まで持っていくのはただの人間に出来る業ではない。

カレンもまた、憑者だ。

「私もそういうものなんだと思って受け入れてきました。だから彼らを憎んではないです。けど、そんな人達を守る理由も、私にはありません」

止めない。そう宣言した。ネイザンがどうなっても、自分が鷹の眼に反する行動を起こす事はない。

「私が追っている憑者の名はミラーという。私を襲う過程で、君も面が割れてしまった。ついて来てもらおうぞ」

それに、とカレンが笑いながら言う。

「君の力は、役に立ちそうだ」

学校の鞆も、拘束具も、あの宿に捨ててきた。

市場にいた時から胸に抱き続けた、カレンが買ってくれたキャスケット。そして握り締めたままだった万年筆。フェイレンの持ち物はそれだけだった。

今まで被っていた帽子を投げ捨てる。風に吹かれて、闇の中へと消えて行った。あの帽子を拾い上げる事はもうない。

カレンが買ってくれたキャスケットの包装を解く。

「行きましょう、カレンさん」

キャスケットを深く被り、万年筆を服の中へと忍ばせる。今のフェイレンに必要なものは全て揃っていた。

空を覆っていた雲が、いつの間にか消えていた。
月がネイザンを照らしている。フェイレンには、それが妙に白々
しいものを感じられた。

第3話：観察者の天稟

南方の玄関口、ネイザン。この国には大河が三本通っており、ネイザンは北から走り南へ抜けていくロクネ河の辺にあるから玄関口と呼ばれている。

三本の大河は三河と名づけられている。三都に三河。それでこの国は栄えているのだ。三河は豊かな支流を持ち、この国の運送事業は水運が非常に強い。

ネイザンのすぐ西を通るロクネ河も例外なく多くの支流を持っており、それは水運のためにそれは都市の中を通っている。だから、都市の中には池などがある。火事などに備え貯水池も兼ねているのだろつが、景観という点においても優れている。南方の独特のもので、水の上に咲く花があるのだ。それが池の上には所狭しと浮かべられている。三都などでは見られない独特の景色である。

昨日の曇天とは打って変わって、空は晴れ渡っていた。そういえば、昨夜には綺麗に月が見えていた。

池の畔で花を眺めているフェイレン。こうして見ていると、ただの少女でしかない。まだ出会って二日しか経っていないが、カレン自身はかなり馴染んだつもりでいる。

案内をしてくれた礼として手渡したキャスケットは、今も深めに被られていた。フェイレンが帽子に何かこだわっているのは、最初に会った時から気付いていた。ほとんど取るうともしない。

『行きましよう、カレンさん』

あの少女は確かに、自分と一緒に行くと言った。紛れもない事実であるし、それを否定しようとも思っていない。フェイレンの力が役に立つことは、どこかで絶対にあるはずだという確信もある。

（厄手、か）

フェイレンの兄であり、カレンの同僚であるウルガ・アナスイ。彼が名づけた、フェイレンの力の名だ。カレンはそもそも憑者を忌

むべきものだと考えているのが間違っていると思っていたが、アナスイにとっては妹を不幸にした最大の仇敵なのだろう。厄手という文字からもそれが窺える。それを論破してやろうという気はない。元より、カレンの研究はカレンのもので、アナスイの研究はアナスイのものだ。お互いに力を貸せる局面があるならば貸してもいい。カレンはそういう思想で動いている。

フェイレンの力は、厄手である左手で描いたものが、フェイレンの意思を代行する。そういうものだろう。一目見てすぐに分かる、明快な力と言っている。フェイレンが「標的を殺す」という意思で描いたならば、それはその標的を殺すためにだけに具現化し、動き出す。

実体がはつきりせず、強いて言うならば影に近い。立体感もほとんどない不思議なものだった。あの時、フェイレンは木製の床に万年筆を使って決り取るように円を描いた。その円が敵ごと壁を突き破り、石畳を砕いたのだ。強大な力だろう。ただ、これまで封じられてきた力でもある。どういう事をどこまで可能とするのかは、フェイレン自身よく分かっていないだろう。それは後々明瞭にしている必要があった。

フェイレンは今、池に向かって石を投げる動作を繰り返していた。拾っては投げる。ずっとそれを繰り返して、時々考えるためかしやがみ込んでいた。

昨夜の争闘で、自分達に突き立つはずだった二本の剣がなぜか屋根に突き立っていた、あれはきつとカレンの力で、カレンもまた憑者なのだ。そういう発言をしたのだ。あんな状況に陥った経験が今までにあったとは思えないが、剣の行方を捜すほど冷静であれたのは賞賛に値するだろう。ならばなぜ、あの二本の剣は屋根に突き立ったのか。フェイレンは今それを考えている。それでなぜ池に向かって石を投げているのかはわからないが、発想としては間違っていないとカレンは思った。

（屈託を抱えた子だな、やはり。フェイレンが二人いるような気分

だ)

本当にこうして見ていると、微笑ましい光景である。ただの少女の一人遊びだ。だが、昨夜、王立学院の考えを見抜き、それに倣って行くで行ったフェイレンは、今のフェイレンではなかった。学校にはあまり馴染めていなかったという。むしろ、いじめ或いはそれ以上の行為を受けていただろう。

倣って行く。そう言った時のフェイレンは、学校や社会に馴染めていないフェイレンだった。そして今は、市場を案内してくれた時、暑さにやられているカレンに飴玉を差し出してくれたフェイレンなのだ。

(気にしていなかったとあの子は言ったが、もう一人自分を用意していたのか?)

害悪とされ、不満のはけ口とされる自分。故郷にいた頃と変わらない、兄を慕う自分。そういう役割分担がいつの間にか出来上がってしまったのか。何となく、そんな事を考えてしまう。

兄と似ている部分もある。フェイレンの場合はもつと無意識、多分小さい頃に見た兄の真似事だろう。他人には自分が何を出来るのかをあまり見せようとしない。出来ない人間であると思わせようとする。自己評価も極めて低い。それは決して悪い事ではないだろうが、アナスイのように意識的にやっているのではない側面が強いのなら、何かに問題が生じる可能性はなくなる。

(……何を考えてるんだ)

フェイレンの親でもなければ姉でもない。二日前に出会った協力者のようなものだろう。

「フェイレン、どうだ」

「わかりません。いや、わかりそうで、わからないんです。カレンさんは、突き出された剣を屋根へと突き立てた。ただカレンさんはあの時、私を両手で抱きしめてくれました。だからきつと、四肢を、或いは身体を動かさずに使える力なんだと思います。今、そこで止まってしまって」

この子の思考回路は出来が良い、とカレンは思う。カレンが考える愚者とは、固定観念に囚われている者である。善悪、主観的観測における可否、そんなものを思考に挟むべきではない。それは回路に紛れ込んだ異物であり、流れを阻害する。状況を整理し、材料を揃える。そこに私情を挟む余地はないのだ。フエイレンが「鷹の眼はネイザンを救わない」という結論を出せたのも、そういう物の考え方をするからである。普通の人間ならばきつと、「都市を捨てる」という選択肢がそもそも浮かんでこないはずだ。

つまるところ、可能な限り公平な判断を下す事が出来る。それは研究者に必要な要素である。やはりフエイレンは、王立学術院書士――鷹の眼に向いている。普通なら嫌悪感を示すような今回の実験にもそこまで拒否反応を見せていない。皮肉な事に、フエイレンの受けた社会的迫害は研究者としての素養を目覚めさせている。後は自分が研究したいと強く思える事柄さえ手に入れば。それさえ眼にすれば、フエイレンはきつと鷹の眼となる。

「少し休憩するといい。代わりに話をしよう」
「話、ですか」

カレンの横に、フエイレンのちよこんと腰を下ろす。深く座ると、足がまだ地面につかないようだった。こういう所でまだ子供なのだと認識させられた。普通に話をしていると、到底十三歳の子供だとは思えない鋭利な意見を口にする。

「ミラーという憑者を追っている、と私は昨夜言っただな」

「はい、聞きました」

「ミラーという男は元軍人、それも近衛軍にいた男だ」

「三都守護の」

近衛軍は、三都に駐留する軍を指す。その他は地方軍と言って區別するのだ。名目は三都守護。つまりこの国の根幹、そして王家の守護である。同時に国きつての精強な軍でもある。

「といっても、ミラーが軍人であったのは今からちょうど二十年前までの話だ。彼はそれ以来、消息を絶っていた」

「二十年前……」

何かもう気付き始めているのだろうか。だとすれば大したものである。

「クレナゴの内乱があった年ですね。ちょうど昨日、歴史の授業の時に教師が話していました」

「教科書にはない範囲だろう？　まだ最近の話だ」

「教師は単に熱が入っただけだと思います。私に手紙を持ってくれた方でしたから、きっとカレンさんの対応をしたのもあの教師ですね」

あの男か。あまり記憶には残っていない。どうでもよかったのだ。「一般には栄誉の戦死を遂げたとされている。クレナゴにおける内乱は非常に周到に計画されたものだった。犠牲を出さずに解決は難しかった」

何かを思いついても、話を聞くべきだと思った時は聞いているのもフェイレンの良い所だった。多分この子の頭の中には色々な情報が交錯し、集約する行為を繰り返しているのだろう。

「玉碎するための部隊。死兵だ。それを指揮したのがミラーだった。五千の部隊を犠牲にする作戦だった」

「彼は、死ななかったのですか」

「死ねなかった、と言う方が正しいかな。理由は簡単だ。あまりに強すぎた。近衛軍随一と言われた戟の腕は並大抵のものではなかったのだろうな。部隊は死に絶えたが、ミラーだけが敵中で最後まで戦い続け、ついには味方部隊が到着、クレナゴは陥落した」

万余の敵に一部隊で留まり、戦い続けた。死ぬために戦い続けた。軍人の思想はカレンには理解できない部分が多い。無様な生還よりも栄誉の戦死を選ぶのだ。生きていればまた戦える。カレンならそう考えるが、軍人だとそうはいかないらしい。ミラーは立派に戦って立派に死んでみせる。そのつもりで死地へ赴いたのだ。五千の部隊は、ミラーについて行くと述べた兵達だったという。自らの慕ってくれた兵と共に栄誉の戦死を遂げられる。軍人にとっては誉れ高

い事だったのだろう。

しかし、ミラーは生き延びた。出陣前に王から下賜された戟は折れ、それからは敵の戟や剣を奪って戦い続けた。死ぬつもりだったミラーは、なかなか死ねなかった。慕ってくれた兵五千の声が一つ残らず消えるまで、彼は戦場で人を殺し続けたのだ。そんなに死にたいのなら自刃しろ、とカレンなら思ってしまったが、最後まで戦うが軍人でもあるらしい。本当に、カレンには理解できない世界だった。

「一人だけ、生き延びてしまった」

「兵が死に絶えるまで、ずっとな」

「クレナゴの内乱については私も文献を漁ったことありますけど、その名は耳にしました。クレナゴを救った英雄として。生きていたとは何処にも記録がありませんでしたけど」

「狂っていたそうだ、味方の部隊が駆けつけた頃には。人を殺しすぎたし、五千人の死を、悲鳴を、一身に受け続けた。無理もない話なのかもしれない」

「そこでミラーさんは、戦死という扱いに」

「そういう事だ。現実には保護されていたようだが、姿を消した。それから時が流れ、鷹の眼の憑者の調査網に偶然引っ掛かってきたのが、そのミラーだった。それが四年前の話だよ。私が鷹の眼となったのと同時期だ」

カレンが十九歳の頃の話である。その頃、既にカレンは鷹の眼として王立学術院にいた。史上初の十代の書士として名が知られ始めた頃だ。

「ミラーは、感染、拡大する力を持った憑者だった。これは珍しい。王立学術院としては調査を続けたい対象だったのだ」

「後天性の憑者は妄執に囚われている、と言いましたよね。ミラーさんはどういう？」

「自分の兵を、そして死に場所を探している。私が直接現場を見たわけではないが、奴は墓を掘り起こすそうだ。そして死体を喰らう。

一部だけだ。ミラーに喰らわれた死体は、命を取り戻したように動き出す」

「なぜ喰らうんでしょう」

「クレナゴにおける死兵を担当したんだ。万余の敵に囲まれて孤立無援で戦ったのだから、五千の部隊の遺体も欠損は大きかったのだろう。剣で一突きなどでは死ねていない」

ミラーの死体を喰らうという行為は、かつての部下の最後の姿を再現するための行為であり、憑者としての力を発揮する儀式でもある。フェイレンが何かを描く必要があるのと同種である。

言わんとした事は伝わったのだろう。フェイレンも二度ほど頷いた。

「そしてミラーはネイザンに眼をつけた。地形、兵力、装備。何を持っけてしても、国家に挑んで絶対に勝てるはずがない、この都市を」
クレナゴの内乱は、背後にあった海を上手く使っていた。ネイザンにはそういうものがない。軍略上、優れた場所にある都市でもない。ただ原野が広がっており、あるのはロクネ河だけである。

戦って死にたい。かつての部下を率いて、今度こそ栄誉の戦死を遂げたい。ミラーはそういう思いで二十年間、墓を掘り起こしては死体を喰らい、兵を集め続けたのだろう。死人の兵ならば、二十年前のように絶命する恐怖を背負い込まなくてもいい。

「鷹の眼は、それを面白がって眺めていた部分もありそうですね」

「院長など、笑いながら時が来るまで捨て置けと言っていた。妄執に駆られた戦場の亡霊だそうだ」

もはや人の形を留めているのかすら怪しいあの男。いや、男なのだろうか。それも判然としない。あのような形状で声帯が何処にあるというのか。鷹の眼の頂点に立つ者だけのことはある、とだけカレンはかつて評した。

「その亡霊が、再び戦場を作り出す。今度は決して生き残らないために、ですか」

「尤も、院長の場合はこういう状況は前例がない、ならば作り出し

ておくのも悪くない、と考えたのだろう。王立学術院の憑者研究は研究のために存在しているのであって、憑者による被害を抑えるのは仕事の内に入っていない。必要ならば捕えて連れ帰る。それが結果的に被害を抑えることになるのは多々ある話だが」

斥候部隊はもう、ネイザンの内に入っている。鷹の眼が自分を捕捉しているのにミラーは気付いているのだろう。だからカレンを襲撃した。偽装のために作っておいたほかの宿も全滅している。昨日、巡邏隊が市場を駆け抜けたのはそのせいだ。何件もの宿が一斉襲撃を受けたのだろう。偽装は全て破られた。カレンが本当に宿泊する施設は防備を何十にも防壁を巡らせておいたから発見が遅れたが、その日のうちに襲われた。ミラーは戟の腕が良いだけの軍人ではないらしい。

「ミラーさんについては、鷹の眼には緘口令が敷かれているのですか」

「そういう事はない。憑者を見落としたからといって王立学術院の責任問題になる事はない。処理するという仕事がないのだから」

「都市が一つ消える可能性があっても、ですか」

「国防は鷹の眼の仕事ではないから。そのあだ名の通りだ。私達は狩猟を行う爪ではない。求められれば情報開示はするが、憑者研究など市井でも、中央においても国の上層部以外は眉唾だと思っているのもある。上下院の政策において、常に予算削減の意味で憑者研究の部署は消せと上申されている」

「それでも消えないんですか」

「簡単な話さ。王立学術院院長——つまり鷹の眼の大將は代々憑者だ。それも、君のウルガー族ほど血が薄まっていないのかもしれない。生まれる子は必ず、先天性の憑者だ」

同僚の妹であり憑者。フェイレンはもう部外者ではないのだ。一瞬、何故ここまで話を聞かせてくれるのだろうという顔をフェイレンがした。

それにもう一つ理由がある。憑者という存在を確固として認知しているのは鷹の眼、そして国家の上層部、それも国事の最終決定権を持つ者達だけだ。

昔からあった伝説、迷信深い人間の妄想とされてきて、しかし人々はどこかでかつてそういう存在があったのだと思っている。憑者は龍や天馬などと同種の認識が市井ではされていると言っている。

誰に言ったところで最後のところで信じはしない。だから緘口令も敷かれていない。

「さて、説明は終わりだ。何か質問はあるか」
「ありません」

今の話を頭に入れたのだろう。

フェイレンはすぐに次の思考に入っている。

「カレンさんは、飛刀の遣い手ですか？」

「昨夜の事か」

いつもは鷹の眼の制服の下に巻きつけていた皮のベルト。投擲用の刃が二十本差し込まれている。ネイザン到着の初日は都市を歩き回り地理を把握するよう努めた。その過程で南方の暑さに辟易したが、制服の下にそのような物々しい装備があるのはあまり公にしたらなかったため、新たな服を調達するのを躊躇った。店まで全て回っている暇などなかったのもある。

今はあのベルトを刃を差したまま細かく切断し、服の中に縫い付けていた。鷹の眼の制服は襲撃された宿に置いてきてしまったが、行方を眩ますにはいい材料となっただろう。

「飛刀は出来るが、憑者としての私でなければそれほどの腕ではない」

「力を使えば名手となりうると」
「そういうことだな」

フェイレンの力は、カレンの力よりも強大である。強大であるが故に汎用性に乏しいと考える事も出来る。尤も、何を何処まで可能とするのか現段階では判然としないため明言するのをカレンは躊躇

うが。

ミラーのように感染する憑者。フェイレンのように幻想を具現化する憑者。様々な事例が存在する。そしてカレンの力はどちらとも言えない。若くして鷹の眼となった。院長に自分が気に入られているのはカレンも気付いている。そしてあの憑者は決して、感情だけで物事を判断したりはしない。

今回の観察をカレンに依頼したのは、身を守る手段であろう。カレンの力は有事の際、故意的な殺人、偶発的な事故、原因不明の変死、どういう風にでも使い方次第で見せかける事が可能だった。

フェイレンの兄であるアナスイなどは憑者ではない。つまり、身を守るには剣で相手を斬りつけるか、矢で射抜くか、何にせよ人為的なものが見え隠れせざるえない。場合によっては、それでアナスイ自身が罪に問われる場合がある。王立学院はそれを好しとしない。

「考え続ける、フェイレン。今まで一度も考えなかった事だろうか。最初は難しい。しかし一度解き方を知れば、それは数式を知ったと同じだ。そこに材料を当てはめて行けば次からは自ずと答えが見える」

「はい」

自らの力を自らの口で明かすつもりが、カレンにはなかった。それでは意味がない。こういうものは、自分で考えなければ意味がない。

可愛い子だ、と思う。素直で利巧で、仕草や口調はカレンと違って少女のそれだった。同時に、フェイレンの眼を見て気付く。

（間違いないな……）

この子の眼は、殺人を経験した者の眼だ。

隣に座った二人でフェイレンと、沈黙の中で過ごした。気まずいものではない。フェイレンはフェイレンで考え事をしており、カレンは事態の進行まですることがない。束の間の休息である。

事態が動けば、嫌でも走り回るはめになるのだ。何も無い時はじっとしていたい。カレンは自分の研究が第一であり、いかに院長の依頼といえど深い興味を今回の事で感じているわけではない。

（強いて言うならば、この子か）

フェイレン。この少女にだけは興味をそそられる。この子を見ていたい故に、ネイザンに居座る。依頼はそれのおまけのようなものだ、と考えている節さえカレンには出始めていた。

風。池に浮かべられた花が揺られている。水面は光を反射し、別なもののように輝いている。

近づいてくる気配を感じながら、気付かないふりをしてカレンはそちらに眼をやっていた。

「襲撃を受けた宿は、全滅だ」

フェイレンの身体が跳ね上がる。声に驚いたのだろう。カレンの力を考えるのに必死で周りにまるで気を配っていなかった。いや、配っていたとしてもこの男の接近はなかなか気付けるものではない。

「調査員のお出ましか、ネロ」

「予め派遣されていた調査員との協働はない」

ベンチの背もたれ。その向こう側、カレンとフェイレンの背後を取るように、男が一人立っていた。

フェイレンが興味深そうに男——ネロを眺めている。

「この子は？」

「フェイレンという。アナスイの妹だよ、君も聞いた事くらいあるだろう」

「憑者の。そうか」

ウルガ・フェイレンです、と緊張気味にフェイレンが言葉を発する。やはりこういう所は普通の少女だ。一切の表情を排した顔で名乗るネロが、些か大人気ない存在にさえ映る。

ネロが来るという話は聞いていなかった。院長の意思か、ネロの興味が向いたのか。どちらかはわからない。

「似合わない格好をしているな、ネロ」

「お互い様だ」

地方で顔を合わせた時、必ずネロにかける言葉だった。習性のようなものになっている。

ネロは鷹の眼ではない。鷹の眼の使い、といったところか。王立学院書士になるのは並大抵の事ではない。しかし、それほどに厳しい選別をしていてはとてでもないが人手が足りないのだ。そのための雇われの調査員である。常に各地に派遣され、王立学院に情報を届ける。そういう仕事である。

その調査員には書士とは違い、制服というものが特にない。だから調査員はいつも、その地方に馴染むためにも現地で手に入れた服を身につけるのだ。

「事情はいい。お前が連れているというのは理由があつてだろう。」

この少女に俺の説明は必要か？」

無言で頷くと、自分がどういう存在であるのかを極めて事務的に淡々とネロは話し始めた。この男はいつでもそうだ。顔が固まっているのではないかと思えるほど表情が動かず、言葉には抑揚がない。また、何故かネロの言葉は近くにいるとよく聞えるが、数歩離れるとまるで耳に届かなくなる。納得のいく説明は受けているが、だからといってカレンに実行できる技術ではなかったし、必要もなかった。今では頭の片隅に一応残してある、という程度の記憶となっていた。

「調査員、ですか」

「鷹の眼の下っ端とでも言っておこう」

ネロにはどこか得体の知れない側面が多くある。

調査員の中でも、王立学術院院長に見込まれ、この男の一族は代々調査員となつていてという話だった。憑者ではないが、普通の人間でもない、特殊な訓練を積んでいる。この喋り方はその片鱗だろう。

足音は決して聞えず、まるでその場にいないかの如く存在は薄い。多少の気配を発していたのは、カレンに接近を知らせるものであったのだろう。

「宿は全滅、と言ったな」

予測はしていた。自分の居場所が突き止められた以上、他の宿もかなりの高確率で潰されている。

「お前の偽装も全て破られていた」

ミラーが何処まで自分を毛嫌いするかが分からなかった。だから自分が宿泊する宿以外に五つの偽装宿を作ったのだ。そこにはカレンにまったく関係のない人間が宿泊している。本人も偽装の対象にされている事は知らない。あえて防御の薄い宿を作ったりして、気を散らす策も立てていた。しかしそれらは全て一日で突破された。

「お前は誰に狙われている、カレン」

「さてな。怨みなど多く買っている気がする」

軽い冗談だった。フェイレンもネロも反応はしない。

「しかし、お前の偽装を破るか。それもたった一日で。戟に長じるだけの武人だと聞いていた」

確かに、ミラーが優秀な軍人であつた事は誰もが認めていたようだが、そういう面で秀でていたという証言は残っていない。

相当数の犠牲が出ただろう。偽装した宿を全て合わせる十数人の犠牲が考えられる。カレンがいた宿も、主人が死んだ。このネロと同じく、かつては王立学術院の調査員だった男だ。名前は――死人の名など思い返したところでどうにもならないか。

「なんで、ネロさんはネイザンに？」

「興味本位で。そう言いたいところだ」

ネロが勿体ぶるなど珍しい。カレンは自分でそういう話し方をす

ると常々自覚しているが、この男はどこまでも事実を淡々と発するだけの男だ。

「お前の偽装が破るのに要した時間、ミラーという男の人物像、目的。符合しない面がある」

「なぜ、カレンさんを襲撃したのか……」

フェイレンが呟くように言った。ちらりと、その様子をネロが見る。この男は一切の表情がない。おそらく死ぬまでこのままなのだろう。しかし今の仕草は、どう考えても驚きを携えていた。

「フェイレンは私と同等だと考えていい」

ネロが小さく頷く。もう驚きは消えていた。

「院長の意思を知っている者は少数だ。都市一つを投げ捨てるなど、許容できない者も多いだろう。緘口令こそ敷かれていないが、極秘作戦である意味合いは多く含んでいる。そしてお前は鷹の眼の制服を来てネイザンを歩き回っていたようだが、カレン自身が憑者研究など行っている人間だと誰がわかる。鷹の眼でも眉唾だと世間には認知されているような部署だ」

「大半の人間が、私を普通の学者だと思っていた。それは間違いない」

フェイレンの学校を訪ねた時の教師の態度を思い出す。腰を曲げ、頭を低くし、カレンの研究を賞賛した。何の研究かも述べていないというのに、ひたすら恐縮していたのだ。憑者研究を専攻していると知れば、同じような対応であっても必ず違う意思が含まれているはずだ。そういうものを読み取るのは、カレンの得意分野である。あのような訓練も受けていない者に深層心理を隠し通させるほど甘くはないつもりだった。

「知られていないはずの作戦、ほとんど知りようもないカレンの素性、研究内容。それはミラーでさえ知りえない事だ。ミラーも、院長の掌の上で踊っているはずだ。彼は彼で、自らの目的を達成するためにここにいる」

「加えて、ミラーさんにはカレンさんの偽装を破るような、謀略的

側面は持ち合わせていなかった、ですか」

知る方法は限られており、知ったところで大半は信じない。憑者とは元来そういうものであり、今回の院長の思惑もそういうものだ。限りなく低いミラーの謀略的側面という説を排すれば、答えは一つしかない。

「情報が洩れているのか、ネロ」

「そう考えられる。それも、憑者の存在を明確に認知している者に」
まったく事情を知らない者が例えネイザンが実験場である事を知っても一蹴されるだけだろう。しかし、事情を知っている者。憑者を理解している者。そういう者が作戦の全容を理解したのならば。それを何かに利用しようと考えたのならば。院長の思惑から外れた事態が想定出来る。

「俺は五名の者を率いている。危急であつたから、それが精一杯だった」

「助けに来たとしても言うのか」

「予定外だが、この少女も一緒にだ。ネイザンを出すぞ、カレン」
フェイレンが、ぎゅっとカレンの腕を握り締めた。事態を把握し、その上で恐怖を抱いた。そういう感情を、この子はまだ持ち合わせているのだろうか。

カレンにとつては、ある意味慣れた事であつた。命を失うかもしれない。そういう状況に立たされた経験は、憑者などを相手にしていると一再ではない。

（出し抜かれたか。しかし、誰に）

情報を知り得た者。それを利用出来た者。そんな者がいたのか。いたとすれば誰だ。何処にいた。今は何をしている。

「分からない事が多すぎる。ネイザンを出す事が可能なのか、ネロ」
「俺が率いてきたのは五名。一族の者だ、調査員ではない。俺達の手引をしてどうにか逃がす算段だが――」

ネロが城壁を見上げた。城壁の上は兵士が常に巡回している。平時とはいえ、建国者が武門の一族であつたこの国は、軍事に力を傾

向させている。

（兵が、いない）

城壁を視線で追った。建物に遮られて見えなくなるところまで。

一人も兵がいない。

「遅かったか、或いはそれさえも見破られていた」

中央通の方が騒々しい。いや、更に遠い。城門の方が。

「散れ」

ネロがいつも通り抑揚のない声で指示を出す。姿は何処にも見えなかったが、近辺には率いてきた五名の部下が潜んでいたのだろう。ネロが何者なのか、本当のところをカレンは知らない。いや、ネロの口からは聞いているが、ネロが真実を述べてるのは分からないのだ。ただ、そういうものだろう、と思って接している。おそらく、院長など学術院上層部しか認知していない何かもある。カレンはそう思っていた。

ただ、ネロとの間には微かだが友情を感じる事がある。アナスイも同じだ。年齢が近く、学術院に関わり始めたのも同時期だ。共にこなした仕事も一つや二つではない。

水面が揺れた。瞬間、ネロが疾駆する。カレンも服で隠した飛刀に手を触れた。一步遅れてフェイレンも万年筆に手をやっている。

ネロの短剣が水面に波紋を作る。そして、水面を突いただけではない感触が彼の手に伝わっていることを、カレンは見取った。

「人間、憑者でもない」

呟き。ネロの低い声だ。

「死体だ」

ミラーの力によって作り出されたものか。死体を喰らう事によって発現する力。ミラーの兵。もうネイザンの城壁内に入っているのか。

水面は揺れ続けている。まだ、何か来る。

飛沫。まるで池が爆発したかのような音だった。何かが次々と飛び出して来る。全てミラーの兵か。全ての兵が弓に矢を番えている。

（どうあろうと私を殺す気か）

ネロの姿はどこかへ消えていた。フェイレンは背後で身構えている。

飛来するであろう数十の矢。あれをどう防ぐのか。フェイレンは今それを必死で考えている。

「カレンさん、正面をお願いします！」

フェイレンが土の地面を万年筆で決る。数十の矢の飛来する角度、方向。自分の力だけで防ぎきれるものではないと判断したのだらう。カレンは一度、二本の剣を、フェイレンの認識で言うのなら吹き飛ばした。四肢を一切動かさずに。その力がこの状況を打破する可能性を秘めているとフェイレンは計算したか。

（少し辛い、やってやる）

矢。風を切り裂く音。弓が弾かれる音。数十の矢が一斉に放たれる様は壮観であった。

少しずつ角度の違う矢が次々と飛来する。刹那、影が飛び出した。いや、影のような何かだ。フェイレンの力である。カレンとフェイレンの頭上を覆うようにしてそれは矢を遮った。

鷹の眼。王立学院書士となる前から、カレンはそう渾名された。誰よりも炯眼であったからだ。憑者には身体的特徴が発現する事例が多い。カレンの力は眼に直接的な関係はないが、間接的には大部分を担っている。

両腕を突き出す。鏃がカレンの掌に触れた。瞬間、矢は消失する。四肢と胴に矢が集中する。それを全て、カレンは打ち消した。

攻撃が止んだ。矢が尽きたのだらう。兵達が次々と剣を抜き、白刃を日の下に晒した。

「矢は、どこへ」

「上だ」

フェイレンがぱつと空を見上げる。

「なんで……！」

力を失い、ただ落下するだけの矢群。今度は片手を天空に向かつ

てカレンは突き出した。

落ちてきた矢が手に触れる。そして次の瞬間には、剣を抜き突撃しようとする兵の頭部に突き立っていた。

水の中に次々と兵が身を崩していく。

（この程度で行動を停止したりはしないか）

放った矢を宙へと打ち上げ、頭上から再び落ちてくる矢を反撃の道具とした。カレンが打ち上げた矢は、一本も地面に落ちることなく池から踊り出して来た兵に突き立った。

「城門へ」

ネロの声だった。フェイレンを抱き上げ、駆け出す。昨日も同じ事をした、と思って少し苦笑した。

やはりこの子の力は大きい。フェイレンがいなければ、矢を全て防ぎ切る事はできなかった。あれほどの数を同時に処理するのは難しい。

「鷹の眼、お前はやはり天稟の塊だ」

ネロがカレンを直接鷹の眼と呼ぶのは、王立学院書士という意味を含まない時だった。書士の敬称であり、かつてのカレンの通称それが鷹の眼なのだ。

腕の中にいるフェイレンからの視線を感じた。様子を見ている暇はない。ただ、腕に掛かっている重さは驚くほど小さかった。小柄な少女だとは思っていたが、また実感させられる。

「繁華街に出るぞ。追っ手を撒く。人に紛れて、脱出路を探る」

ネロが先行した。時々、鳥の鳴声のような音が耳を突いた。この男と率いる者は、この音である程度の意思疎通を可能としているのだ。散った部下からの報告が次々と入っているのだろ。カレンには意味を読み取る事ができない。

中央通に近づくにつれて、ネイザンという都市の混乱を肌で感じる。すれ違う住民達の眼に映っているのは、紛れもない恐怖だ。

石畳の上を駆ける。こうして迷いなく目的を持って駆けているのだと思える者は一度も見かけない。皆、何が起きたかわからずただ

走り回っている人間ばかりだ。

まだ空は晴れている。市場には篝すら焚かれていない。闇が支配するにはまだ時間があるのだ。なのに、繁華街の至るところに黒ずんだ何かの形跡が見て取れた。

（巡邏隊が全滅している）

死体を飛び越えた。いつの間にかフェイレンの視線は感じなくなっている。フェイレンはフェイレンで何が起きているのか把握しようとしている。

この騒乱を正確に掴んでいるのは、カレンとフェイレン、ネロとその部下の五名、そして起こした当人達のみだろう。気付かぬうちに、対立させられているような気がしてならない。

（鷹の眼の仕事は観察なんだが）

戦闘は軍人がやればいい。鷹の眼は決して部外者のためには戦わない。戦うのは、自らの身を守る時だ。

「フェイレン、見えているだろう。実験が始まった」

王立学術院長の思惑からは外れた始まり方だろう。学術院への害悪となる可能性を含んだ不確定的な要素を抱えたままの開始でもある。

内側からの手引があつたのだ。それも、ネイザンを知悉した者の手引。それしか考えられない。

ネイザンはもう、巨大な人体実験場だった。

「鷹の眼、憑者。第三者による想定外の介入。面白いです、カレンさん」

空恐ろしい子だ。ただの十三歳の少女の言葉ではない。

（真性の観察者、そして憑者の言葉だ）

また死体を飛び越した。池の辺で、カレンの腕を握り締めたフェイレンはもうここにはいない。

殺人者の眼をしている。そう感じたフェイレンが、カレンの腕の中で仄かな温もりを放っていた。この温もりが、フェイレンがまだ少女であるという現実を唯一想起させる。

「これは、無駄だな。取り残された」

城門が閉ざされていた。内側から何十にも巨大な板と杭で打ち付けられ、攻城戦のための兵器を使わない限りこじ開ける事など出来はしないだろう。

その城門に群がっている民衆。城門を叩きながら、口々に「出せ」と喚き立てている。

（そんな事で出られるわけがないだろう）

冷めた気持ちで、民衆を見つめた。

抱え上げてから初めてフェイレンを一瞥したが、フェイレンの眼に色はない。同じような事を考えていたのか、それともカレンよりも冷静に民衆を観察しているのか。

城門の上。強い気配を感じた。ネロが建物の影にカレンとフェイレンを引つ張り込む。壁を背にするようにして城門の様子を窺った。旗。押し立てられた。穴だらけで黒ずんだ旗である。しかし元が白地に金と赤の縁で彩られた旗であるというのは見てとれる。

「近衛軍旗」

フェイレンが呟く。それと同時に、城門の上に身を屈めていたらしい兵が、一斉に姿を現した。どの兵も身体が欠損しており、肌の色は人間のものではなかった。

（感染した死体か）

悪臭が漂っている。死体である事は間違いないようだ。統率が取れており、動きも鋭敏である。それが返って異様な光景を助長する。

「占拠されたな」

「怖い、ネロ」

「慣れたものだ」

ネロの頭の中に自分が死ぬという計算はない。出来る限りの事をやって生き延びる。そういう男だった。軍人のように潔い死を好しとはしない。

駆けてきた方向から騒々しい足音、いや、行進というべきか。その気配が伝わってくる。

「全部隊が、この城門に集結し始めている。数は五千」

ネロの部下からの報告だろう。ネロは院長の命を受けて、自分を助け出すためにネイザンに來た。上官からの命に叛く事は絶対になり。どうやって脱出路を繋ぐかを今も考えている。

悲痛な喚声がネイザンに轟く。城門からの一斉掃射が始まったか。駆け出す民衆。それを追う軍隊。影に隠れて、少しずつ移動した。あの中に紛れては生き延びるのは難しい。

曲がり角で、一人の軍人と眼が合った。カレンは服の中の飛刀に手を触れる。瞬間、その軍人の額に刃が突き立っていた。

「部下が民家を確保した。ここから南西だ」

ネロが駆け出す。カレンも後を追った。フェイレンの鼓動が異様に早くなっていくのを、カレンは肌で感じていた。

第4話：物質転移

剣。月光を照り返し、寒々とした輝きを帯びていた。

フェイレンは万年筆を握り締め、時を待った。凶刃に自らカレンは身を晒している。

カレンを両断するはずだった剣が、兵の手元から消えていた。いや、消えていない。突き立っている。剣を把持していた兵の掌を貫いていた。

（何の力か、やっとわかった）

万年筆で石畳を削る。この筆はこれきり使えなくなるだろう。石畳に、万年筆が通過した跡が刻まれる。それはすぐに鷹の形となった。

影。立体感のない、しかし立体として存在している何か。ソレが大きく飛び上がり、カレンが対峙している兵の喉首に襲い掛かった。兵が鷹に押さえつけられる。そこへ六つの影が飛来した。素早く兵を縛り上げ、体中に短剣が突き立てられる。噴き出した鮮血が石畳を濡らした。

「やはりこの程度では死なないな」

四肢の腱を切られた死体。いや、生きた死体。それに見下ろしながらカレンが呟いた。

「連れて帰るぞ」

飛来した影が素早くそれを担ぎ上げ、運び出して行った。ネロと、ネロが連れてきた一族の者だという。詳しい事はフェイレンは聞かされていない。

帰るぞ、という仕草をカレンがする。ネロ達はとくに姿を消していた。隠れ家とした民家に戻ったのだろう。隠れ家に向かって、フェイレンとカレンも歩き出した。

ミラーの軍がネイザンを占拠したのは、昨日の事である。あれ以来、この都市は昼も夜も寝静まっている。あれほど賑わっていた中

央通の繁華街は消え、人々は家に引きこもったまま出てこない。

占拠後、その日のうちにネロは部下と共に、フェイレンはカレンと共に街へと出た。闇に紛れ、ネイザンを駆け回ったのだ。全滅した巡邏隊。その代わりだと言わんばかりに、死体である兵の巡回が行われていた。その兵の捕獲をカレンが言い出した。一晩かけて巡回路を探り、次の夜――つまり今、捕獲作戦を結構した。街中を闊歩する複数の巡邏隊の空隙を突き、隠密に事を進めた。

昨日の争闘で、頭部に矢を突き立てても動き続けていた兵がいたのを見て取った。

『普通の人間のようにには殺せない』

ならば、何をすれば殺せるのか。それを探るための捕獲である。巡回路の看過と、こちらの実験をなるべく明瞭にするために死体として腐敗が少ない者を探し出すために一晩の準備が必要だった。隊長格の兵を選び、知っている事を吐かせるつもりでもいる。

「カレンさん、私とまるで違う力ですね」

「分かったか？」

宿で襲撃を受けた際、自分達に突き立つたはずの剣が二本、屋根に突き立っていた。その時カレンはフェイレンを抱き締めていた事から、四肢を動かさずとも使える力なのだと推測した。その次の襲撃で、敵兵によって放たれた矢がカレンの身体に触れると次々に消失し、その後遙か頭上に現れた。二つとも、カレンの身体を貫くはずだったものだ。そこから、カレンの身体に触れる事が条件なのだと判断する。そして、たった今日の当たりにした光景。カレンを斬り裂くはずの剣が、カレンの身体に触れた瞬間、それを振り翳した兵の掌に突き立っていた。

「物質の転移」

「正解だ。私は自分の身体で触れたものを任意の場所に移動させる」二度目の襲撃。遙か頭上に現れた矢にカレンが触れた瞬間、その矢は次々と敵兵を貫いた。あの現象にもそれで説明がつけられる。

「カレンさん自身は？」

「不可能だった。他人、生物も不可能だ。尚、範囲も限定される。私の眼が届く範囲のみ」

「見えない場所には飛ばせない、と」

「そうだ。そして、私がどういう形であれ触れなければならない。斬りつけられた時にああして剣を飛ばすのは、私に剣が触れた瞬間に転移を行っている」

少しでも間違えると、剣はカレンを両断している。昨日の矢による攻撃を防いだのも、少しでも遅れていていればカレンは鏃に貫かれていたのか。

（度胸がいるなあ。私には無理だよ）

凶器が自分に触れる瞬間まで、平静を保って力を使うのを待っている。そんな事が普通の人間に可能なのか。鍛え上げた精神がそれを可能とするのか。

そして、自分が思った場所に何かを飛ばす。そこまで具体的に思い浮かんでいたわけではないが、フェイレンが昨日、池に石を拾っては投げていたのは、何となくそういうものを感じていたからだ。思った場所へと正確無比に投げるのは難しい。いや、フェイレンがやっただけでは、ほぼ思った場所へ投げるのは不可能だった。しかもそれは人体の運動を以って、どこへ飛ばすかという予備動作を含んだ上での結果である。カレンは指先一本動かさない。なのに相当な精度で物質を移動させる。兵の掌を貫いたのなど、まさしくそれだろう。

「カレンさんが本当にすごいのは、物質を転移させる力じゃない、ですね」

カレンの憑者としての力。それは人智を超えたところに存在するが、カレンは通常の間人である側面に卓抜した力を持っている。

驚異的な空間認識能力。フェイレンは自分の眼でしか景色を見ることができない。だからカレンがどのような認識で世界を見ているのかは分からない。

物と物の距離、高低、角度。カレンはそういうものを、フェイレ

ンとは違う次元で見て取っているに違いない。

そういえば最初にカレンと会った時、「この人は自分とは違う次元でものを見ているのではないか」と考えたのをふと思い出した。

「鷹の眼ですね、カレンさんは」

「全てが全てではないが、憑者には人体の形状に何らかの特徴が出る場合が多い。君ならばその、左手で渦を巻く痣だ。そして私はこの眼なのだろう」

「けど、カレンさんの憑者としての力を発揮する条件は、全身の皮膚な気がします。触れた物を転移させるわけですし」

眼がどんどん良くなって、あのような眼つきになった。それはあまり考えられない気がした。

「分からないのさ、フェイレン。私は自分を先天性の憑者だと思っているが、後天性だと言う者もいる。異常なまでに発達した視力に起因して発症したとか」

「カレンさんの本当の力は、眼？」

「さてな。ただ私は、身体に現れた特徴と憑者としての力が合致しない可能性のある、王立学術院によって発見された憑者の中で唯一の存在だ」

ただ自分の力が何を可能するのは出来る限り正確に測ったつもりだ、とカレンは付け足した。

「私もその必要がありますね……」

「今までずっと封をしてきたものだ。これからでも遅くはないさ」

自らの意思を代行するモノを左手で描く事によって作り出す。それはここ数日で発覚したものだ。ならば、今まではずっと万年筆でソレを描いたがどこまでの他の物で代用が可能なのか、どのような形状、大きさまでが具現化できるのか、同時に複数の具現化は可能なのか、どこまで詳細な命令を遂行できるのか、フェイレンの意思の代行が完了した時点で今までは消滅しているがそれ以外での消滅する条件は。疑問は尽きない。それらを一つ一つ潰していく作業が必要になるだろう。

「性質次第では、何も争闘のみに役立つ力だとは思わないな」

使い方次第で色々な事が出来るかもしれない。

「上手く扱えれば、君はその場を一步も動かずに左手で代行者を描き出すだけで生きて行けるかもしれない。まったく、強大な力だな。私など自分を転移させる事すら出来ないから、襲われでもしない限りただ眠つきが悪い女だ」

確かにフェイレンの力は大きいかもしれない。しかしカレンは、自分の力をよく心得ている。使い方を知っている。

「夕飯を作っている時に、手に持っている包丁を棚に戻したいとか。日常生活においてはその程度の使い方だ。また包丁を使うなら、結局取りに行かないといけないな」

「カレンさん、お料理もするんですか？」

「そこに突っ掛かるか。するよ。簡単な物しか作れないが」

調理場に立っているカレンはあまり想像できなかった。いや、まったく想像できない。そういう家庭的なものからはかけ離れた人。無意識にそういう像を作り上げていた。

「料理なんか、アナスイのほうがずっと上手くやるな」

「兄は故郷にいた頃もよく母と一緒に作ってました。私も手伝ったかった——というより包丁で野菜とか切ってみたかったですね。けど刃物は持たせてもらえなくて、いつもふくれてました」

「そうだな、最初の頃は包丁を手にするのが楽しかった記憶が私にもある」

そうか。カレンにも少女であつた時代はあつたのだ。そういう姿もやはり思い浮かばない。炯眼、長身、凜とした立姿。いくら考えても、そういうあどけなさとは無縁の存在に思える。

「それに私は一度に作りすぎる。若くして王立学院に入院した天才などと言われているが、人間としてはだらしない」

そういえばカレンは、新しい服が欲しいと言った。その理由が「その帽子が可愛かったから」という旨の発言をしている。

周りは決して女性として扱わない。カレン自身もそれでいいと思

っているのかもしれない。しかしカレンには女性的で、しかも市井の民と何ら変わらない側面も持っている。

「カレンさんも女の子なんですな。それもちょっとどんくさい」

「そうか？ 言われたことがないな」

カレンの新しい面を見た。それはフェイレンにとっては、少し嬉しい事を感じられた。

*

ネロが探し出した隠れ家は、無人の民家だった。カレンが最初に取っていた宿のように細い路地にあり、日当たりは最低である。何年も放置されていたのか、そこらじゅうに埃が積もっていた。

まだ夜が明ける気配はない。夜が明けるまでに確かめる事を確かめてしまうつもりだと、カレンは言った。死体をもう一度殺す方法を探るのだ。

捕獲した兵は、最奥の部屋に上半身が裸の状態で椅子に縛り付けられていた。ネロとその部下がやったのだろう。ネロの部下はまた姿を消していて、縛り付けられた兵の横にネロが一人佇んでいた。カレンは向かい合うように椅子に座って、フェイレンはその横で様子を眺めているという格好である。

「縄を」

口を縛っていた縄をネロが解いた。苦しそうな様子はまるでなかったのを見ると、呼吸はしていないのだろう。

「喋れるか？ 喋れるなら何か言ってみろ。大声を上げたりしたら、即座にその首を切り落とす。そうすれば死ななくとも言葉は発せないだろう」

文字にする事が難しいような呻きを、兵が漏らす。

「鷹の眼」

「喋れるのか。無駄だとは思うが聞いてやろう。お前はどうかやら行動を停止する？」

死ぬという言葉を使わなかったのは、相手が死体だからだろう。

フェイレンはなるべく冷静に、兵の反応を確認した。

行動を停止する。その言葉を聞いた瞬間、兵の眼が僅かに見開かれた。感情を持っている。そしてこれから自分が何をされるのかを理解し、恐怖した。

「私は憑者研究の部署にいる鷹の眼だ。君のような者には興味津津でね。逃げられるのなら今のうちに逃げろ」

ネロが、兵を拘束している縄を全て切り落とした。兵が椅子から崩れ落ちる。どうやら四肢が機能しないらしい。ネロの部下が即座に切断した四肢はいまだ有効である。

「動けないか。ネロ、起こしてくれ」

ネロは椅子に兵を乗せ、最低限、椅子に座った形を維持できる程度に再び拘束した。

「さて。ミラーは何故私を殺そうとする？ 君は知っているか？」

「何も知らされていない」

兵は唇を硬く結び、そっぽを向いた。何も言うつもりはない。そういう事だろう。

いきなり、ネロがだらんと垂れた兵の腕を蹴りつけた。加減していたのだろう。椅子ごと倒れたりはいしていない。

「痛覚があるんですね」

兵は確かに眼を見開き、声にならない声を上げた。痛みを感じた時の反応だ。

「そのようだ。痛覚があるから怖いか？ 軍人として仲間の情報を吐くのが怖いか？ それとも、死の恐怖か？」

また、ネロが兵を蹴りつける。よく見たら、四肢の腱を斬った傷が粗く縫われていた。ぼたりと、何滴がそこから漏れて床に落ちる。

床に染み付いた血は、闇の中では黒い斑点にしか見えなかった。

不思議と、嫌悪感はなかった。自分はただの観察対象としかこの兵を見ていない。

ちらりと、カレンに横顔を見られた気がした。

「縛ってくれ」

口に布を押し込み、縄で縛る。まるで机の上にあった筆を手に取りような、自然な動作でネロはそれを終えた。

カレンが自分の服の中に手をつ込む。投擲用の刃を隠し持っているのだ。

「昔、とある殺人鬼がいた。その猟奇的な犯行は、当時ノーサーにいた民を恐怖のどん底に陥れたんだ」

知っている。北辺の都市ノーサーで起きた連続猟奇殺人。確か、五十年程前の事件のはずだ。ノーサーの巡邏隊に捕まるまでの四十日間で、彼は十六人の人間を殺害した。

「その男はな、自傷癖があった。それに快感を感じる性癖も持っていた。そんな男が、一つだけ耐えられなかった自傷行為がある」

だらんと垂れた兵の右腕。カレンはそれを手に取った。兵の眼は恐怖に染まり、縛られて動かす事が出来ない口で必死に助けを訴えている。

（耐えられなかった事？ なんだろ）

そんな記録はさすがに残っていないかった。或いは、当時のフェイレンには知ったところでどうにもならない情報であったから失念したか。図書館で本を漁る癖があったおかげで、時々カレンが発する難しい言葉も理解できた。カレンにいちいち説明させるのは申し訳ない。そういう癖があつて良かったな、などと考えてしまう。

「爪と肉の間に針金をつっ込む痛みにはだけは、耐えられなかったらしい」

刃の先が、少しずつ兵の爪と肉の間に押し込まれる。血がじわりと滲み、やがて流血へと変わった。

聞いたことのない音がある。これが肉に異物が食い込む音なのだ

ろうか。

四肢を切断された男は、唯一動かせるのであろう首を懸命に振り回し、布と縄でろくに動かせなくなった口で悲鳴を上げた。

（このくらいの悲鳴なら、周りに聞える事はないよね）

カレンが刃を止める。そして引き抜いた。血がぴつと飛び散る。

「知っている事を話せ。君の指はまだ、十九本残っているぞ」

兵の目線は、まだ敵意を帯びていて、明確にカレンを睨みつけている。

「そうか、話す気はないか」

二本目、三本目。カレンが順番に爪と肉の間に刃を突っ込んでいく。

（どこまで耐えられるんだろ）

カレンは無表情で、当たり前前の事であると言つように動作を繰り返す。ネロは固着した表情でただ立っている。あまりに激しく暴れる時は、ネロが頭を掴んで動きを制した。

十三本目の指に達した時、兵が違う反応を示した。何かを話す。

そついう合図だと、カレンは判断したらしい。ネロが口の拘束を解いた。

「怨恨だ……ミラー殿は鷹の眼を怨んでいる。出来る事ならば殺し尽くしたいと言われた事もある」

消え入りそうな声だった。

ネロが無言でまた拘束した。まだ何か吐かせるつもりなのだろう。カレンが十四本目の指を潰しに掛かる。

また、悲鳴。くぐもった悲鳴だ。

（私が昔聞いた悲鳴とは違う）

昔聞いた悲鳴は、死の恐怖に対する悲鳴だった。今この兵が上げているのは、痛みに対する悲鳴だ。同じ悲鳴だが違うものらしい。

残りの一本。そこまでまた、カレンは兵に話す事を許した。

「他は何も知らない、本当だ。本当に——」

言葉を遮るようにネロが封をし、カレンが最後の指を潰した。

（すごい、耐えられるんだ）

耐えられたというより、耐えるしかなかった。四肢は動かず、ろくに抵抗も出来ない。しかし、この兵は耐えた。

「死んだほうがマシだ、と思えるくらいの痛みだという話だったが」「この程度では口を開かない人間など、いくらでもいる」

ネロが初めて言葉を発した。ネロはこういう行為を経験しているのだろうか。

鷹の眼の調査員。フェイレンにはそう言ったが、ただの調査員にこのような事をする機会があったというのか。

「呼吸をしていないなら、水は使えないな」

頬。何か生温いものが飛んできた。触れる。匂いですぐわかった。血だ。

目に見えぬ速さで、ネロは短剣を抜いていた。腕を斬りつけたらしい。床に黒い塊が落ちている。

（肉を削ぎ落とした？）

湧き水のように、兵の腕から血液が流れる。そこに、ネロは優しく短剣を押し当てた。兵が呻く。呻きの中に助けを求める響きがあった。

穏かな動作だった。カレンのやった事より、ずっと緩慢である。

しかし、男の苦悶の表情はカレンと同等、或いはそれ以上のものがあると表していた。

「骨を削っている」

疑問が顔に出たのだろうか。カレンが心を読んだように教えてくれる。

骨を削られる痛み。最早、フェイレンに想像できるものではなかった。目の前で苦しむ兵を見て「痛いのだろうか」と思うだけである。

「早く話す事だ。俺は何日でもお前に付き合ってやる。真実を語るまでだ」

通常の間で考えた場合だが、命に関わらない方法でこの男性兵

士を追い詰めている。カレンも、ネロもだ。

削り取られる骨。一気に切断してしまうのは拷問においては愚行なのだろうか。いや、そもそもこの兵を痛めつけるために行っているのではない。吐かせるために攻めているのだ。一度に切断しては痛みはその時のものだけになってしまふ。殺してしまつては何も話すができない。真実を聞き出した後、どうすれば行動を停止するのかを探ればいいのだ。

また血が飛んだ。上腕部の骨を削っていたのが、今度はもっと下の手首に近いあたりをネロが削り始める。腕を切断してしまう気がそもそもないらしい。

（試してみたいな……）

殺さない程度に、最上級の苦痛を。もしフェイレンが厄手で代行者を描き出し、そう指示をしたら。具現化された代行者は何をするのだろう。どういう形で拷問を行うのだろう。

「面白いが、フェイレン？」

「面白いというわけではないです。ただ興味深いだけで」

「そうか」

一瞬、カレンの表情が淀んだ気がした。しかしすぐに無表情へと戻っている。

（気のせい？）

思考は一際大きな、兵の苦痛の声で中断された。封をする時とは対象的に、ゆっくりと拘束が解かれる。

「ミラー殿は二十年前に姿を消したなんて言われてるが、それは嘘だ。ミラー殿が世に解き放たれたのは四年前……それまでずっと、捕えられていた。王立学術院の牢獄だよっ」

語気を強めた事に対しての報復か、ネロが胴へと短剣を突き立てる。それで男は黙り込んだ。ただ表情を歪めるのみである。口には即座に封をした。

「学術院に牢獄などない、カレン」

「知っている。だがこの男が言っている事が本当なら、十六年間の

空白は埋まる。なぜ四年前に突如現れたのか、説明がつけられる」

そもそも、十六年間の空白など存在しなかったのか。

四年前に、鷹の眼の情報網に引っ掛かったというミラー。その情報網に引っ掛かったというのは偶然ではなく、開放されて彷徨ったミラーを、ある種当然の事として鷹の眼は見つけたのだ。

「憑者研究の部署にいた連中、全員が感染する憑者だと言って四年前は驚いていた」

「僅かでもその反応に違和感があった者は？」

「覚えていない。当時の私は今よりも他人に興味がなかった、同じ人間としての興味は」

研究対象とするのなら興味は持てた、という事なのだろう。カレンらしい話だった。

「四年前、カレンさんが鷹の眼となったのと同じ時期なんですよね、ミラーさんを発見したのは。偶然ですか？」

そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。カレンはそういう顔をした。

「仮に偶然でないとして、何故私の入院に合わせてミラーを解放する必要がある。そして誰が」

言いながら、カレンは勘付いている様子だった。フェイレンもまたそうである。様子だけで判断できないのはネロのみだ。

「王立学術院院長」

「ここにお前を派遣したのは院長だ。そして、ミラーを十六年間捕えておいて開放する。全て極秘裏に。そんな事が出来るほどの権力を持った人間は、鷹の眼の中では院長しかない」

鷹の眼は権力を持たない。それはフェイレンも知っていた。特権と言えば、一般人なら立ち入りを許可されないような場所に入ったりに出来る程度のものだ。

「頭から信用できる言葉ではない。しかし参考にはなった。皆、頭の隅にこの兵の言葉は残しておいてくれ」

しっかりと頭に入れた。キャスケットを深く被り直す。

「ありがとう、面白い話だった」

そう言って、カレンは兵を座った椅子ごと蹴倒した。今まで一番大きな音を立てて、兵は仰向けに倒れる。

「私を怨め、忘れるな、私の顔を」

ごろんと、何かが転がる。人間の頭部。血は噴き出していない。ネロが骨を削った時と同じく、流れ出るという感じだった。離れた胴からも同じように流血している。血が流れてはいなかったのだらう。

ネロが転がる頭を足で受け止め、胴に残っていた短剣を引き抜き、目に切っ先を向けた。兵の目玉がぐると周りを見渡すように動いた。

「停止していない、カレン」

「そうか。まあいい。殺す方法は今でなくとも何とかなる。臍を切れば動かなくなるし痛覚も残っている事は分かった。今はそれで十分だ。それに――」

カレンが窓の外を見る。日当たりが最低なこの民家でも、少しずつ明らかになっていることにフェイレンは今更気付いた。

第5話：慟哭の端緒

ネイザンに来て五日が経過した。動き続けた五日間で、カレンにもそろそろ疲れが見え始めている。フェイレンは、民家に残されていた布団を引っ張り出してそこに寝かせていた。まだ少女である。それも、つい五日前までは何も知らずにただ学校に通っていた。微動だにせず泥の様に眠り込むのも無理はないだろう。

兵を押し込めた最奥にある部屋からは物音一つしない。死体にはおかしい言い方だが、まだ死んではないはずだ。今夜にでも殺し方を突き止めるつもりでいる。

埃くさい民家で、ネロと向き合うように座っていた。夜明けと共に兵への拷問を切り上げ、同時にフェイレンは倒れこんだのだ。布団を引っ張り出したのも、そこに寝かせたのもカレンである。

「あの子は、人殺しの眼をしている」

固着した顔のまま、ネロが呟いた。ネロも気付いていたのか。

「十三歳の、ついこの間まで何も知らなかった少女が、人間を攻め抜く様を見て、興味に眼を輝かせていた。異常だ」

「君が異常だと言うのか、ネロ。一族の者全てが幼少時から訓練を施され、穢れた仕事のために作られた人間である君が」

この男の動かない表情はその名残である。いや、成果と言ふべきか。調査員という名目で在籍しているが、別称がある。王立学術院書士を鷹の眼と呼ぶようなもので、懐剣などと呼ばれる事があるのだ。王立学術院院長の懐剣。そういう意味である。尤もこの呼び名は王立学術院書士によって付けられたものだ。市井の民はただの調査員だと思っているだろう。

そしてその懐剣の取りまとめて役の前任者がネロの祖父であったらしい。現任の者が誰かはカレンも知らない。ネロは知っているのであろうが、語らないだろう。

「池の辺で俺が現れ、ネイザンを出ると言った。あの時フェイレン

は、お前の腕を握り締めていた。眼にあったのは恐怖だ」

「そうだな」

「だが、一斉掃射の光景を見た時、昨夜の拷問を見た時、フェイレンの眼にあったのは好奇心だ」

フェイレンの抱える二面性。それは度々、カレンが感じている事でもあった。まるでフェイレンが二人いるような。そういう感覚に襲われるのだ。

「そういう事を君が口にするのは初めて見たな」

「いつもならば、お前に何かを問いはしない。部下を放って対象の過去を洗い出す」

閉鎖された空間、限られた手駒。表面に浮き出しはしないが、ネロが薄い焦燥を感じるのがカレンには読み取れた。それはカレンとて同じだからだ。姿の见えないミラー以外の存在が垣間見え、捕えた兵の吐いた言葉が真実だとするのなら、味方だと思っていた人間も容易に信用してはならない状況にある。

ただカレンは、ネロだけは信頼を置いていた。ネロがこういう言葉を口にするという事は逆も同じなのかもしれない。お互いに何度も仕事をこなしてきた。危機的状況に置かれても、裏切りはしなかった。

「私の仕事はこの都市の最後を観察する事だったが、それも変わってしまったな」

偶然発見した憑者が、偶然感染する力を持っていた。仲間を集め南下し、どこかで決起する。過去に事例のない出来事であるため、その記録を克明に取っておくべきだ。院長から依頼を受けたカレンは、そう思っていた。しかし現実には、念のために張っておいた宿の偽装が破られ、襲撃を受け、おまけに捕えた兵の言葉がある。姿の见えない思惑が蠢いているのを肌で感じていた。

院長は、口にしていない考えがあるのか。しかし今の状況は、ミラーという憑者が起こした騒乱に乗じて自分を消そうとしているとしかカレンには思えなかった。院長が、何のために自分を狙う。そ

れなら三都にいる時に、ネ口のような懐剣を使って消せばよかったのだ。この者達ならカレンの憑者としての力は知っているし、対策の立てようくらいいくらでもあっただろう。わざわざこのように手の込む上に不確定な要素を多く含んだ作戦を立てる理由がない。暗殺としては出来が悪すぎる。

「分からないな、本当に」

「その上、この少女だ」

フェイレンが吉と出るか凶と出るかは、まだ分からなかった。ただ今のところは役に立ってくれている。

「お前、フェイレンに情がうつったか」

「まさか」

情などとは無縁に生きてきた。憑者とは何なのか。それがカレンにとって最重要事項であり、その研究のために生きてきたと言っている。その事はネ口もよく知るところである。

街中で声をかけてきた少女。鷹の眼の制服を見て、兄を心配した少女は僅かな期待を胸に話しかけてきた。カレンはそんなフェイレンに兄の近況を伝えた。それだけだ。ここまで連れてきてしまったのは、成り行きが半分、利用価値があると考えたのが半分なのだ。

「君が期待するような事はないな、ネ口。私にとって大事なのは私自身だけだ」

服を買いたいと思った時、フェイレンを思い出した。どうせならと思っただけで呼び出した。あの時、自分が差し出した手は何だったのか。宿で襲撃を受けた際、咄嗟にフェイレンを抱き上げて窓から飛び出した。二度目の襲撃を受けた時も、同じ事をした。

自分は、フェイレンを守ろうとしていたのか。いや、違う。今までどれだけの人間を見捨てて来たのだ。昨夜の兵にしてもそうである。彼の指を潰している時には、心に何も浮かばなかった。ただの研究材料として転がっていた肉塊のようなものでしかなかったのだ。宿の主人が死んだ時もそうだ。まるで興味がなかった。信頼関係を築いていると思っただけの相手ではあったが、守ろうとは思わなかった。

た。フェイレンだけ特別になる理由がない。

「俺は、お前とフェイレンが似ているという気がする。ただフェイレンが幼いから、お前と同じような行動を取ると異様に思えるのかもしれない」

「似ている？」

何が似ているのか、ネロは言わなかった。ただ眼を瞑って見せただけである。

「憑者は、俺のような者とは根本的に違う何かがあるのか」

「違うないさ、ネロ。根の所では同じ人間だ。変わるのは上辺のほう」

憑者の歴史は迫害の歴史だった。極稀に神と崇められる事例もあったようだが、大半は違う。

自分と違う、周りとも違う、得体の知れない存在。人間は未知に恐怖する。その恐怖を克服するために研究を行う者もいれば、最初からなかった事にしようとする者もいる。人間社会はほとんどの場合後者を選んできた。憑者の数もっと多ければ別な形になっていたのかもしれない。しかし現実には少なかった。四方を自然に囲まれ、隔絶されたこの大陸においては、憑者はそういう扱いを受けてきた。

社会的多数派による少数派の迫害。これは何も憑者に限った話ではない。国家、民族、人種。当たり前存在する者同士でも続けられてきた行為だ。人の愚かさだと言ってもいい。そしてその愚かさは規模の大小を問わず、対象との関係も問わない。カレンは比較的憑者に寛容な土地で生まれ育った。エレニア山脈を超えた砂漠の土地、西域で育ったからだ。西域はかつて聖域と呼ばれ、砂漠を超えた先にいるという、手を触れずに物を動かし空を飛ぶと言われた民族の伝承を色濃く受け継いでいる。エレニアという巨大な山脈があったために、その文化がこちら側には伝わりにくかった。

「異物に対して人は何処までも不平等だというのに、迫害は何処までも平等だ」

「どつという意味だ」

「異物に対して人間は、驚くほど冷酷になれる。しかしその異物の内面は問わない」

ネロが黙ってカレンを見つめてきた。次の言葉を待っているのだ。「ミラーは英雄、フエイレンは小貴族の末娘。認知度は天地の差だ。しかしミラーが墓を掘り起こし死体を喰らっている姿を見たら、フエイレンが左手で代行者を作り出す様を見たら。少し考えれば誰にでも分かるだろう。英雄であろうと、名も知らぬような少女であろうと、その後に行われるであろう迫害は同種のもので、そこに差はない」

細かい理由はどうにもつけられるが、決定的なものではない。「そういうもののだ」という感慨があるのみである。

「そろそろ、ネイザンの民が動き出す頃合だろう。どうなるかな、この実験場は」

「少し眠れ、カレン。部下をつけておく」

ネロが立ち上がり、民家を出て行く。瞬きをした間に、その姿は見えなくなった。あの一族の者は皆がそうだ。部下をつけておくとは言ったが、カレンの見える場所には決して現れないだろう。闇に潜み、外敵が現れば可能な範囲で排除し、カレンを逃がそうとするだろう。そのためには自らが死ぬ事も厭わない。そういう一族だった。

（仕事は変わったというより、追加されたと言っべきだったか。観察の任が解けたわけではない）

この都市に来る前から、観察については見えすぎるほど見えていた。それに、ネイザンにこの事件に直接的な関与は一切ない予定だったのだ。ネイザンに来ていた鷹の眼は、偶然にもミラーの決起に巻き込まれた。それだけで終わるはずだったのである。それが、向こうからこちらを引き込んできた。その引き込んだ手を掴もうとして動くという仕事が増えた。

（一旦、落ち着こう）

立ち上がり、眠っているフェイレンの傍に腰を下ろした。相変わらず帽子は被ったまま、丸まるようにして眠っている。閉じられた眼。フェイレンに潜む二面性を、眠っている間は映し出す事はない。小さな寝息だけが、カレンの耳に届いた。不思議と心が穏かになる。

「君の力は役に立つ、起きたらまた働いてもらうぞ」
語りかけた。眠っているフェイレンに向けた言葉だったのか、自分への言葉だったのか、カレンにはわからなかった。

*

揺さぶられた。毛布に包まるフェイレンの横で、自分の腕を枕にして眠っていたらしい。

「ネロ、私はどのくらい眠っていた？」

「俺が出てすぐに眠ったのなら、四刻（二時間）といったところだ」
身体が少し軽くなっていた。眠れる時に眠り、体力を回復する。鷹の眼となり研究に没頭し、時には研究所を駆け出して野を歩いた。それを繰り返しているうちにそういう生活に慣れたのだろう。

「珍しく無防備に眠っていたな、俺が近づいたのにも気付かなかった」

「私は君とは違う。いつもは誰かに殺されるなどという警戒はしないからな。せいぜい、夜盗に気をつける程度だ」

立ち上がった。背中についた埃を払いながら立ち上がる。

「おかしい男が一人、出てきた」
「動き出したか」

ネイザンは今、ほとんどの者が経験した事がないであろう事象に

覆い包まれている。死んだはずの英雄と死者の軍によって占拠され、外部とは隔絶されている。そろそろ、正常な判断が出来なくなる者が現れても不思議ではなかった。

「行こう」

民家を出た。目覚めてすぐだからか、少し外が眩しい。フェイレンは置いて行く事になるが、ネロの部下が張り付いているはずだった。大きな心配はない。

（心配か……どうしたんだ、私は）

普通に歩いているように見えるが、ネロの脚は早かった。小走りに近い形で後ろに続く。

「中央通の噴水だ。あそこが一番、人が集まりやすい」

「何が起きている？」

ネロは答えなかった。自分の眼で判断しろというのだろう。

感染する憑者。カレンもフェイレンも、その力は一人で完結するものだ。フェイレンはまだ分からない部分もあるが、カレンなどは自分が触れた物を任意の場所へと転移させるだけの力である。ミラーのような大規模な混乱を起こす事は難しい。争闘になれば話は別だが、単純に力の強大さで比べるのならばカレンはミラーに遠く及ばない。

ざわつきがカレンの肌を打った。ここ数日、ネイザンでは感じられなかったものだ。誰もが家に引きこもり、事の顛末を窺っていた。（一つ、動くか）

ネイザンという観察対象が動こうとしている。どういうふうに。カレンの頭にはいくつかの選択肢があった。今はどれと決め付けたりは出来ない。

「人に紛れる。あまり妙な事をするなよ、カレン」

「馬鹿にしているのか？」

「いや。ただお前は、自分が目立つ容姿をしている事にあまり気付いていない」

「確かに眼つきは悪いが」

「やはり、気付いていない」

どういう意味だ。そう尋ねる前に、中央通に出ていた。人の姿がちらほら見える。皆が同じ方向を目指して歩いていた。

かつては露店が立ち並び、この通りに面して大きな繁華街が形成されていた。この服を買ったのもここに並んでいた店のどれかである。今は一つも開けている店は存在しない。

「制服は、失って正解だったな」

「制服？」

ずっと前を向いていたネロが、初めてこちらに視線を向けた。表情は決して動かない。

「制服は、失ったのか」

「襲撃された宿に残してきてしまった。拾っている暇がなくてな」
何かが引つ掛かったのだろうか。しかし、この男は何しろ表情がない。口にしない限り、ほとんど何を考えているのかが分からなかった。

（まあ、今まで制服を脱いだ事はなかったからな）

ずっとあの黒地に金系の刺繍が入った制服を着ていた。三都にある自宅にはあの制服が何着も置いてある。今回は初めて、暑さに耐えかねて別な服を調達した。それだけだった。

喚き立てるような声が、遠くから聞えた。男の声だ。周りを歩いている民も、皆がそちらを目指している。騒ぎが起きているのは間違いないらしい。

ネロと並んで歩きながら、前方で何かを大音声で喋り続ける男を見つめた。声が少しずつ明瞭になってくる。

「あれか」

見覚えのある男だった。

（フェイレンの教師だ）

カレンに対応したのは自分に歴史を教えていた教師だと、フェイレンは言っていた。弱い者に蹴りを入れ、強い者に諂う。あの男を見た時にそう感じたのをカレンは思い出した。

あの男にこんな度胸があったとは。人の輪に囲まれている。最初
に行動を起こすのがあのような男だとは、カレンも思っていないかっ
た。

「ネイザンを占拠したのは、ミラー近衛軍少将だ！ 間違いない！
俺は見たんだよ！」

ほう、とカレンは小さく声を上げた。偶然か否かは分からない
が、ミラーを見た者が現れた。

そんなはずない、という声が周りから上がった。それに賛同する
声も聞える。

「クレナゴの内乱でその人は死んだはずだ」

「死んでなかったんだよ！ 俺はミラー少将を見たことがあるんだ
よ！」

ざわつきが大きくなる。死んでなかった、そんなまさか、いやで
も。様々な憶測が飛び交った。

民衆でのやり取りを耳に入れながら、カレンは輪の真中にいる男
を見つめていた。顔は紅潮し、声からも極度の興奮が感じられる。
普通ではない。

（ミラーの熱狂的な信奉者か？）

英雄に憧れを持つ者は必ずいる。ましてやミラーは二十年前と、
英雄としては新しい男だった。記録でしか確認できない過去の英雄
よりも強い憧憬を抱く事が出来るだろう。

隣にいるネロはネロで、輪の中の男をじっと観察していた。

「有り得ない。死んだ人間が生き返るなんて」

「英雄が、死者の軍を率いて復活したんだよ！」

事実である。事実であるが、通常ならば存在しない思考だった。
異常事態と閉鎖空間が民衆の思考を麻痺させる。

「流言だな」

ネロが横で小さく呟いた。確かに、カレンやネロ、そしてミラー
本人とその兵。これらの人間を除いて事実を知る人間はいないはず
なのだ。この男の言うことは間違っていないが、事実を知らぬ者達

にとっては流言そのものである。

相手にしていられない。そう言いながら輪を離れて行く者が出始める。

（確かに馬鹿らしい話だろうな）

いい年をした大人が何を言っているんだ。そう思っても仕方がない。憑者を含む非現実的な事象を、人間はなかなか受け入れる事が出来ない。

「本当だ！ ミラー少将が死者の軍と共に復活したんだ！ 不平等な世を打破するために復活してくれたんだよ！」

なんて都合の良い解釈だろう。表情にこそ出さないが、嘲笑うような気分になった。

（自分はもつと出来るんだ。なのに周りが認めようとしない。自分の力が足りないとは、考えない）

そういう人間が世には多すぎる。自分は優秀で、誰よりも努力している。そう思い込んでいる連中がほとんどなのだ。フェイレンのような年齢の子供でさえ、なまじ世に触れてしまえばそういう思考に支配されている者も多い。上院議員、下院議員、国司、監察官、王立学院書士、宰執。他にいくらでも挙げられる。自分はそういう役職に就ける。そんな思い込みだ。

なぜ、努力が足りない、能力が足りないと感じけないのか。いや、気付きたくない。見たくない。そのために人は目を瞑る。

（珍しいから、違うから。フェイレン、君を蔑み疎む連中の動機は、それだけではない）

あの時はただ「そうだな」と返した。しかし、カレンにはもつと別な考えがあった。

（フェイレン、君は優秀なのだ）

自分よりも優秀な人間。しかしその者には立身出世したいという思いが薄い。ならば放っておけばいいというものだが、そうなれないのが人間である。

「馬鹿らしい」

ネロが周りに聞えるよう口にした。去って行くものは何か言っていた。その方が自然にこの場を離れる事が出来るだろう。

視線は輪の真中にいる男に依然として集中していた。輪から離れながら、カレンは自然とネロから距離を取る。

（一つだけか）

民衆の視線は輪の中に集まっているのだ。なのに、監視されているような視線を感じる。ネロと距離を取ったのは、そのためである。一人ならばどちらかを追うか、諦めるしかない。相手が複数ならば、お互い同時に監視を受け続ける事になる。視線を振り切ってから民家に戻り、後にお互いの報告をする。無言のうちに、ネロとはそういう動きを取っていた。

自分には視線がついてきている。カレンはそれを感じ続けていた。（試みるのは悪くない。ネロも同じ事をするだろう）

中央通から無造作に路地を選び出し、折れ曲がった。瞬間、駆け出す。全力だった。

視線は離れない。どこから見られている。探りながら、カレンは疾駆した。隠れ家としていた無人の民家は頭の中から消した。相手が誰であるかは判然としないが、監視されているのだとすれば、所在を掴ませるのは得策ではない。それをやるのは、万全の体勢を整え、相手を必ず捕えられる時だけだ。

（何処だ）

ずつと着いて来ている。しかし、位置が分からない。少しずつだが、息が上がり始めた。

また、道を折れる。ネイザンの地形は知悉していた。訪れた初日に歩き回り、地理を頭に叩き込む作業を行っている。これは何処に行っても知らぬ土地ならば必ずやる事だった。

一瞬、視線が外れた。姿は見えない。肌で感じているのみだ。再び捕捉される。それで、相手の場所を把握した。先手を取られた時はどちらか分からなかったが、一度外して再び捉えさせれば、気配を散らすよう動いても初動で読み取る事ができる。

角を折れ、立ち止まった。

「逃げられたか」

こちらが再び捕捉させた事に相手も気付いた。一度振り払ってしまえば、そのまま逃走も可能だったのだ。こちらが位置を掴もうとしている。それを見て取り、相手は監視を中断し逃走を選んだ。

（関連性がない、という説は有力ではないな）

カレンの宿の偽装を暴いた者、もしくは者達。おそらく追っつけていたのは同一或いは同一組織の者だ。

姿が見えない敵。現れたら即座に投擲剣を飛ばすつもりでいた。既に剣に触れていた手を離し、カレンは空を見上げる。

両端を石壁と影に覆われているせいか、空はひどく狭く近いものに感じられた。

ぼつりと、水がカレンの頬を濡らす。

「雨か」

濡れる前に帰ろう。新たに服を調達する場所は、もうないのだ。

*

追跡は無かった、とネロは言った。それは相手が単独であったという事を意味する。尤も、単独である事を偽装するためにわざと片方を追ったとも考えられるが、そうして考えていては終わりが無い。孤立奮闘するしかない今の状況で、確信を得るのは難しいのだ。相手は単独であるという想定の下に動くとした。

フェイレンの横顔を眺めた。もう少しすれば目覚めるだろう。

「こうして見ると、可愛い娘だ」

ネロはもう、フェイレンについての疑問を口にしなかった。同じ

事を何度も言わない。それはネロの良い所である。

「年齢の割に小柄だが」

「確かにそうだが、お前が長身なのもある」

「私がフェイレンくらいの年齢だった頃とは比べられない、か」

カレンがいくら長身だと言っても、それは女性として見ればだった。巨躯なわけではないネロよりもカレンの頭は下にある。

フェイレンから離れ、椅子に座り直した。いつものようにネロが向かって腰掛ける。フェイレンが僅かに身動きしたが、まだ目覚めただけではなさそうだ。

窓の外から、石畳を雨粒が打つ音が延々と入ってくる。それが少し、カレンの気分を穏かにしていた。

「あの男、何が目的だったというわけでもないのだろうな」

「愚者は自らの考えを披露したがる」

ネロの物言いはどこか皮肉を含む事がある。それは唯一、ネロが感情らしい感情を表に出す瞬間だった。

「あの男は、君の眼から見れば愚かだったか」

「誰もが、何が起きたのか明瞭には理解していなかった。そこに、あの男はくだらない自己顕示欲のために、死者の軍の復活などという馬鹿な事を言った。悪戯に混乱を生むだけだ」

「紛れもない事実だがな」

「事実が事実として受け取られない。よくある話だ。知らないほうがいい事も多々ある」

事実であるかどうかなど関係のない話なのだ。そういう言葉が人々の間に伝わった。そこが問題であるとネロは言う。

カレンも同じ考えだった。ネイザンの民は、心の何処かで認識しながらも否定していた感情を、形として示されたのだ。

「尤も、そんな事は研究者ではない俺からすればどうでもいい。お前の領分だ、カレン」

「そうだな」

自分の見えないところで蠢く思惑。カレンはそれを追っているが、

観察の任もまた忘れていない。いや、この都市にいる事自体が観察となつていふと言つていいだろう。ただ文書として読むのと、その場にいた者の証言を聞くのでは訳が違う。文書として記録するのは、カレンとは別働の調査員が行っている。憑者研究を専攻する鷹の眼として何を感じ、何を見たのか。自分の果たすべき役割はそこにある、とカレンは考えていた。

「あれ……？」

フェイレンが、布団の中からこちらを見て声を上げた。

「起きたか」

「寝てましたか、私。すみません」

眼を擦りながら布団から這い出し、カレンの横までやってくる。その姿は愛らしい少女そのものだった。

ネロの視線を僅かに感じた気がしたが、振り向いてもいつものような固着した表情があるだけで何も変わらない。

「君の元教師が、中央通の噴水近くで大層な御高説を聞かせてくれたよ。何でも、死んだはずの英雄ミラーが、死者の軍を率いて復活したそうだ。何でも、不平等な世を打破するために、だそうだ」

「そういう方でした、あの人は。ミラーさんが好きだったみたいですよ」

困った事を伝えるような口調だった。まるで、聞き分けのない子供の悪戯に苦笑しているような。

あんな男が子供に物を教えるなど。カレンはそう思う。自らの無能さを棚に上げて世を批判する。愚かとしか言いようがない。そんな大人に教わる子供が不憫だった。

「それで、何か他に変わった事は？」

「その男を見た帰路、私とネロは何者かに見張られてる事に気付いたくらいか。撒いたが」

何度か頷いてみせるフェイレンは、まだ眠たげだった。頭も上手く回っていないのだろう。

「雨、降ってますね」

ぽつぽつと降り出した時から、雨粒は大きかった。今はもう、小さな音ならかき消してしまうくらいの音を立てている。

温暖な気候と季節が相まって、漂う空気は生温く、肌にまとわりついてくるような不快感があった。

「この辺りはそうでもないんですけど、私が生まれた所はあまり晴れ間が覗かないところでした。分厚い雲がずっと横たわって」

「そういえばアナスイが言っていたな。南方でも西の生まれだと」

あの辺りは一年の半分は雲に覆われているという話だった。そこから南へ行けば熱帯林が生い茂っており雲は消えるというが、暑さは三都などとはまるで質の違うものであるという。

ふと、鳥の鳴声が聞えた。いや、鳥の鳴声に近い何か、だ。ネロやその部下の符丁の一種である。

「何があった、ネロ」

「ネイザン周辺の軍が、都市の外に集結し始めている。数は一万程度だ」

近辺にあった即応できる戦力を集め始めた、といったところだろう。ネイザンでの開戦も近い。俗説だが、攻撃城戦においては攻撃側の戦力は城壁の内にいる軍の三倍は必要だ、と言われている。例外はいくらでも存在するが、太古から繰り返されてきた戦の数と比べれば微々たるものなのだろう。

外でも物事が動き始めている。内では民の動きが見られるようになってきた。

「進展しないのは私達だけか」

「一つだけ、上手く行けばすぐにでも全てを把握できるかもしれない方法はある」

確かに、手詰まりというわけではない。しかし、成功する可能性は低いと考えられる。

「ミラーの襲撃、捕縛」

一度目の襲撃の際、襲ってきた者達は確かにミラー率いる死者の軍だった。ミラーが関わっている事は明白なのだ。

無論、ミラー自身が何を何処まで知っているのかは分からない。

王立学院院長に泳がされ、ネイザンでの決起まで予測されていた男だ。後天性の憑者は表向き理性を保っているように見えても、最後のところで己の欲望、目的に打ち勝つ事ができない。

ただ一つ確実であるのは、ミラーにカレンの偽装を見破る謀略的側面はない。つまり、ミラーに「鷹の眼がネイザンにいる」と伝えた者の姿を捉えられる可能性は極めて高い。

「この実験場を破棄したくないのが鷹の眼の総意ならば、誰にも見破られず、短時間で全てを済ませる必要があるが」

「成否はやらなければわからない。しかしある程度の予想を立てることくらいは出来る。ネロ」

「部下は全員連れて行く」

カレンやフェイレンが行ったところで足手まといだった。争闘を想定しているのならば戦力になるが、隠密行動となればネロとその部下五名に任せるしかない。気付かれずに連れ出し、再び戻さなければならぬ。そういう作戦になるのだ。

ネロの姿が消える。雨が有利に働く。ネロはそう考えたのだろう。

「私達にも、やる事がありますね」

「ああ、そうだ」

奥の部屋に閉じ込めた死体の兵。あれが何をすれば行動を停止するのか、調べなければならぬ。

第6話：狂騒

ネロが姿を消してから三日間、カレンとフェイレンは民家と中央通の噴水がある広場を行き来する事を繰り返した。

外では戦闘が開始されたらしく、争闘の気配がネイザンの中にも少しずつ流れ込んできている。ネロはあらゆる状況下でミラーの捕縛を狙っているのだろう。全てを秘密裏に処理するとなれば、カレンにも方法は分らない。その手の仕事に特化した者でなければ分らないのだろう。

内では、教師の語る言葉の熱が日に日に増していて、それに流される者も出てきていた。「世の不平等を打開するのは今しかない」などと高らかに謳い上げている。しかし冷静な眼を持ってそれを制止する者もあり、少しずつだが対立軸が浮き上がりつつある。馬鹿なことはやめろと言う人間と、ミラーを勝手に祭り上げようとする人間。二つに大別出来た。そして双方に言える事が、眼の色が変わってきたという事だ。閉じ込められているという不安と死体の巡邏隊が毎夜徘徊しているという恐怖があり、死者の軍を死んだ英雄が率いて復活したと言い出す者が現れたのだ。恐らく、色々な場所で「そうなのかもしれない」と「そんなはずない」という意見がぶつかっている。

カレンにとっては珍しいが恐れるものではないが、民にとっては全てが異常な状態だった。しかしフェイレンはそれを熱心に観察している。それが悪いとも思わない。フェイレンはもう、ネイザンにいる民とは違う場所に立っているのだ。フェイレンは、観察者としての眼を持っていて、資格も得た。それだけの話だ。

雨は相変わらず降り続いており、その勢いは増す事こそあれ減りはしない。ネイザンに到着した日、鷹の眼の制服を着ていたせいで暑さにやられた。夏が終わり、少し涼しくなってきたから、制服を変えた次の日に、ネイザンへ行けと院長から指示を受けたの

だ。

「代行者は消えたか、フェイレン」

「いえ、まだ」

奥の部屋の兵。何をしても、生物で言う『死』という状態になる事はなかった。カレンは思いつく限りの方法を試したが、行動を停止しない。

だから試しに、フェイレンに代行者を描き出させた。『標的の抹殺』を代行する者だ。それでも殺す事が出来ない。代行者はフェイレンの意思を代行し終えるまで動き続ける。もう、奥の部屋の兵は人の形を留めていなかった。バラバラの肉片でしかない。それでもまだ、行動を停止した事にはなっていない。動きはしないが、死んではない。そういう状態らしい。

「試す方法がないので分かりませんが、ミラーさんが死ねば彼らもまた止まるとかそういうのはないですか？」

「十分に考えられる。ミラーが過去の戦場を再び作り出すために得た力だから。ミラーが思いを遂げれば、彼らもまた普通の死体に戻るという考え方は妥当だろう」

それに憑者の、死後も継続する力というのはまだ例がない。

三日間に、フェイレンの力については色々試した。

まず分かったのは、同時に生み出せる代行者は二つまでという事。三つ目を描き出そうとしたら、何も具現化されなかった。古い物が消えて新しい物を出すのは不可能だった。

次に分かったのが、フェイレンの身体よりも大きな代行者は生み出せない、という事だ。これに関しては理由は分からない。

そして最後に分かったのが、下せる命令は極めて単純なもの、だった。攻撃、防御。その程度が限界だった。また、命令を下さずに描いたものは、何もせずただ辺りを漂う。

「ここまでやっても駄目ならもういいか」

「消しますか？」

「そうしよう」

代行者はフェイレンの意思で、まだ行動を終えておらずとも消す事も出来た。奥の部屋から聞えていた物音が消える。肉片を突き回す代行者が立てていた音だ。

フェイレンは、代行者に鷹を描くようになっていた。鷹の眼にちなんだものなのだろう。

「眠っていいぞ、フェイレン。今日はもうする事がない」
「あ、はい」

かつては居間となっていたであろう場所に、無造作かつ無遠慮に敷かれた一枚の布団。フェイレンがそこにふらふらと歩み寄る。布団の上に座り込み、しばらく窓の外を眺めていた。

ここ三日、ああして布団の上で窓の外を見ながらフェイレンは何か考えている様子だった。昼間に噴水に出てきては演説紛いの何かを行う教師の言葉を思い返したりして頭の中を整理しているのだろうか。こちらに顔を向けていないから表情もわからないが、とにかく何かしらの思念の中にいる。

「この雨は、季節が移り変わるお知らせなんです」
「ほう」

「寒くなってきましたね。上着を一枚買いたいです」
「私もだ」

薄いシャツに膝丈のスカート。フェイレンは最初に会った時から身軽な格好だった。目立つ格好でもない。強いて特徴を挙げるとすれば、いつも被っている帽子だけだった。

「そういえば、学校も本当なら終業式があつて、もう故郷に着いてるはずだったんですね、私」

「帰りたいか、故郷に」

フェイレンが、窓の外にあつた視線をカレンに向けた。

「兄を慕い、家族を想つて、それらを心の励みにして学校に行っているはぐれ者。そう、カレンさんの眼に、私はそう映りましたか？」

最初はそう見えていた。しかし、一緒にいる時間が長くなるにつれてそうではないのかもしれない、と思うようになった。

しかし、具体的に何かが浮かんだわけではない。漠とした思念として、カレンの胸中の隅に転がっている抽象的なものだ。

私も、本当は分かっているんですよ。フェイレンがそう小さく呟いたが、カレンに向けられた言葉ではなかった。眼に僅かな悔悟が浮かんでいるだけである。

「カレンさんと会ってから、寂しいと思う事が減りました。ただ、こうして布団の上で呆ける癖だけは直りません」

「それは癖だったのか」

「はい。怖いんです」

何が怖いのだ。喉まで出掛かった言葉を、カレンは飲み込んだ。

フェイレンの眼にあるのは、やはり強い悔悟だった。カレンの言葉をそれが遮る。

「カレンさんは、怖いと思う事がありますか？」

「ある。今のこの状況だって、怖いと言えば怖い」

恐怖と勇気の、均等な天秤が必要なのだ。恐怖に傾きすぎればそれは臆病となり、勇気に傾きすぎればそれは蛮勇に他ならない。どちらであつても冷静とは程遠く、観察者としては失格である。

「楽しかったり面白かったり、辛かったり寂しかったり。このころ、落差が激しいです。どうかしちやつたのかなあ」

フェイレンの持つ二面性の話だろう。薄々そういうところがある事には、自分でも気付いているのか。

いや、最近気付いたのだろう。それまでは、ただ兄を慕っているだけのフェイレンだったはずだ。どこかで生まれたもう一人の自分が浮き上がってきた。そんなところなのだろう。

カレンは立ち上がり、ぺたりと座り込むフェイレンに向かって胡坐をかいた。

（これじゃあまるで男だな）

少女らしい仕草を残したフェイレンと自分を比べると、時々そう思う。

「どうかしました？」

「何が怖いのかは分からないが、今は私がいる。安心して眠れ。君は小柄だからな、よく寝て大きくなるといい」

「最初に会った時も同じ事言いましたね、カレンさん」

そういえば言った気がする。第一印象が、小柄な少女、だったのだ。

「けど、ありがとうございます」

フェイレンが横たわる。それでも布団は十分すぎるほど余っていた。

試しに帽子の上から頭を撫でてみたら、フェイレンが照れくさそうに笑った。

かつてはフェイレンの兄であるアナスイも、こうして妹を寝かし付けた事があるのだろうか。剣の腕こそあるが、根は穏かな男だった。優しい兄と、それに甘える妹。微笑ましい光景である。

フェイレンが寝息を立て始めるまで、ずっとそうしていた。不思議な気分で立ち上がる。

（そういえば私は、両親にこんなふうに接してもらった事はなかったな）

カレンに兄弟はいない。両親も知らなかった。叔父だと名乗る人に育てて貰ったのだ。膨大な書物を与えられた。他には何もしてくれなかったが、カレンにとってはそれで十分だった。幼いうちから自分の憑者であるという境遇を理解し、それが何であるかを考える事が出来たのだ。フェイレンのようによく分からないまま幼少時代を過ごした訳ではない。

叔父が死んだ時、与えられた書物は全て頭の中にあった。当てもなく彷徨い始め、エレニア山脈を越えて三都まで辿り着き、そこで王立学院が管理する図書館で六年程働き、やがて鷹の眼となった。本当は知っていた。自分がなぜ叔父に育てられたのかも、叔父が自分に書物を与えたのかも。しかしそれは、胸に秘め続けている。

「ネロが言っていた通り、君と私は似ているのかもしれない」

フェイレンは少し身動きして、それに答えた。もう言葉を言葉と

して認識してはいないのだろう。ただの音として耳に入ったに違いない。

「君も私も、同じだよ」

フェイレンに対して感じる漠然とした何か。その姿が明瞭になり始めていた。

同じ境遇に生きる者への共感だ。何ら変わった事はない、ごく普通の人間らしい感情である。

「憑者である君が、なぜネイザンに一人でいるのかも、分かった」
アナスイがかつて「妹から手紙の返事が遅くなった」と嘆いていた事がある。それも繋がった。アナスイは、フェイレンがネイザンにいる事を知らないのだ。長期休暇の際、故郷に帰って始めてフェイレンは兄からの手紙を開く。アナスイはフェイレンの所在を聞かされていれば、妹宛ての手紙はそちらに送るだろう。それが行われていない。

（この子は、厄手で問題を起こしている。それも、親族が看過できないような）

フェイレンの二面性はその際に生じたものか、或いはその問題行動を起こすきっかけとなった出来事によって生まれたもの。カレンにはそう思えた。

両親としては、家に置いておきたくなかった。だから適当な理由をつけて放り出す。学校など体の良い理由。そんなところだろう。兄のアナスイが知れば当然止めるから、彼には知らされていないのだ。

君は、私のようになるのか、フェイレン。そう問いかけてようとしたが、また言葉には出来なかった。

座りながら眠った。ネロが部下を連れてミラーの捕縛を狙っているという事は、この隠れ家の防御は皆無なのだ。眠り方にも色々ある。野宿をしなければならぬ時の休み方も学んだ。

夜明けと共に眼を開ける。フェイレンは、昨夜眠る前と同じように、布団の上にぺたりと座り込んでいた。ただ、視線は窓の外ではなくカレンに向いている。

「二刻くらい前に起きたんですけど、カレンさんすごいですね。ぴくりとも動かなかったです、座ってるのに」

「緊張を解かなければこんなものだ」

害意を感じ取る。そういう方法をネロに教えられ、自分なりに試した。四年前、鷹の眼となった当初のカレンは驚くほど無防備だったと、ネロがかつて言っていたような気がする。

雨が昨日よりもきつくなっていた。屋内でも、こんな寂れた民家では小声くらいはかき消されてしまう。それどころか、地鳴のような振動まで伝わってきた。

「雷ですね」

豪雨に雷鳴。あまり良い天気だとは言えなかった。だが、姿を隠すには悪くない。

「出るぞ、フェイレン」

「はい」

扉の近くに合羽が二着あった。フェイレンの教師が中央通に姿を現した日から、少しずつ市場の店が開かれるようになったのだ。最盛期には程遠いが、合羽くらいは手に入った。

この雨ではいくら水を弾いても帰ってくる頃には濡鼠だが、無いよりは良い。外への扉を開いた瞬間、樽でもひっくり返したかのような雨粒がカレンの頭や肩を打った。少し痛む。

黒い合羽にフェイレンもカレンも身を覆い、フードを深く被って歩き出した。幸い、風はあまりない。吹きつけてくるような雨では

なかった。

外に出てしまうと、フェイレンの声もあまり聞えなかった。多少声を張らなければ通じない。

また、地鳴が伝わってくる。どこかに落雷したのだろうか。

（確実に、地方軍の集結が遅れる。来たところで、この雨ではまともに戦闘も行えないか）

それは、ネイザンの開放が遅れる事を意味している。これから更に雨脚が強まるのならば、外の軍は確実に身動きがとれず、増援の要請も出来ない。

カレンは足下を見た。膝の辺りまで、雨粒が飛沫を上げている。都市全体が霧で覆われているような錯覚。まるで、異常事態を包み隠そうとしているように。

「フェイレン、南方の雨はいつもこんなに降るものなのか？」

顔を寄せ、声を張った。それでやっと、フェイレンの耳に言葉が届く。

「いえ。私がネイザンに来てからの話ですけど、ここまで降ったのは初めてです」

ネイザンは、ロクネ河の辺にある都市だ。ロクネ河はこの国の三河の一つである。大河と言っていていいだろう。それだけに支流も多い。地方軍は更に動きを取り難い状況に陥っていると予想できた。撤退するにも阻まれ、進軍するにもまともに戦う事ができない。城門は堅く閉じられ、緊急に終結した軍であるからまともな攻城兵器もないだろう。兵数も少ない。

唯一のネイザン都市内への強襲に使えた道筋が、この雨で塞がれてしまった。外から通じる、ネクロ河支流の水路だ。

助けを期待しているのは、カレンでもフェイレンでもない。ネイザンの民だ。彼らの心に、雨が絶望を飢え付ける。

（限界が近いな）

足は中央通の噴水がある広場へと向いていた。

噴水が見えた時、もう人は集まっていた。近づくにつれて感じら

れた喧騒が、日増しする雨によって時を経れば経るほど遠くなっていく。

演説はもう始まっていた。それを見つめる人々だけは、雨と共に増えている。眼に宿した妖しい光が、輝きを鋭くしている。

教師の支持者は増え続けていた。最初は一人で始めたというのに、いつの間にか彼の背後に立って聴衆を見つめる者がいるのだ。

（都市が二分されていく）

雨の中でも、教師の声はしっかりと耳に届いていた。いつの間にか、英雄の代理人を名乗っている。カレンはフードの下で嘲笑した。「ミラー殿に、俺は会った。言葉をかけて頂いた！」

これはもう、宗教のようなものだ。教祖の言う事などどれだけ真実なのか誰にも分からない。そしてそれは、信者によって重要な事でもない。

「鷹の眼が、ネイザンに潜んでいる！ ミラー殿はそれを探し出せと言われた！」

フェイレンの身体が少し動いた。抱き寄せるようにして、動くと伝える。どうせ雨と合羽だ。誰にもカレンがカレンである事など分かりはしない。

「だから今日、都市の検分を行う！ 匿っている者がいるならば名乗り出よと伝えておけ！」

教師が片手を上げて声を上げる。それに応えるように関にも似た何かが聴衆からも上がる。

（すっかり指導者気取りだな、あの男は）

ミラーは、鷹の眼への怨恨を抱いている。数日前に捕えた兵から聞きだした情報だ。どうやらそれは間違いではないらしい。こうして毎日のように広場で騒ぎ立てていれば、ミラーの耳にも届くだろう。ミラーはそれに眼をつけたのか。利用できると思ったのか。

「動くな、フェイレン。この集団に紛れたまま移動する。時を見て抜け出すぞ」

群衆が動き出す。それに歩調を合わせて、カレンは様子を窺った。

ここで飛び出して振り切る事もできるが、あまりに人数が多い。三百人はいるだろう。ネイザン全体の住民の数からすれば一部の一部だが、これだけの人数に執拗に追跡を受けては振り切って隠れ家に戻るのは難しい。潜伏場所を失えば、この豪雨の中を何日も、果てなく逃げ回るはめになる。それは避けたい。

フェイレンの小さな拳が強く握られているのを、僅かに見て取った。

（そうだな、一歩間違えれば何をされるか分からない）

恐怖はあるのか、と問われた。それはある。間違いなく心のどこかに存在している。だが、それ乗り越える術をまた、カレンは知っている。

動揺を表に出さなければ、この場は凌げる。

「やれ！」

中央通に面した建物。次々と扉が蹴破られ、人々が中へと押し入っていく。

（ここにいるのだから、知る由もあるまい）

さながら暴動であった。もう、この都市は引き返せないところまで来ている。遅かれ早かれ、こうなる事は眼に見えていた。ただ、きっかけがカレンにとって都合が悪いだけだ。

こうして一部が暴れ始めると、それに便乗する者は多く出てくるだろう。裁く法も、捕える巡邏隊も、ネイザンにはない。無法地帯だった。

最初はカレンを探そうとするかもしれないが、そう時間を置かずに暴徒と化すだろう。そうなれば、あらゆるところで混乱が加速し、収拾がつけられなくなる。

（狂気が感染する）

雨にかき消されて、合羽を着た人々が少し走り回っているという程度にしか見えないのかもしれない。だが扉を打ち壊し、家屋を荒している。盗賊と何も変わらない。ただ彼らの胸にはミラーという正義が存在し、そのために働いていると信じ込む事が出来ている。

大義を盲信すれば、どこまでも残虐になる。人間の性だった。フェイレンが学校で迫害を受けたのと同種のものである。それが大義なのだ。大義である以上、従わない者は切り捨てられる。

破られた扉の一つをくぐり、適当な民家に入った。裏口から抜ける。気付かれる事なく中央通から離れてしまえば、姿を眩ますのは難しくない。フェイレンは後ろをついてきている。

奥で物音がした。女の悲鳴も聞えてくる。大体の想像はついた。助ける義理はない。そのまま無造作に歩き出した。

「おいっ」

扉を開けて、男が出てきた。合羽は脱ぎ捨てられ、地面に転がっている。一瞬だけ、女の姿が見えた。大体の想像はつく。

「なんだ。こっちは鷹の眼を探してるんだ、邪魔するな。別にお前達は何をしようと咎めたりはしない」

口調を変えて、声をかけてきた男に適当な返事をした。

男が部屋へと戻っていく。

（せいぜい愉しんでくれ。私の関知するところではない）

社会的規範が放棄され、新たな大義を手に入れたつもりでいる。理性が鎖が外れた獣のようなものだ。

刹那、視界の端を黒い何かが奔った。

鷹。立体感のない影のようなソレは、フェイレンの生み出した代行者だった。男の喉下に鷹が喰らいつく。

血が噴き出した。男が痙攣しながら倒れ込む。鷹はすぐに次の標的へと攻撃を開始した。

「何をしている、フェイレン！」

万年筆が床を削り取る。合羽と一緒に購ったものだ。鷹が部屋の中を飛び回り、フェイレンが削った一本の線が具現化しては、中にいる男達を貫いた。

一瞬にして、小さな民家が血の海と化す。生きているのはフェイレンとカレン、そして襲われていた女だけだった。

（なぜ。助ける義理はないと、君は私についてきただろう）

万年筆を床に突き立てたまま、フェイレンが硬直する。同時に、女が悲鳴を上げた。何が起きたか理解したわけではないだろう。ただ、全身が血に塗れ、男達の五臓六腑が四肢に絡みついている。

さっきの悲鳴とは比べ物にならない大きさだった。

まずい。カレンの背筋を冷たい何かが奔る。刃を突きつけられようが、こうはならない。

中央通から、合羽に身を包んだ者が一人二人と様子を見に来る。

惨劇に驚愕し、次々と中央通にいる仲間に声をかけ始めた。

「フェイレン、逃げるぞ！」

フェイレンの手を引き、駆け出した。この都市に来てから逃げばかりだ、と場違いな思いが頭を過って消えた。

鷹の眼だ、という声が追ってくる。当然の帰結だった。仲間が殺された。自分達が追っていたのは鷹の眼。鷹の眼が殺した。そんなところだろう。

雨粒が顔に当たる。痛かった。フェイレンの手だけは離さないようにして、必死で走る。

（ネロがいれば……！）

攪乱も出来た。しかし、ネロはミラーの捕縛に出たまま帰ってきていない。フェイレンの力があれば何とかなるかもしれないが、フェイレンからは何も力が感じられなかった。握り締めた手も、カレンについて行くために動かす脚も、ただ成り行きに任せて動かしている。

「止まれ！」

道。細い路地だった。二人もいれば道を塞がれる。

持て余している片手で、服の中に隠した投擲剣に触れた。転移させる。風を斬る事はない。瞬きをしている間に、道を塞いだ二人の胸の辺りに突き立っている。

倒した二人を飛び越し、また疾駆した。四方八方から追ってくる（逃げ切る前に、こちらの体力が尽きるな、これは）

どうする。頭の中から必死で案を搾り出そうとした。何か、ある

はずだ。逃げ切るための方法が。

「フェイレンっ、しっかりしろ！」

返事はない。何が、この少女をこうさせているのか。さっきの光景。女が寄ってたかって犯されかけていた。あれか。

曲がり角。ぶつかった。

「くそっ」

「鷹の眼だ！」

声を上げられる。近くにいた者が次々と駆け寄ってきた。

投擲剣。あと五本しかない。続け様に飛ばした。近寄ってくる者が次々に倒れ込む。どれも、一撃で殺していた。

木箱。視界の端に捉えた。駆け寄り、そのまま蹴り砕く。飛び散った破片を転移させ、投擲剣と同じように使った。もう、何人倒れているのかわからない。流れる血が、豪雨に攫われて消えていく。

まだだ。まだ万策尽きたわけではない。長い破片を一つ拾い上げ、構えた。

（武器を出せ。何でもいい、手に取れ）

包囲の網がどんどん厚くなっていく。どう、これを破る。考えながら、木片を構え続けた。

武器を取れば、それを相手に突き刺す事ができる。しかしカレンは生物を転移させる事はできない。徒手空拳はこちらの攻撃へと変える事ができない。

「フェイレン、ここを動くな」

フェイレンの手を離れた。呆然と立ち尽くしている。

何があつたのかは後で聞けばいい。今この場で戦えるのは自分だけ。そう思い定めた。

包囲している者達が、思い思いに民家などから棒などを持ち出してくる。そうだ、それでいい。カレンは少しだけ笑った。これならば勝機はある。

一人、打ちかかってきた。上段。思い切り振り被ったその動きは、戦闘を経験した事がない素人のものだ。大振りは隙を生む。動きを

小さくまとめるのが武器の扱い方だ。力を使うまでもない。

がら空きだった喉に、容赦なく木片を突き立てる。血を噴き出して、男は倒れた。カレンを打とうとした棒だけ、足で近くに寄せておく。

群衆が息を飲むのが分かった。近辺にいた者は集まるだけ集まったらしい。もう輪に加わってくる者の気配はなかった。豪雨が情報を遮断している。

容赦なく殺す。それを明確に示した。武器も持った。群衆がそれに脅威を感じ始めている。素手の状態で一斉に飛び掛られると、カレンの力ではどうしようもなかった。そうならないために投擲剣を全て使い切ったのだ。初撃で衝撃を与えれば、慣れていない者が相手ならば怯む。数を恃んでいるのなら尚更だ。

全員が武器を手にするまで動かない。包囲している者達がそうしているのが分かった。

（どうする？）

心の中で、包囲の最前列に語りかけていた。どう攻める。どう捕える。おそらく、考えなどない。それが分かっている、一人問いつ続けた。それは自分への問いでもある。

打ち掛かってくる。三名。正面の敵に手にしていた木片を飛ばした。すぐに倒れて動かなくなる。

左右。両手を突き出す。その両手に触れた瞬間、凶器は振るった者に牙を向く。全てが胸に突き立っていた。

さつき引き寄せた棒を手に取り、再び構え直す。

（私はどこまでも抵抗するぞ、さあどうする）

包囲している者達が恐怖に当てられているのが伝わってくる。たった一人に、もう何人がやられたか。暴徒としての熱が冷め始めているのだ。本来、市井で暮らしている民である。こういう事への耐性は皆無だ。しかし、まだ熱は残っている。その熱を払い切るには、包囲している者の半数は倒す必要がある、とカレンは判断した。集団の中にいる限り、人は安心する。自分が正しいと思う。

五人が脚を踏み出す。ほぼ同時だった。内二人は刃物を持っている。

一人と馳せ合った。首元から血を拭いて倒れる。男が握っていた刃物を、馳せ合う瞬間に奪い、喉を裂いた。即座に棒を転移させる。また一人、音もなく倒れた。いや、雨の音にかき消されている。

あと三人。振り翳される凶器を転移させ、空いた手で喉を裂き、動脈を切った。すぐに動けなくなる。

「何をしてる！」

聞き覚えのある声。フェイレンの元教師だ。カレンはフードを取って見せた。

「いつぞや以来ですね。御高説、拝聴させていただきました、先生」
皮肉をこめて、丁寧な言葉を使った。その後に笑って見せる。どんな笑顔だっただろう。自分の顔は自分で見えない。ただ、教師が眼を見開いた。

「私はここにいる者を全て殺してもいいのです。しかし、それは貴方も望むところではないはずです」

「そんな事、出来るはずが——」

カレンの周りに転がっている死体。教師の眼がようやくそれを捉えた。もう十体を超えている。

当然、はったりだった。数十人を相手に全てを殺し尽くせるほど、カレンは戦闘に特化した憑者ではない。本来は研究者なのだ。アナスイなどならば、斬り伏せる事も出来たかもしれないが。ミラーがもしこの立場にいるのなら、伝説が間違いでなければものともしない数だろう。そういう人間離れた人間が、この世には確かにいる。憑者でもないというのにだ。

もう、手が震え始めている。研究所で実験をしているわけではないのだ。敵意を持って向かってくる人間と対峙するのは、かなりの体力を消費する。子供の頃に喧嘩を一度でもした事があるなら、それは知る事ができる。

「大人しくしろ、鷹の眼。ミラー殿に身柄を届ける」

「何様のつもりなのでしょうか、先生。貴方はネイザンの一教師。それだけでしよう。巡邏隊の持つ権限は貴方にはない」

「お前こそ何様のつもりだ。これだけの人を殺して、ただで済むと思っているのか。見逃せるはずがない」

都合の良い事だ。どこまでも、どこまでも、こういう人間は自分に都合が良い。

「民を扇動したのは貴方だ。ネイザンで起きている暴動は、貴方が引き起こした」

「違う。英雄が復活したのだ。俺達はそれに従う」

「だからといって、私一人を狩り出すためにこの有様ですか？ 貴方がミラーを慕うのは憧憬を抱いていたからでしょう。しかし貴方が扇動したこの暴動は、間違いなく貴方自身の欲望によって引き起こされたものだ。大義と私欲をすり替えている」

理性から解き放たれた人間が、大義を掲げて私欲を貪る。今このネイザンで起きている暴動はそういう性質のものだ、とカレンは思った。

「世の不平等を打破するために復活した英雄、ですか。不平等？ そんなものは当たり前に存在します。そして真に有能な者は、そんな不平等などものともしない。力ある者は何があつても立ち上がってくるのですよ、先生。貴方はそれが出来なかった。それだけの能力もなかった。だから、こんな田舎の都市の一教師でその人生を終えようとしている」

「何を――」

「自分の無能の責任を他人に求める。自分が一番正しい。そういう思い込みですよ、先生。今この状況も、貴方が絶対の正義で付き従わない者は何をされても文句は言えない、のでしょうか？」

思いの丈を述べたと言えは間違いない。しかしそれ以上に、挑発の意を多く含んでいた。

向かって来い。首領を失えば、集団は瓦解する。この暴動を止める義理がカレンにはないが、自分が助かるために必要ならば抑止も

する。

「お前のような若造が、なぜ王立学術院書士なんだ。俺ではなく、お前が！」

喚き立てるような話し方だった。頭に血が昇っている。

「私は努力をしました。それだけです」

「俺だって努力はした！ 誰よりも辛い努力を！」

「それが思い込みなのです。自分が一番辛いんだ、しんどいんだ。そんな被害妄想があるから、貴方はいつまでたっても変わらない。周りは自分よりも努力している。それに負けられない。私がこれが正しい努力のあり方だと思っています。貴方は他人との比較方法を間違えている」

一番痛い所を突いたつもりだった。

早く、襲ってこい。殺してやる。そのつまらない人生の幕を下ろしてやる。

「殺せ！ ミラー殿に差し出す必要などない！ 殺せ！」

自らは来ないか。心の中で嘲笑した。しかし、辛い戦いになる。生き残れるか。

教師が遠ざかる。生き延びる手段の一つが遠ざかる。

仕方がない。そう思った。同じものに固執しすぎては見えるものも見えなくなる。この包囲を力づくで破る方法をまた探し始めた。

来る。少しずつ、カレンを殺すという意味が包囲から漂い始める。
(私も限界まで抵抗するがな)

じりじりと、輪が縮まる。

地面を蹴った。自ら輪に飛び込む。驚いて、雑になった攻撃。凶器によるものだ。転移させる。飛び込み、殴りかかった。

カレンに向けた攻撃が、違う人間に当たる。こんな狭い範囲で棒など振り回しては同士討ちが関の山だ、とカレンは思った。

しかし、長居はできない。一度掴まれてしまえば終わる。輪から飛び出し、フェイレンのところへ戻った。

(こんな事を繰り返すしかないのか)

いや、二度目は通用しないだろう。包囲していた者達が、それぞれに距離を取り始める。

フェイレンが動いてくれれば、とは考えなかった。十三歳のこれまで何も知らなかった少女を巻き込んだのだ。罪悪感などはない。フェイレンは自分の意思で着いてきたからだ。しかし、酷だったのも理解できる。見えない敵に狙われ、都市は狂気が感染し始めている。いくら学校で嫌われていたと言っても、殺しにかかってくるわけではないのだ。重圧の質があまりに違う。

手駒に自分の希望はいらない。自分が持っているものを知悉し、それを動かして状況を打開するのだ。

「女一人に及び腰か、情けない」

挑発しながら、頭を回転させた。どこかに抜け道があるはずだ。フェイレンを引っ張り、駆け出せるはずの道が。

どうした、何があった。そう言いながら、包囲に人が加わってくる。七人だ。また増えたか。一瞬、諦念を抱きそうになる。しかし、すぐに気付いた。

（ネ口か。ミラーの捕縛から引き返してきたか）

七人が、それとなく包囲の輪に加わった。逃がす道筋を作っているのが、すぐに分かった。

（しかし、七人？ ネ口を含めて六人だったはずだ）

一人は偶然一緒になったとも考えられるが、明らかに逃がすための道を作るのに協力していた。

光が見えた。一筋の逃走経路。カレンはフェイレンの手を掴む。

同時に、輪に加わったネ口達が短剣の鞘を払った。

飛び込む。驚くほどに抵抗がない。上手く道を作ってくれた。路地に駆け込んだ。全力で走る。フェイレンは引き摺られるようにして着いて来ていた。

「フェイレンはどうした。この子がいる限り、お前は大丈夫だと思っていたが」

ネ口が並んで駆けていた。五名の部下はそれぞれに散って攪乱に

回ったようだ。背後には誰もいない。

「分らない。君こそ、どうして私が囲まれていると知った。場所も。この雨では、搜索も難渋したはずだ」

「伝えに来てくれた人がいた。すぐに分かった。俺とお前を監視していた視線だったからな」

あれは敵ではなかったのか。では誰が。ネイザンに別働で潜り込んでいる調査員の助けは受けられない手筈になっていた。ネロとその部下。それ以外に、誰がカレンの事を知っていて、尾行や監視を行う技を体得しているのだ。

「別の隠れ家がある。中央通からかなり離れた場所だ。あそこなら、連中が押し入って来るまで数日は掛かるだろう」

「君が用意したのか？」

「違う、協力者だ」

角を折れた。まだかなり距離があるだろう。しかし、追っ手は振り切っていた。攪乱が効いている。どれを追えばいいのか群衆は迷ったのだろう。結果、全てを追った。そして混乱の中に見失った。

カレンはフードを被り直した。顔には濡れた髪が張り付いている。

「俺達は失念していた、カレン。今この都市は、死者が復活するのだ」

「死者が」

いた。カレンの素性を知り、宿の場所を知り、尾行や監視を行う技量を持った者。死んだ者の中に、一人だけいる。

「宿の主人だ、カレン。名は知らないがな。名乗る気もないらしい」
彼はただ一人、カレンの偽装を破る糸口を持った人間だった。なぜ、忘れていたのか。死者が生き返る都市。ずっとそれを見てきて、ネイザンの誰よりも事情に精通していた自分が。

唇を噛み締めた。ただ純粹に、気付けなかった自分が悔しかった。彼も、隠れ家に戻る手筈だ」

雨が全身を打つ。身体はとくに冷え切っている。握り締めたフエイレンの手だけが、ほのかに温もりを携えていた。

最終話：二人の少女

優しい両親と兄。そして使用人。屋敷にはいつもフェイレンを含んで五人しかいなかった。地方の小貴族でしかないのだ。多くの使用人を抱える余裕も、料理人を雇う余裕もなかった。

それでも、幸せな生活だった。左手――厄手は拘束していたが、心はどこまでも自由で穏かだった。毎日が楽しく、光に満ち溢れてもいた。

だからだろうか。使用人が亡くなった時は泣きに泣いた。フェイレンが物心ついた頃には既に老人と呼べるほどの年齢に達していて、実際フェイレンの祖父の代から仕えていたという。

使用人は、フェイレンの事をいつも『お嬢様』と呼んでいた。兄のアナスイはアナスイ様だった。兄は父の跡を継ぐ人間だったからだろう。

兄が王立学院書士となったのは、使用人がなくなったのと同じ年だった。そして、兄が三都へ行ったのと入れ替わるように、新しい使用人が来た。

新しい使用人は、若かった。三十といったところだっただろう。最初は、兄がいなくなった寂しさを紛らわせてくれた。

だが途中から、新しい使用人が怖くなった。前の使用人とは何かが違う。そう感じたのだ。しかし、それは自分が前の使用人に固執しているからだとも思った。新しい使用人は当然、前の使用人とは違う。同じものを求めるのは間違っているのだ。そう自分に言い聞かせて、フェイレンは使用人と接するようになった。

夜、ふと眼を覚ました時に使用人が部屋にいた。それから先はよく覚えていない。ある日を境に、毎晩のようにそれが続いた。兄はおらず、両親の部屋は遠い。助けを求めようにも、誰もいなかった。誰も助けてくれないならば、自分でどうにかしなければ。そう思い、調理場から包丁を持ち出した事がある。しかし夜になる前に母

に見つかり、叱られた。言葉で助けを訴えようと試みたが、その母の後ろでは使用人が笑ってこちらを見ていた。怖くて言葉が出なかった。

二年間、そんな日々が続いた。いつの間にか、使用人からの暴行には慣れてしまっていた。いや、その時の事を無かった事として自分の中で処理できるようになった。

ある日、兄が帰ってきた。王立学術院書士となってから初めての帰省だった。フェイレンは誰よりも喜んで、兄に飛びついた。

数十日に及ぶ帰省であった。兄が帰ってきてから、使用人が現れなくなった。兄は隣の部屋で寝泊りしている。手を出せなかったのだろう。

しかし、兄が三都に戻る前日に、使用人が部屋にいた。

またか。そんな事しか考えられなかった。使用人の手が身体に触れる。嫌悪感こそあったが、忘れるようにしていた。深い感慨はない。

そこで、立て続けに扉が開いた。使用人がフェイレンの部屋に入るのを見かけて、様子を見に来てくれたのだ。

その瞬間、フェイレン一人が耐えていれば済む話ではなくなった。兄がひどく驚いた顔をしていたのを覚えている。

兄はきつと怒るだろう。兄が勉強のみの人間ではない事はフェイレンがよく知っていた。兄が使用人に手を出す前に自分がやらなくては。そういう焦燥に駆られた。

そして、左手の封を解いていた。机の上にあった万年筆で、紙に一心不乱で線を引いた。

具現化された代行者が、次々と使用人の身体を貫き、斬り裂いた。人間であったと分からなくなるまで、フェイレンは手を止めなかった。兄に抱きとめられた時に、正気に返った。

騒ぎを聞きつけて駆けつけた両親が、その光景を見て悲鳴を上げた。使用人だった肉塊は処分され、最初からいなかった事に父が仕立て上げた。

兄は帰省の日を延ばすと言ったが、フェイレンがそれを断った。兄は三都で頑張っている。その努力の邪魔を自分がしてはいけないと思ったのだ。頑なに大丈夫だと言い張って、兄は予定していた日に戻って行った。

それから、両親からの接し方が変わった。眼にあったのは恐怖だ。表向きは前と同じように優しく接してくれたが、フェイレンの頭を撫でるその手が僅かに震えていた。

しばらくして、ネイザンの学校に通わないか、と言われた。両親の邪魔になっているのは明白だったのだ。自分は家を出たほうがいい、とフェイレンは思った。そして、この都市に来た。

夏のと冬にある長期休暇で故郷に戻った時、やはり両親は優しくった。しかし、どこか他人行儀になっていた。

本当は、気付いていた。両親は自分に帰ってきて欲しくなどないと。しかし、家族ごっこは続けた。たとえ偽物でも、自分に優しく接してくれる人は兄を除けば両親以外にいなかったのだ。

兄は、今フェイレンがネイザンにいる事をきつと知らない。フェイレン宛の手紙が全て故郷の家に届いているからだ。兄が知れば、きつと強く反対する。両親もそれを分かっていたのだろう。だから伝えなかった。フェイレン自身も兄の邪魔をしたくなかったから、返事の手紙にネイザンにいるという事は書かなかった。ただ兄からの手紙は読みたかった。だから故郷には帰った。

ネイザンに来て一年が経つ。そこに、カレンが現れた。

カレンは兄の知人で、王立学術院で同じ研究をしているという。それが憑者だった。兄がフェイレンの憑者としての症状を治すために書士になったのだと、その時に初めて知った。

カレンは強く、しかし優しい。生きている人間で、自分に優しく接してくれる兄以外の存在として、フェイレンの心の中ではいつの間にか屹立していた。

差し出してくれた手も、抱き上げてくれた両腕も、無償の優しさだった。

そして同時に厳しい面も持ち合わせている。観察対象ならば容赦なく切り捨てる。そういう割り切り方が、またフェイレンには魅力的に映った。

カレンの研究内容も興味があった。学校の勉強よりもずっと面白く、複雑で、残酷だった。

カレンの後を着いて行くと、様々な発見があった。本当に面白い日々だったのだ。だが、暴動の過程で見た光景。それと過去の体験が重なって見えた。

カレンが激しい争闘を繰り広げたようだが、それもよく覚えていない。ただ、肺腑を衝かれたような衝撃が、いつまでも消えない。そんな状態が続いた。

ただ、途中でネロが現れた。そこで初めて我に返ったのだ。やっぱり、カレンが手を引いてくれていた。この人は変わらないし、いなくならないのだ。そう思った。

なら、この人に着いて行こう。それは数日前の夜に発した「行きましょう」という言葉とは違った。

話をする間、カレンはフェイレンの眼をずっと見つめ、ネロは部屋の隅で何かを待つような仕草を繰り返していた。

「すみませんでした、役に立たなくて」

「いや」

つまらない話をしたとフェイレンは思ったが、カレンの表情はいつもと変わらない。

包囲を受け、何をしても逃げるのは賭けになる。そういう状況からネロに助け出され、一日が過ぎた。

もう、噴水のある広場に足を運ぶ事もなくなった。暴動は始まっ

ているのだ。ネイザンの混乱は、これからもっと酷くなる。

雨脚は昨日よりもさらに強まっていた。もう、眼前さえ定かではない程だ。

新しい隠れ家で、誰かを待っている。その誰かは、カレンにも分からない様子だった。ネロだけが知っているらしく、外を気にしている。暴動への警戒もあるのだろう。

「君は二年間も、耐えていたのか」

「でも、辛いという感じはしませんでしたよ。だって、よく覚えてないんです。きっと嫌だったからでしょうけど」

例えるなら、自分の中にもう一人の自分がいた。そちらが、全て嫌な事を引き受けてくれた。そんな感覚だった。

カレンと出会ったの数日間で、そういう自分が再び頭をもたげて来たのは感じていた。しかしそれは、耐えるためではないという気がする。いや、そもそももう一人の自分は耐えるために存在したのではないのかもしれない。歪んでしまった何かが形を持った。そういうものなのかもしれない。耐えるために生まれたのではなく、耐えている過程で零れ落ちたものがあったのだ。

「今の私にとっては自分の過去より、カレンさんの役に立てなかった事のほうが辛いです」

カレンが驚いたような顔をする。こんな表情も出来るのか、とフエイレンはまじまじと観察してしまった。

この人は気付いていない、とフエイレンは思う。研究以外には何処までも優しく人間らしい。そういう側面を自分が持っているという事に、カレンは気付いていない。いや、気付こうとしていない。カレンの過去にもまた、何かがあったのだ。それが、自分を研究一筋であろうとする。それは強迫観念にも近いものだ。

「言っただろう、カレン。フエイレンとお前は似ていると」

フエイレンもまた、過去を押し殺して、兄を慕うただの凡愚な妹であろうとした。誰に言われたわけでもなく、自分にそれを強いた。何かを自分に押し付けてきた。そういう面では、同じなのかもしれ

れない。

「何かを憎んだりしなかったのか、フェイレン」

「憎むにも、使用人はもういません。厄手を憎むにしても、それはウルガー族の血だから仕方が無いという思いのほうが強かったです。そういう対象はなかったなあ」

カレンが眼を瞑る。何かを深く考えているように見えた。

そんなに深刻な話ではない、とフェイレンは考えていた。こうして自分は生きているのだ。そして兄の他に、慕える人が出来た。それ以上を望むのは不遜というものだ。

「カレンさんはすごく優しい人です。私はそれだけで満足できてるんですよ」

言葉が出ない。カレンはそういう顔だった。

ネロが笑い声を上げる。ネロがこうして感情を表に出したのは初めてではないか。

「ネロさんが笑う事もあるんですね」

「そうらしい。本当に愉快だった、今のは。カレンが優しいとはな。捕えた兵の爪と肉の間に、何の感情もなく刃を着き立てた女が」

「確かに考えてみれば残酷ですけど……私には、すごく優しくかったです」

またネロが愉快だと言いながら笑った。

今までずっと、研究者としてのカレンしか見て来なかったのだろう。そうではない側面も確かにあったのだ。思い返せばいくつか浮かんでくる。

「フェイレン、君はまだ着いて来るか？」

「駄目だと言われない限りは、そうしたいと思ってます」

そうか、とカレンが小さく呟いた。一度顔を伏せ、フェイレンの眼を見つめてくる。その眼は、さっきまでの困っているカレンではなかった。研究者、或いは観察者。鷹の眼である。

「昨日、ネロが私達を助け出してくれた」

「はい」

「ネロに、私達が包囲を受けていると知らせた人物がいる。宿の主人、とだけ名乗ったそうだ」

「あの時の」

最初の襲撃で、宿の主人は確かに死んでいた。後頭部から矢が突き抜け、眼球から鏃が飛び出していたのだ。机の下に隠れていたフェイレンはそれを確かに目撃している。

「死人だから、今まで候補から除外されていたんですね。けどここは、死者が蘇った都市」

「そういう事だ。ミラーの兵が宿を襲った以上、ミラーと主人が繋がってるのは間違いない。だから主人が生き返っていたとしても、おかしい話ではないだろう」

話を聞いてしまえば、何故失念していたのだろうと考えてしまう。しかし、そういうものなのだ。小さな見落とし。それが命取りとなる。

「この隠れ家は、主人を名乗る男が用意してくれたものだ。もしかしたら、罠に飛び込んだ可能性もある。しかし、他に当てはなかった」

「いざとなれば、力づくで」

「突破する」

フェイレンの代行者、カレンの物質転移、ネロとその部下の援助があれば、脱出できる可能性は十分にあった。分の悪い賭けではない。

ネロが外を気にしているのは、襲撃を警戒しての事なのだろう。

五名の部下も、姿が見えないところにいるはずだ。

「そろそろ約束の刻限だ。じきに主人と名乗る男が姿を現すだろう。それまで私達はここにいます。それしか出来ない」

「終わりが近い、という気がします」

「私もだ」

雨脚は弱まる事を知らない。南方に長く住んでいるフェイレンにとっては、どこか不自然さを思わせる雨だった。

もし、この雨さえも作為的なものとすれば。誰かの意図を含んだ雨なのだとすれば。

（さすがにそれはないかな）

天候を操作するなどというのは憑者にしても力が大きすぎるのではないか、とフェイレンは思い直した。

そんな事が出来るのはきっと、神くらいのものだろう。

*

扉を開く音が、沈黙を破った。合羽に頭まで身を包んだ者が一人、水を滴らせながら隠れ家に踏み込んでくる。

ネロもカレンも、わざとらしくない程度に警戒しているのが分かった。フェイレンにそういう事はできない。ただぼんやり眺めていた。

「カレンさん、お久しぶりでございます」

男が深々と頭を下げる。隻腕となっている。眼球も一つ失われていた。しかしそれは、紛れもないあの、宿の主人だった。

「そちらはネロさんですね。私の事は存じておられないでしょうが、私は幼い頃に一度だけお目にかかっております。前代の懐剣の統率者であられた方とは、仕事を共にした経験がありますので」

ネロが小さく頷いている。言葉は年下であるカレンやネロに対してどこまでも丁寧だが、王立学院に関わってきた年月は誰よりも長いのだろう。

「元調査員、いや懐剣か。ならば、如何なる理由があるかと任務の内容を漏洩するのは許されたいはずだが」

「生前は、です。私はもう、死んだ人間なのです」

死して、任務から、懷劍の掟から自分は解放された。主人はそう言っている。

「フェイレンさん、貴女には見苦しい死に様を見せてしまったようです。どうか、ご容赦を」

「大丈夫です」

主人が全員に声をかけた。カレンがそれを見届けて、座るように勧める。何処までも低姿勢な男だった。ネロも警戒の必要が無くなつたと判断したのか、主人と並ぶように腰を下ろす。カレンとフェイレンが並び、それと机を挟んで向かい合うように主人とネロがいた。

「カレンさん、私がこうして現れたのは、貴女に生きて欲しいと思つたからに他なりません」

「生きて？ 私は死ぬ定めだったのか」

「王立学院院長の思惑では、そうなっております」

鷹の眼の頂点に立つ者。それが王立学院院長だ。

なぜ、身内であるカレンがそんな人間に狙われるのか。仮に殺意を抱くような事があっても、このような回りくどい方法を使った理由が分からない。

「カレンさん、貴女の研究は要約すると、憑者の発生ですね」

「そうだ。私はそれを調べるために鷹の眼となった」

この話は、まだ宿の主人が生きていた頃に、この主人が経営していた宿で聞いた。

「そしてカレンさんは、神を探した。憑者を作り出した何かがいるのではないかと」

「私の言う神と宗教で言う神とは違うがな。他に相応しいと思える名称が見つからなかったのだ」

後天性の憑者は妄執に囚われ、人間に対して害悪しか生み出さない。まるで悪魔のようだ。

先天性の憑者は自らの力を理解し、一生使わずに、表に出さないようにしている。それを後天性の憑者と対の存在として天使と仮定

した。

それがカレンの根底にある思想だと聞いた。

「自らを神と考えた者にとっては、神は別にいると考える者は目障りではないでしょうか」

「院長が、自分を神だと考えているという事か？」

「数百年生き続け、王立学院を設立した方でいらつしやいます。いつからあのお方がおられたのかを知る者は、一人としておりません」

数百年生き続ける。

（不死？）

憑者でも、そんな力は存在しているのか。

「院長の力は誰も知らないのだ、フェイレン。ただ、人の形を保っていない。それだけが言える。憑者は多くの場合、身体的に特徴が出るものだ。一般的には、人型から離れるほど強い力がある」

「院長さんはどんな力を？」

「完全記憶か、それとも別な何か。分からない」

頭部が著しく巨大化し、それを支えるためか極端に四肢が太く、掌や足が広い。全身に体内にある何かが浮き出しているように見えて、それは五臓六腑を思わせる。まるで全身の皮がない奇形だ、とカレンが説明してくれる。

「私も、あのお方の力を存じているわけではございません。ただ、懐剣として忠誠を誓っております」

「その忠誠は、死と共に消えたのか？」

「消えたわけでは。墓場に置いてきた、とでも申しておきましょう」
主人とカレンの間には、十分な信頼関係があるとあの日に感じていた。その信頼のために、忠誠を置き去りにしたのか。

「何処までお知りになったのでしょうか？」

「捕えた兵から、ミラーは鷹の眼への怨恨を抱いている。そもそも二十年前に姿を消したというのが虚構である。という二つくらいしか聞き出せていない」

「そう。ミラーさんが牢獄から開放されたのは四年前。鷹の眼の網に引っ掛かるすぐ前の話です。それまではずっと、牢獄に」

「そんな牢獄が何処にある」

「ネロさんも、知りはないでしょう。懐剣の一部とあのお方しか場所を知らない牢獄が、三都にはあるのです」

そんなものは知らない、とばかりにネロが小さく首を横に振った。十六年間、妄執に囚われながら何も出来ずに苦しむだけの生活をミラーさんは送っておられました。あのお方は『いつか使える』と私やネロさんの御爺様に申されました。ミラーさんを捕えたのは、私や前代の懐剣の統率者だったのですよ」

まるで過去の清算だ、とフェイレンは思った。全てが過去に起因しているのだ。カレンやネロは何も知らされていない。

「ネイザンを巨大な実験場にするのは、本当の話でした。それは潜り込んだ調査員達が克明な記録を取っているでしょう」

「私を送り込む事から、そもそも偽りであったと」

「いえ、そういうわけではないのです。あのお方の中には、カレンさんに対する期待と恐怖が渦巻いておりました」

「ここで死ねば、それはそれでいい。死ななかったところで真相は分からず、また調査員以上の報告が期待できるから、継続して鷹の眼として使い続ける。そういう事なのでしょうか」

主人が小さく微笑み、フェイレンの頭を撫でた。

「聡明な子です、本当に」

帽子の上からだが、主人の手は冷たいとはつきりと分かった。この人は、本当にもう生きていないのだ。

「私がミラーさんに蘇生させられる。数十年間近い続けた忠誠は、僅かですがあのお方の眼を曇らせました。だから私は、こうしてカレンさんに真実を伝える事ができる」

「主人が引退後、ネイザンで宿を始めた所から全て仕組まれていたのだな」

「その通りです。カレンさんが王立学術院に来てすぐ、院長はミラ

「さんの解放を決意されました。四年前に計画され、こうして実行されている。私は四年前からカレンさんがネイザンに来て私の宿に泊まる事を知っていたのですよ。共に仕事をしたのは二年程度でしたが、いつは私はこの方を裏切るのだ、と思い続けてきました。しかし懐剣であった頃は、深く悩む事もせず」

王立学術院長は、カレンを一瞥しただけで有能さと危険性を察知し、どう扱うかを決めた。それが数年越しの計画であっても。フエイレンには想像もつかない事だった。

「私はカレンさんの情報をミラーさんに伝え、襲撃の過程で死亡する。人生最後の任務でした。そしてそれは全うした、と私は思っています」

「任務は確かに終わっている。そこから何をしようが、それは自由だ」

ネロが口を挟んだ。懐剣としての忠誠は、そこで果たされている。懐剣であるネロから見ても、そう判断された。

「私を除けば、全てがあのお方の掌の上です。そしてミラーさんの決起は、無かった事になる。調査員の記録だけが院長の手元に残る。そういうふうに出ていきます」

主人の視線が初めて、フエイレン、カレン、ネロ以外に向けられた。窓の外。異常だと思えるほどの豪雨だ。

「よく、時季まで計算された。ミラーさんが軍を集めるまでの時間などいくら掛かるか、私には及びもつかなかったというのに」

「まさか。院長は、四年後の豪雨まで把握していたというのか」

「いえ、さすがにそこまでは。院長は未来予知の憑者ではないはずですから。ただ、王立学術院長に代々忠誠を誓う一族がいます。ネロさんの一族もまた同じく。その者達ならば或いは」

こつり、とネロが机を拳で叩いた。

「五行の。噂でしかないと思っていたが」

ネロの言葉に、カレンがはっと顔を上げる。

「五行の一族。実在するのか、そんなものが」

万物を構成すると考えられた五つの要素、木、火、土、金、水。それが五行である。フェイレンも本で読んだ事があった。

憑者などという異能の類で、最古から存在したと考えられるのはこの五行だろう。何もないところから火を生み出す人間、などだ。「私も直接眼にしたわけではありません。ただあのお方から一度だけお聞きしたのです」

「五行の者。水を司る力を持っているのなら」

「これほどの豪雨を一から作り出す事は難しいでしょう。しかし、豪雨を増す事はできると私は考えております」

五行の一族が存在するとして、なぜ豪雨を更に強めるのか。

理由は一つしかない。ネイザンのすぐ横を通る大河、ロクネ河の氾濫である。ネイザンは激流に飲み込まれ、ミラーの真実に気付いた民も、そうでない民も、ミラーの軍も、それと対峙した地方軍も、全て洗い流され、無かった事になる。いや、歴史の闇に消える。ロクネ河の大氾濫という歴史に。

「都市の外の地方軍は一万に達しておりません。雨に難渋して進退窮まってもいる。彼らは全て激流に飲み込まれるでしょう。そして、城壁に守られたネイザンの民もその大部分が。それだけの人が消えれば、ロクネ河の氾濫に付属して作り上げられたちよつとした伝承。その程度の存在になるのですよ、この実験場は」

カレンは「鷹の眼に国防の義務はない」と言った。しかし、危機を察知しながら黙認したとなれば、追求を免れないだろう。王立学術院長は、氾濫でそれを洗い流そうと考えている。そして、その時は近い。誰にも止める事は出来ない。氾濫はもはや既定の事実に近いものだった。

「あのお方は、いくつもの事を同時に進められる。感染する憑者の観察も、カレンさんの始末も、全てが複雑に絡み合って出来上がっている。氾濫という手段を以って追求する事もできなくしている。カレンさんが生きて三都に戻り、あのお方を糾弾した所で誰も取り合ってはくれないでしょう。真実を知って生き延びる可能性がある

のは、ここにいる皆さんだけなのですから」

様々な事を絡み合わせ不明瞭にし、利するのは己のみ。天災を以って証左を払い、残った者達は何一つとして逆らう手段が残されていない。全てが計算され、狂いなく遂行されている。

「王立学術院を設立し、多くの眼を持ちあらゆる研究を行わせ、情報を集めた。あの方が知らぬ事は、おそらくこの国の誰もが知らないでしょう」

「まるで神だ。私にそう思わせたいのだろう、院長は」

主人が黙って頷く。

「私に本当に神だと思って欲しいわけではない。心のどこかにそういう思いを植えておきたい。たったそれだけか」

驚くほどの頭脳。王立学術院を作り上げた手腕。どれを取っても驚嘆に値する。

しかし、小さな利己心を持ち合わせている。そして、宿の主人という要素を見逃した。

「神に値しないな、院長は。長生きした化物に過ぎん」

「そう仰るだろうとは、考えておりました」

カレンが不敵に笑った。何か面白いものを見つけた、というような顔だった。

「神を見つけてやるさ。それとも、私が院長を超えるか。いずれにしろ、これは王立学術院院長からの挑戦だろう。受けて立つしかない」

「あのお方は、カレンさんが生き延びたからと言って研究を阻害したりはしないのでしょうか。器の大きさもまたお持ちです」

「研究には研究で。論破されたからと言って拳を突き出しているとは話にならない。院長はそれが分かっているいな。だから私を消そうと考えた。神でもなんでもない、ただ愚者だ」

挑戦してくるのなら、同じ舞台に立ちそこで打ち破ってやる。カレンはそう言っている。

（私も、その力添えを出来たら）

カレンに着いて行く。フェイレンはそう決めていた。彼女の研究を傍で手助けしたい。そのために、調査員にでも鷹の眼にでも懐剣にでもなる。初めて抱いた、夢のようなものだった。

「あのお方は、厳しいお方です。もう一手、残されている」

「ミラーか」

「そうです。これを、お持ちしました。宿に置き忘れたものです。それに身を纏い、ミラーさんの陣営をお尋ねください。戦で死ぬという願いは、ミラーさんは叶えられませんでした。せめて戦って死にたい。そう考えておられます。十六年間、私はミラーさんを見続けてきました。どうか、最後の手向けをお願いしたい。英雄への手向けを。そして、彼の友人としても頭を下げさせて頂きたい」

王立学術院書士の制服だった。最初の襲撃を受けた日に、カレンはあれを手取る暇もなかったのだ。

ミラーの作り出した戦場は氾濫に飲み込まれる。このままでは洗流され、無かった事にされるのを座して待つだけになってしまう。「貴女の事も、私は友人だと思っておりました。年は離れ、それこそ父子のような差でしたが。どうか、生き延びてください。老骨は静かに眠る事に致します」

主人が立ち上がる。合羽を再び着て、再び深く頭を下げて出て行った。豪雨に紛れて、すぐにその姿は見えなくなった。

「私も、友だと思っていたよ、主人」

カレンが鷹の眼の制服を身に纏う。黒地に金糸の刺繍。胸元で翼を広げる鷹。

「ネロ」

「分かっている」

ネロが鳥の鳴声のような音を出した。あれは口笛だったのか。五名の部下に合図を出したのだろう。氾濫を逃れられる場所を探すためだ。

「行こうか、フェイレン」

手が差し出される。白くて細く伸びたカレンの指。

フェイレンはそれを、強く握り返した。

*

軍営は、ネイザンの西門付近に作られていた。話は通してあったのが、鷹の眼の制服を眼にただけで、兵達が道を明けた。カレンを先頭にして、フェイレンとネロはその後を歩いた。

近衛軍旗。あまり風はないが、豪雨の中に翻っていた。そこが、ミラーの居場所だ。

カレンは臆する事なく胸を張って進んでいた。兵達も直立している。死体ではあるが、指揮の行き届いた軍だった。

近衛軍旗の掲げられた幕舎の前には、二人の兵が戟を携えて立っている。カレンを見ると、何も言わずに入り口を開いた。幕舎の中に、大きな卓が見えた。そして張り出されたネイザンとその周辺の地図。幕舎内に入った瞬間、頭を打つ雨粒の感覚が消える。ずっと打たれていたからか、それが返って不自然なものに、フェイレンには感じられた。

「ミラー近衛軍少将か」

「ただの叛乱軍にしか見えないだろう」

「掲げている旗は、近衛軍のものだ」

五千の死兵を指揮し、万余の軍に囲まれながらも一人生き延びた男。しかしその容姿からは、そのような要素をまるで感じる事が出来なかった。どちらかと言えば小柄でもある。

ミラーは具足に身を纏い、腰には剣を佩いている。戟はミラーが手の届く範囲に、無造作に置かれていた。

「皮肉なものだ。内乱を鎮圧した英雄と謳われる俺が、叛乱の徒の

ような有様で軍を率いている。それも、死者の軍だ」

自嘲気味に笑うミラーを見て、フェイレンは何か違和感に襲われた。後天性の憑者は妄執に囚われ、意識も混濁しているという話だった。だというのにミラーは、カレンと何も変わらない。

「戦場で死す。その思いは捨てられないか、ミラー少将」

「十六年間、牢獄で生きた。その間に俺の心にあつたのはそれだけで、開放された後もそうだ」

「君のように、自我をはっきりと保っている者は珍しい。その気になれば、市井で暮らす事も出来ただろう」

「無理なのだ、鷹の眼。俺は最後の最後のところで、戦場で死ぬという夢を捨てられない。何度も何度も、そうしようと試みた。そして気付けば死体を喰らっている俺がいる。不毛な行為を繰り返した果てに、俺は今ここにこうして立っている。尤も、無駄だったようだがな」

結局、戦場では死ねなかった。ミラーの身体から、そういう諦念が滲み出している。

気付けば死体を喰らっている。その度に、ミラーは絶望に身を包んだのだろうか。

「鷹の眼。お前は優秀な人間なのだろう。俺のように人を殺すだけが能なわけはあるまい」

「そうでもない。事柄にもよる」

ミラーが立ち上がる。やはり、小柄だった。カレンとあまり背丈も変わらない。

「ネイザンの民を見る、鷹の眼。利己的な欲求、手前勝手な思い込みのために他人を犠牲にする。俺の事を不平等を打破するために復活したなどとな。しかし俺は憑者となり、自らの戦場を作り出す事をどうしても諦められなかった。妄執に囚われた。俺もまた、奴らと同じだ。己を神だと言ったあの化物もそうだ」

不意に圧力が強くなった。ミラーから発せられるものなのか。手も触れず、武器も構えず、人間はここまで他人に威圧を与えら

れるのか。まるで、喉首に刃を突きつけられているような気分だった。

「全てが醜い。憑者となってから、世の醜さが何処までも浮き彫りになって見えてしまった。俺は、こんな世を守るために五千人の部下を犠牲にしたのか、と思えてならない」

世の醜さ。全てが醜悪に見えてしまう。ミラーの発する威圧感、悲壮と共に幕舎の中を漂っていた。カレンは平然とし、ネロは何を考えているのか分からない。

（私もまた、その醜さの一部なんだ）

心の底にあった思い。このカレンから全てを聞かされた時に抱いた「面白そうだ」という思い。

確かに、止める義理はなかった。しかし、何処かにあったのではないか。自分を迫害した連中など消えてしまえばいい。どうなっても知らない。そういう思念が、頭のどこかにあったのではないか。

ふと、思考が切り替わる。本当に面白かった。そんな言葉が頭を過る。ネイザンを実験場とするのも、カレンやネロを見えない敵を探すのも、民の反応も、面白かった。

（……どっち？）

自分の本音はどっちなのだ。自問自答する。まるで、自分が二人いるような。そんな感覚だった。

「この暴動を見る。男は殺され、女は犯される。獣の巣窟ではないか。俺が救世主などというのも建前に過ぎないのではないのか。大義を掲げ、剣を翳す。しかしそれはくだらない利己心のためだ。結局は自らが抱える不満のはけ口を探して、見つけた。それだけではないのか、鷹の眼。こんな連中を守ろうと本気で考えていた私もまた同罪ではないのか。皆死んだほうがいい。だから私は、城門に民が集った時に一斉掃射の命令を出した」

一つ一つのミラーの言葉が、限りなく重たかった。悲痛な叫びのように聞える。

自分はこんなものを守るために戦って、多くの部下を殺したのか。

守ろうとした対象がそもそも守るほどの価値があったのか。

そういう叫びだ。

「結局、誰が正しくて誰が間違っていたのだ。愚かな人間も、それを守った私のような人間も。誰一人として正しくはないのではないか」

フェイレンを性欲のはけ口にした使用人、全てを抹消して邪魔になったフェイレンを追い出した両親、事実を知らながらネイザンを見捨てたフェイレン、実験場である事を知りながらそれを笑って眺めていたカレン、自らの都合のために偶像を作り出そうとし暴動を起こした教師、教師の言葉を盲信した民。どれも同じだ。全てが間違っている。自らの欲望のためだけに動いている。

「ミラー少将。私はな、この物語を綺麗に終わらせるつもりはない。ネイザンで起きた物語だ」

カレンの言葉は、どこまでも無感情で、冷徹だった。研究対象に発せられた言葉。

「私がここに辿り着いたのは何故だと思う。私を邪魔した者の姿が見えたからだ。そうでなければミラー少将、君の事情など知りはない。民の命など道端の石ころ程度の価値しかない。私はな、そういう人間なんだよ、ミラー少将。自らの研究を第一とし、その他は研究材料、或いは無価値な屑だ。だからな、ミラー少将。君の懊悩など、私の知った事ではないのだよ」

ミラーが眼を見開く。このような答えが返って来るとは思ってもみなかったのか。

「鷹の眼は、人間ではないのだな」

「結構だ。ただ、忘れるな。たった一人だけ、どこまでも愚直に、忠誠と友情に生きた男がいた。それを、忘れるな」

ミラーが戟を手に取る。お前の話など聞きたくはない。動作には、そういう憤怒が込められていた。

（そうだよな。この物語で輝きを放ったのは、たった一人だった）
フェイレンはネイザンを見捨て、カレンもまた同じであり、ネロ

がそこに加わった。目的としたのは外敵の発見、抹消。それだけだ。民がどうなるかと、三人にとっては知った事ではなかった。

そして、フェイレンの過去も、カレンやネロの関わっている過去も、王立学術院も、ネイザンの民も、ミラーも、全てが自分の事しか考えていなかった。

しかし汚泥に塗れたネイザンの中で、たった一人だけ忠誠と友情のために動いた男がいたのだ。名も知らぬ、小さな宿の主人。その人だ。

「もう、ミラーさんには伝わってない」

「自分で言っただろう。あの男もまた、こちら側の人間だ。俺達と同じ」

ネロが、ここに来て初めて言葉を発した。

ミラーは最後に救いを求めようとした。お前は醜くなどない。そう、カレンに言っただけだった。

「どんな理由があろうと、ネイザンを混乱に陥れた。救いという名の罰を安易に求める事など、許されない。私も、そう」

独り言のように、フェイレンは呟いた。それと同時に、ミラーが戟を突き出す。

血。カレンは何も無かったように佇んでいる。

ただミラーの戟が、ミラーの胸を貫いていた。

「戦って死ぬ。叶っただろう、ミラー少将。私は君の問いに答える事は出来ないし、その資格もない。本来ならば、君と真つ向から戦う理由もない。これは宿の主人への敬意だ」

吐き捨てるような言葉だった。

全てが終わった。あまりに突然で、釈然としない終わり方ではあるだろう。だが、こういうものだ、という思いがフェイレンの中には渦巻いていた。

もうすぐ、ネイザンは氾濫に飲み込まれる。醜く歪んだ人間が織り成した物語は全て洗い流される。

「フェイレン、面白かったか？」

カレンが、顔に付着した返り血を拭いながら言う。昨夜の食事はどうだった、とでも聞くような気軽さだった。

「分かりません。どうにも、意見がまとまらないというか。自分が二人いるみたいな感じです」

本当に、分からなかった。自分の気持ちは何処にあるのだろう。

人間の感情が常に単一であるとフェイレンは思わないが、宿の主人やミラーが悲しい出来事であると思う自分もいるし、本当に面白かったと感じる自分もいる。

カレンを慕う自分と、拷問に苦しむ兵を見ていた時の自分も、まるで違うという気が、今更になって湧いてくる。

「考えたければ考えるといい。ネロなどは不思議がつているが、私はそれで良いと思っている」

カレンが歩き出す。その後姿をフェイレンは追った。ネロがその後ろをゆっくりと追ってくる。

こうしてカレンを追っているのは、主人やミラーの死を悲しむ自分なのだな、とフェイレンは思った。

最終話：二人の少女（後書き）

どうも上木です。

物語が終わりましたので、後書きで少しだけお話をしたいと思います。

『鷹の眼と厄手』は、主人公であるフェイレンが自らの二面性を発見するところで終わります。

ミラーが醜いと言ったネイザンの民などの側面、友を想って行動した宿の主人のような側面。フェイレンが心に抱える二面性はこの二つであると、私は考えています。

幼さ故の未成熟さ、幼少期の体験、自らが持つ異能。それらがフェイレンに強い二面性の影を落としていきます。

私は、どちらが正しいとは思っていません。善悪の基準で計れるとも思いません。

どっちもどっち。どちらも悪くないし良くもない。そういうものはなかるうか。などと考えながら私はこの『鷹の眼と厄手』を書いていました。

家族が死ねば、どんな形であろうと悲しむ。しかし隣人が変死でもすれば、悪意こそないかもしれませんが無作法な憶測が飛び交う。

人間、誰しもそういう面を持っているものだと思います。

これは、そういう私の思念から生まれてお話でした。

尤も、私は小説をメッセージツールと考えてはいません。また、そうする事に嫌悪も覚えます。

これは私の個人的な考えですが、小説は娯楽です。小難しい言葉を並べ立てて「この物語から私が伝えたいのは」などと言うのは大嫌いです。物語のあり方は、一人一人の心にあると考えています。だから、読んでくださった皆様はただ純粹に楽しんでいただけると

嬉しいです。

さて。

ここまで読んでいただいて、本当にありがとうございました。
何度でもお礼を言いたいところですが、そういつわけにもいきませ
んののでここで区切ろうと思います。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6364p/>

鷹の眼と厄手

2011年7月21日03時49分発行